鳩原遺跡他発掘調査概要

平成 27 年 2 月

大 阪 府 教 育 委 員 会
河内長野市教育委員会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、東は奈良県、南は和歌山県と接し、古くから交通の要衝として栄えた地域です。特に、市域の南東部の石見川流域では、縄文時代より活発な人間活動が認められます。

大阪府教育委員会と河内長野市教育委員会は、平成22年度より、府営農村振興総合整備事業に伴って、この地域の発掘調査を進めてまいりました。

今回、調査を実施しました鳩原遺跡では、川上神社の下の調査区において、中世の建物跡や井戸などが発見されました。また、大量の瓦が出土したことから、寺院の存在も推測できます。

国道の下の調査区では、縄文時代の竪穴住居跡やお墓と考えられる土坑などを検出し、大量の縄文土器や石器も出土しました。縄文時代の「集落跡」を確認したといえます。

今回の調査成果は、中世においては、現在の鳩原の集落の「ルーツ」ともいえるもので、『観心寺』との関連も示す大変興味深いものです。そして縄文時代の集落の発見は、石見川流域の縄文文化を考える上での、大変貴重な資料を得たといえます。

最後に、発掘調査の実施に際して、ご協力いただきました地元の皆様ならびに関係各位に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府の文化財行政へのご理解とご協力をたまわりますようお願いいたします。

平成27年２月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　荒井大作

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、緑豊かな山々や清らかな河川に恵まれ、旧石器時代から人々の活動の痕跡が認められています。古代では中央政権で活躍する高向玄理がこの地から出ており、今に続く文化の香り高いまちと言えます。中世には、真言宗の一山寺院である観心寺、金剛寺が隆盛を極め、海外にも紹介された烏帽子形城が築城されます。また、近世には、高野山と京都・大坂・堺を結ぶ東・中・西高野街道が市内で合流することに代表されるように交通の要衝として発展してきました。これらのことから、市内には数多くの文化財が遺され、国の指定を受けた建造物や美術工芸品等が85件、史跡が3件にのぼります。

これら先人達のメッセージである文化財を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であると重く受け止めていることから、本市においては、教育立市宣言の一つの柱として「文化財のまち」を位置づけ文化財保護に取り組んでおります。

本書は、大阪府農村整備事業に先立ち実施した鳩原遺跡の発掘調査の成果を収録しています。今回の調査では、中世の寺院跡と縄文時代の住居跡などが確認されました。皆様の文化財への理解を深めていただくと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

調査にご協力いただきました方々に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成27年2月

河内長野市教育委員会

教育長　和田　栄

例　　言

１．本書は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて実施した、府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴う鳩原遺跡（河内長野市鳩原所在)、ならびに鳩原西端遺跡（河内長野市鳩原所在）の発掘調査概要報告書である。

２．発掘調査は、大阪府教育委員会と河内長野市教育委員会が締結した「府営農村振興総合整備事業『河内長野和泉地区』にかかる埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」に基づいて共同で実施した。

３．現地調査は、平成25年度に、大阪府教育委員会事務局文化財保護課調査第二グループ主査（調査時）小林義孝、同　副主査　林　日佐子、河内長野市教育委員会事務局ふるさと文化課　大江綾子を担当者として実施した。発掘調査は、１区を大江、２・３区を林、４・５区と鳩原西端遺跡を小林が担当した。

４．整理作業は、平成25・26年度に、大阪府教育委員会文化財調査事務所および河内長野市立ふるさと歴史学習館において、調査管理グループ主査　三宅正浩（平成25年度)、同　小浜成（平成26年度)、副主査　藤田道子、ならびに林、大江が担当して実施した。

５．調査番号は、鳩原遺跡は13028（大阪府教育委員会)、HHH13-001（河内長野市教育委員会)、鳩原西端遺跡は13035（大阪府教育委員会）である。

６．鳩原遺跡の写真測量は、株式会社ジオテクノ関西に委託した。撮影フィルムは、同社にて保管している。

７．本書に掲載した遺構写真の撮影は、各担当地区にて、林、小林、大江がおこない、遺物写真は、有限会社阿南写真工房に委託した。

８．出土遺物と記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。

９．本書の執筆は、林・小林・大江が分担し、編集は、林がおこなった。

10．発掘調査・遺物整理および本書作成にあたっては、下記の方々および研究会から、御指導・御教示ならびに御協力をたまわった。記して感謝いたします。(五十音順・敬称略)

　　上峯篤史・千葉 豊・矢野健一・関西縄文文化研究会

11．発掘調査、遺物整理、本書作成に要した経費は、事業者である大阪府環境農林水産部と発掘調査にかかる地元負担分相当額を文部科学省の補助を得て、大阪府教育委員会が負担した。

12．本書は300部作成し、一部あたりの単価は886円である。

凡　　例

１．本書で用いた座標値は、世界測地系に基づく。挿図中の方位は座標北を示す。水準値は、T.P.値（東京湾平均海面値）を用いている。

２．本書で用いた地層の土色ならびに土器の色調については、『新版　標準土色帖（2003年版)』(小山正忠・竹原秀雄編・著　農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

３．挿図と写真図版の遺物番号は、１区と２・３区で各々１から順に通し番号を、写真のみ掲載した遺物についても、同様に①から順に通し番号を付けている。

目　　次

序文（大阪府教育委員会）
序文（河内長野市教育委員会）
例言
凡例
目次
挿図目次
図版目次

第１章　調査にいたる経緯・経過と歴史的環境
　第１節　調査にいたる経緯……小林義孝　…… 1
　第２節　調査の経過と方法……林 日佐子 …… 3
　　（１）調査の経過　（２）調査の方法
　第３節　歴史的環境……大江綾子　…… 6

第２章　鳩原遺跡の調査成果
　第１節　１区……大江　…… 7
　　（１）層序　（２）遺構と遺物
　第２節　２区…… 林　…… 18
　　（１）層序　（２）遺構と遺物
　第３節　３区…… 林　…… 46
　　（１）層序　（２）遺構と遺物
　第４節　４・５区……小林　…… 50
　　（１）４区　（２）５区

第３章　鳩原西端遺跡の確認調査
　第１節　調査概要……小林　…… 52
　第２節　調査成果……小林　…… 53

第４章　総括
　第１節　縄文時代…… 林　…… 54
　第２節　中世……大江　…… 56

図版
報告書抄録

挿図目次

図１　鳩原遺跡・鳩原西端遺跡　調査区　位置図 …… 2
図２　鳩原遺跡　調査区　配置図 …… 3
図３　鳩原遺跡　地区割図 …… 5
図４　鳩原遺跡と周辺の遺跡 …… 6
図５　１区　東西アゼ１　南壁　土層断面図 …… 8
図６　１区　東西アゼ２　南壁　土層断面図 …… 8
図７　１区　検出遺構　平面図 …… 9・10
図８　瓦溜まり　平面図・断面図 …… 11
図９　１区　検出遺構　平面図・断面図（１） …… 12
図10　１区　検出遺構　平面図・断面図（２） …… 13
図11　遺物　実測図（１） …… 14
図12　遺物　実測図（２） …… 15
図13　2区　調査区南壁・西壁・北壁　土層断面図 …… 19・20
図14　2区　平面図 …… 22
図15　2区　検出遺構　平面図 …… 23
図16　2001竪穴住居・2058土坑（炉）・2067土坑　平面図・断面図 …… 25
図17　2071土坑・2072土坑　縄文土器出土状況　平面図・断面図 …… 26
図18　2068竪穴住居・2002土坑　平面図・断面図 …… 27
図19　2007・2011・2013・2014・2027・2040・2045・2046土坑　平面図・断面図 …… 29
図20　2003・2009・2010・2016～2019・2021～2023・2030・2050土坑　平面図・断面図 …… 30
図21　縄文土器　実測図（１） …… 34
図22　縄文土器　実測図（２） …… 35
図23　縄文土器　実測図（３） …… 36
図24　縄文土器　実測図（４） …… 37
図25　縄文土器　実測図（５） …… 38
図26　縄文土器　実測図（６） …… 39
図27　打製石器　実測図（１） …… 41
図28　打製石器　実測図（２） …… 42
図29　打製石器　実測図（３） …… 43
図30　磨製石器　実測図 …… 44
図31　3区　調査区東壁　土層断面図 …… 47
図32　3区　平面図 …… 48
図33　石刀　実測図 …… 49
図34　石刀出土状況　平面図・断面図 …… 49
図35　４・５区　平面図 …… 51
図36　鳩原西端遺跡　トレンチ配置図 …… 52

図版目次

図版１　１区　調査区全景
　　a　調査区南半部（北から）
　　b　調査区北半部（東から）
図版２　１区　土層断面
　　a　東西アゼ１　土層断面（南から）
　　b　東西アゼ２　土層断面（南から）
　　c　西壁　土層（南東から）
図版３　１区　検出遺構（１）
　　a　1003井戸　土層断面（西から）
　　b　1001土坑　検出状況（南西から）
　　c　1001土坑　土層断面（西から）
図版４　１区　検出遺構（２）
　　a　1008ピット　検出状況（東から）
　　b　1008ピット　土層断面（東から）
　　c　1004ピット　検出状況（東から）
　　d　1004ピット　土層断面（東から）
図版５　１区　検出遺構（３）
　　a　瓦溜まり　検出状況（西から）
　　b　瓦溜まり　掘削状況（北東から）
　　c　瓦溜まり　東西アゼ東半部　土層断面（北から）
　　d　瓦溜まり　東西アゼ西半部　土層断面（北から）
図版６　１区　検出遺構（４）
　　a　1010石列　土層断面（南から）
　　b　集石遺構　南北アゼ　土層断面（東から）
　　c　集石遺構　東西アゼ　土層断面（北から）
　　d　集石遺構　南北アゼ　土層断面（西から）
図版７　２区　土層断面（１）
　a～d　南壁（東部～中央部）土層断面（北から）
図版８　２区　土層断面（２）
　a・b　南壁（中央部～西部）土層断面（北から）
　c・d　西壁（南部～中央部）土層断面（東から）
図版９　２区　土層断面（３）
　　a　西壁（北部）土層断面（東から）
　b～d　北壁（西部～東部）土層断面（南から）
図版10　２区　検出遺構（１）
　　a　遺構検出状況（南西から）
　　b　検出遺構　全景（東から）

c　検出遺構　全景（南から）

図版11　２区　検出遺構（２）

a　2001竪穴住居上面　縄文土器　出土状況（西から）

b　2001竪穴住居上面　敲石　出土状況（東から）

c　2001竪穴住居上面　台石等　出土状況（南東から）

図版12　２区　検出遺構（３）

a　2001竪穴住居　埋土（南西から）

b　2001竪穴住居　検出状況（北西から）

c　2001竪穴住居　検出状況（北東から）

図版13　２区　検出遺構（４）

a　2001竪穴住居・2067土坑（北東から）

b　2071土坑・2072土坑　検出状況（北西から）

c　2058土坑（炉）埋土（南東から）

d　2058土坑（炉）・2067土坑　埋土（北から）

図版14　２区　検出遺構（５）

a　2002土坑（西から）

b　2002土坑　埋土（南東から）

c　2002土坑　埋土（北から）

d　2002土坑　縄文土器　出土状況（南から）

図版15　２区　検出遺構（６）

a　2068竪穴住居　周溝（北西から）

b　2013土坑（北東から）

c　2040土坑（南から）

図版16　２区　検出遺構（７）

a　2007土坑（北東から）

b　2011土坑　埋土（北東から）

c　2014土坑（南西から）

d　2030土坑　埋土（北東から）

e　2027土坑（南東から）

f　2045土坑（南から）

図版17　２区　検出遺構（８）

a　2023土坑（北西から）

b　2017土坑　埋土（北東から）

c　2018土坑　埋土（東から）

d　2022土坑　埋土（東から）

e　2050土坑　埋土（北から）

f　2046土坑（南から）

図版18　３区　土層断面

a～d　東壁（南部～中央部）土層断面（西から）
図版19　３区　遺物出土状況
a　石刀出土地点（北西から）
b・c　石刀出土状況（西から）
図版20　４・５区　全景・土層断面
a　４区　全景（南から）
b　４区　西壁　土層断面（東から）
c　５区　全景（北から）
d　５区　谷状地形　土層断面（東から）
e　５区　西壁　土層断面（東から）
図版21　鳩原西端遺跡　全景（１）
a　調査地　全景（北東から）
b　④トレンチ　全景（南西から）
c　③トレンチ　全景（南東から）
d　②トレンチ　全景（南東から）
e　①トレンチ　北西部（南東から）
図版22　鳩原西端遺跡　全景（２）
a　⑤トレンチ　全景（南から）
b　⑤トレンチ　東壁　土層断面（南西から）
c　⑥トレンチ　全景（西から）
d　⑥トレンチ上段　全景（西から）
e　⑥トレンチ下段　全景（北西から）
f　⑦トレンチ　南部（北から）
図版23　１区　出土遺物（１）
a～d　1003井戸　出土
図版24　１区　出土遺物（２）
a・b　1001土坑　出土
c～e　1070土坑　出土
図版25　１区　出土遺物（３）
a　1008ピット　出土
b　1078土坑　出土
c　1206土坑　出土
d　瓦溜まり被覆土　出土
図版26　１区　出土遺物（４）
a　1003井戸　出土
b　1001土坑　出土
c～e　平面精査出土
図版27　１区　出土遺物（５）
a・b　1003井戸　出土
c～e　瓦溜まり　出土

図版28　１区　出土遺物（６）
　　a　1003井戸　出土
　b・c　瓦溜まり　出土
図版29　１区　出土遺物（７）
　a・b　瓦溜まり　出土
　c（右）平面精査出土
　c（左）1070土坑　出土
　　d　平面精査出土
図版30　２区　出土遺物（１）縄文土器
　a・b　2001竪穴住居　出土
図版31　２区　出土遺物（２）縄文土器
　a・b　2001竪穴住居　出土
図版32　２区　出土遺物（３）縄文土器.
　a・b　2001竪穴住居　出土
図版33　２区　出土遺物（４）縄文土器
　　a　2071土坑・2072土坑　出土
　　b　2068竪穴住居　出土
図版34　２区　出土遺物（５）縄文土器
　a・b　2068竪穴住居　出土
図版35　２区　出土遺物（６）縄文土器
　a・b　2068竪穴住居　出土
図版36　２区　出土遺物（７）縄文土器
　a・b　2068竪穴住居　出土
図版37　２区　出土遺物（８）縄文土器
　　a　2002土坑・2006土坑・2011土坑・2013土坑　出土
　　b　2014土坑・2027土坑・2030土坑・2043土坑・2067土坑　出土
図版38　２区　出土遺物（９）縄文土器
　　a　2046土坑　出土
　　b　包含層　出土
図版39　２区　出土遺物（10）縄文土器
　a・b　包含層　出土
図版40　２区　出土遺物（11）打製石器
　　a　2001竪穴住居　出土
　　b　2068竪穴住居・2002土坑・2009土坑・2046土坑・包含層　出土
図版41　２区　出土遺物（12）磨製石器
　　a　2001竪穴住居　出土
　　b　2068竪穴住居・2017土坑・包含層　出土
図版42　２・３区　出土遺物（13）石刀・黒色土器・土師器・瓦器
　　a　３区　地山面　出土
　　b　２・３区　包含層　出土

第１章　調査にいたる経緯・経過と歴史的環境

第１節　調査にいたる経緯

大阪府教育委員会では、大阪府農林水産部が実施する府営農村振興総合整備事業「河内長野和泉地区」に伴い、平成14年度より埋蔵文化財についての調査をおこなった。今年度にいたるまでの経緯については、以下の通りである。

まず、平成14年度に、高木遺跡（河内長野市日野所在）の確認調査を実施した。翌、平成15年度には河内長野市高向において試掘調査を実施し、高向神社南遺跡を新規に発見した。

平成19年度には、河内長野市小深・太井地区において、確認・試掘調査を実施した結果、太井遺跡の範囲が拡大した。また、同年、高向神社南遺跡の発掘調査（第１次）を実施した。

平成20年度は、河内長野市川上・鳩原地区において確認・試掘調査を実施した結果、鳩原遺跡の範囲が拡大し、新規に、鳩原東端遺跡と鳩原西端遺跡を発見した。

平成21年度は、奥田井遺跡（河内長野市鳩原所在）の発掘調査を実施した。また、高向神社南遺跡の発掘調査（第２次）と遺物整理を実施し、『高向神社南遺跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2009－６）を刊行した。

平成22年度は、奥田井遺跡・太井遺跡（河内長野市太井所在、小深地区）・高木遺跡の発掘調査を実施した。奥田井遺跡の平成21年度調査分の遺物整理を実施し『奥田井遺跡発掘調査概要Ⅰ』を刊行した。

平成23年度は、太井遺跡（小深地区）において、前年度の調査成果を踏まえて、確認調査と発掘調査を実施した。また、太井遺跡（太井地区）の発掘調査を実施した。

同年、前年度に実施した奥田井遺跡・太井遺跡（小深地区）・高木遺跡の遺物整理を実施し、『奥田井遺跡Ⅱ・太井遺跡Ⅰ発掘調査概要』を刊行した。

平成24年度は、太井遺跡（太井地区）の発掘調査を実施した。また、前年度に発掘調査を実施した太井遺跡（太井地区）の遺物整理を実施し『太井遺跡発掘調査概要Ⅱ』を刊行した。

平成25年度は、鳩原遺跡の確認・発掘調査、鳩原西端遺跡の確認調査を実施した。前年度に発掘調査を実施した太井遺跡（太井地区）の遺物整理をおこない、『太井遺跡発掘調査概要Ⅲ』を刊行した。

平成25・26年度には、鳩原遺跡と鳩原西端遺跡の遺物整理を実施し、本概要報告書の刊行にいたる。

今回報告する鳩原遺跡については、事業者によって当該事業における詳細な造成計画が策定され、掘削・削平の範囲が示されたことから、発掘調査を必要とする範囲を確定するために実施した。鳩原遺跡の確認調査は、平成25年５・６月に、小林が担当して実施した。その結果、川上神社から東にのびる尾根上を中心に、縄文時代と中世の遺構・遺物の存在が確認されたため、それに基づいて発掘調査範囲を決定した。川上神社の直下で１箇所、国道309号の西側で４箇所の調査区を設定した。発掘調査は、平成25年９月から12月までの期間、大江・林・小林が調査区を分担して実施した。

鳩原西端遺跡については、同じく、当該事業により掘削・削平を受ける範囲について、平成25年10・11月に、小林が担当して確認調査を実施した。地山上層の土層はすべて耕作地造成時の盛土であった（図１）。

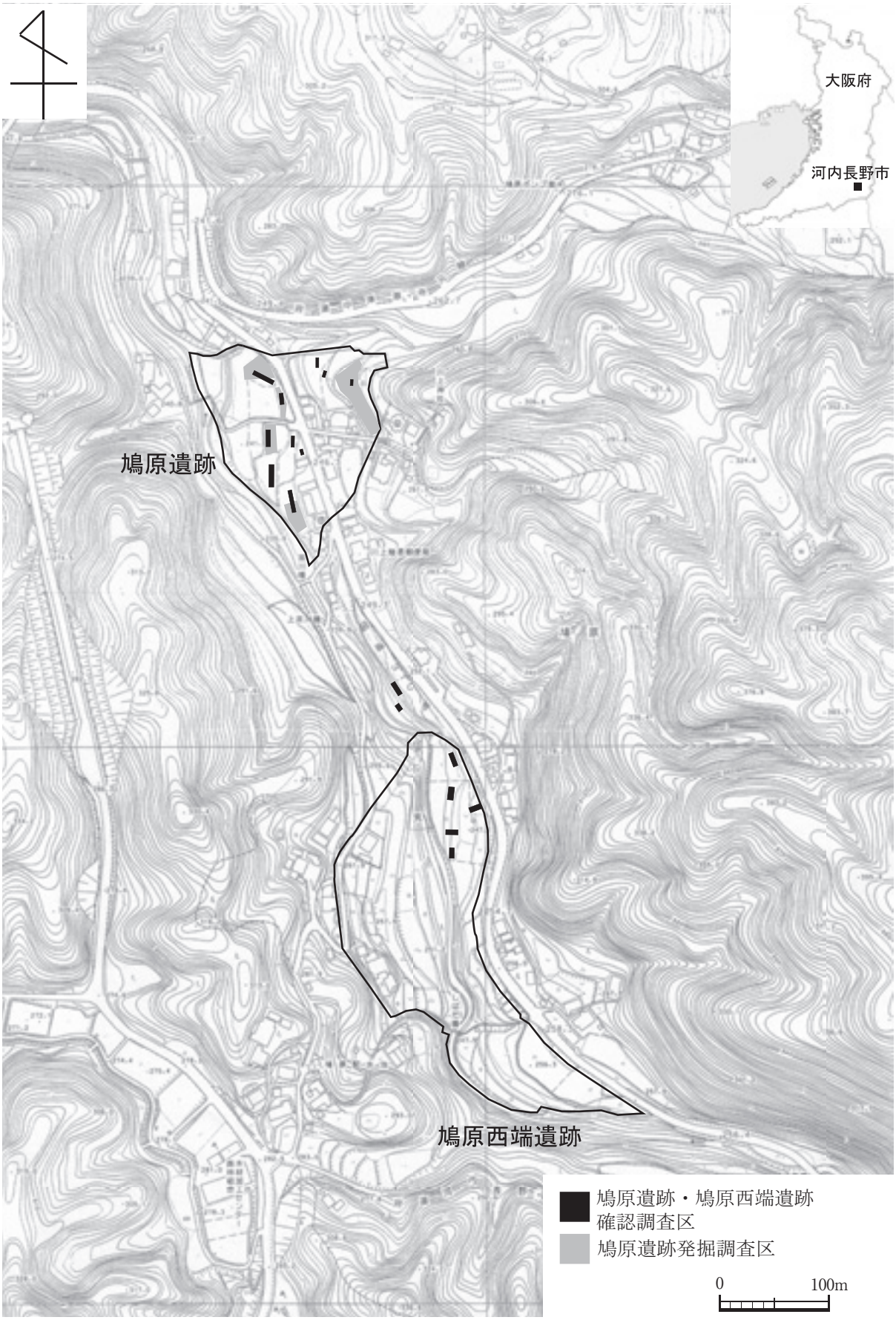


図１　鳩原遺跡・鳩原西端遺跡　調査区　位置図

第２節　調査の経過と方法

（１）調査の経過

発掘調査は、平成25年９月２日に開始し、12月９日に終了した。当該地において実施した平成19年度の試掘・確認調査、および平成25年度５・６月の確認調査の結果を基に、今回の本調査に際して、５箇所の調査区を設定した（図２）。

金剛山西麓から西に向かって延びる尾根上の高所を１区、約50ｍ西の尾根先端部を２区・３区、この15ｍ南西を４区、さらに40ｍ南東を５区とした。調査面積は、１区685㎡、２区339㎡、３区86㎡、４区243㎡、５区263㎡の計1,616㎡である。

発掘調査は、これまでの試掘・確認調査の成果と、調査区ごとの遺物包含状況を観察しながら、現地表面から下層を機械掘削した。深度は調査区ごとに異なる。１区は中世包含層まで、２・３区は近世以降の耕作土である第２－５層まで、４・５区については、精査しながら地山面までを重機で掘削した。１～３区は、機械掘削面から下層について、人力で掘削した。順次、堆積土層ごとの掘削と遺構面の精査

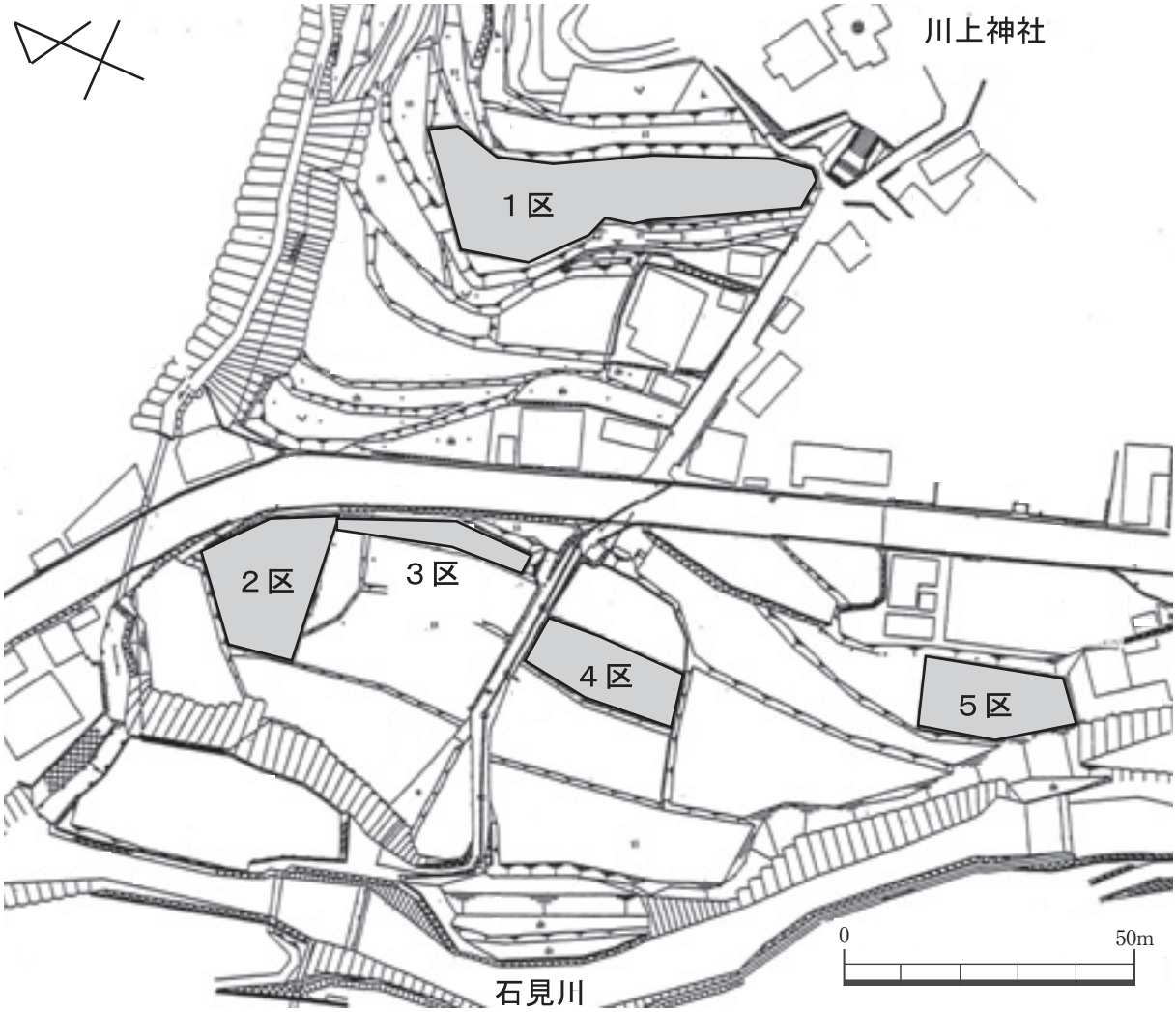


図２　鳩原遺跡　調査区　配置図

をおこない、必要に応じて、実測図作成と写真撮影を実施した。

各遺構面については、検出遺構の全体平面図等の実測図は平板等を用いて作成した。１区は遺構検出面、２～５区は地山面において、測量を委託し、ヘリコプターを用いた空中写真測量と図化を実施した。

調査期間中に、地元住民ならびに府民の方々を対象に、２回にわたって現地公開を実施し、発掘調査の概要説明と出土遺物・写真パネルの展示をおこなった。１区については10月25日に、２・３区については11月23日に開催した。各々40人と120人、計160人の方々の参加を得た。

現地調査終了の後、平成26年度にかけて、出土遺物・図面・写真等の整理作業を実施した。

現地公開（１）

現地公開（２）

（２）調査の方法

地区割りについては、大阪府発行の１万分の１の地形図を基に、４段階の区分を用いている。第Ⅰ区画は南西隅を基準に、縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画する。鳩原遺跡は大阪府の南東部にあたり、Ｃ６区内に位置している。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準に、16等分したもので、縦1500ｍ、横2000ｍの範囲となり、今回の調査区は11区にあたる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として、縦軸をＡ～Ｏ、横軸を１～20に区分したもので、今回の調査区は19Ｄ・20Ｄ・20Ｅ区内にあたる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10ｍ方眼で区画し、北東部を基準として、縦軸をａ～ｊ、横軸を１～10に区分したものである。今回の調査区の北端は（Ｃ6－11－20Ｄ－7ａ）、南端は（Ｃ6－11－20Ｅ－4ｆ）に相当する（図3）。この地区割りに基づいて、実測図の作成や遺物の取り上げ等の現地調査を実施した。

検出遺構の表記方法は、遺構番号を地区ごとに4桁の通し番号を付け、番号の後に遺構の種類を漢字で表記している。1区の場合なら、1001土坑から、２区の場合なら、2001竪穴住居から始め、順次、番号をおくった。2区においては、土坑と表記した遺構の中には、墓坑や柱穴と考えられるものも含むが、確定できないため、遺構の表記としては全て土坑とした。

考古学をはじめとする学術用語や、遺構・遺物の記述方法等は、各調査区の担当者の責任でおこなったため、本書においても統一していない。

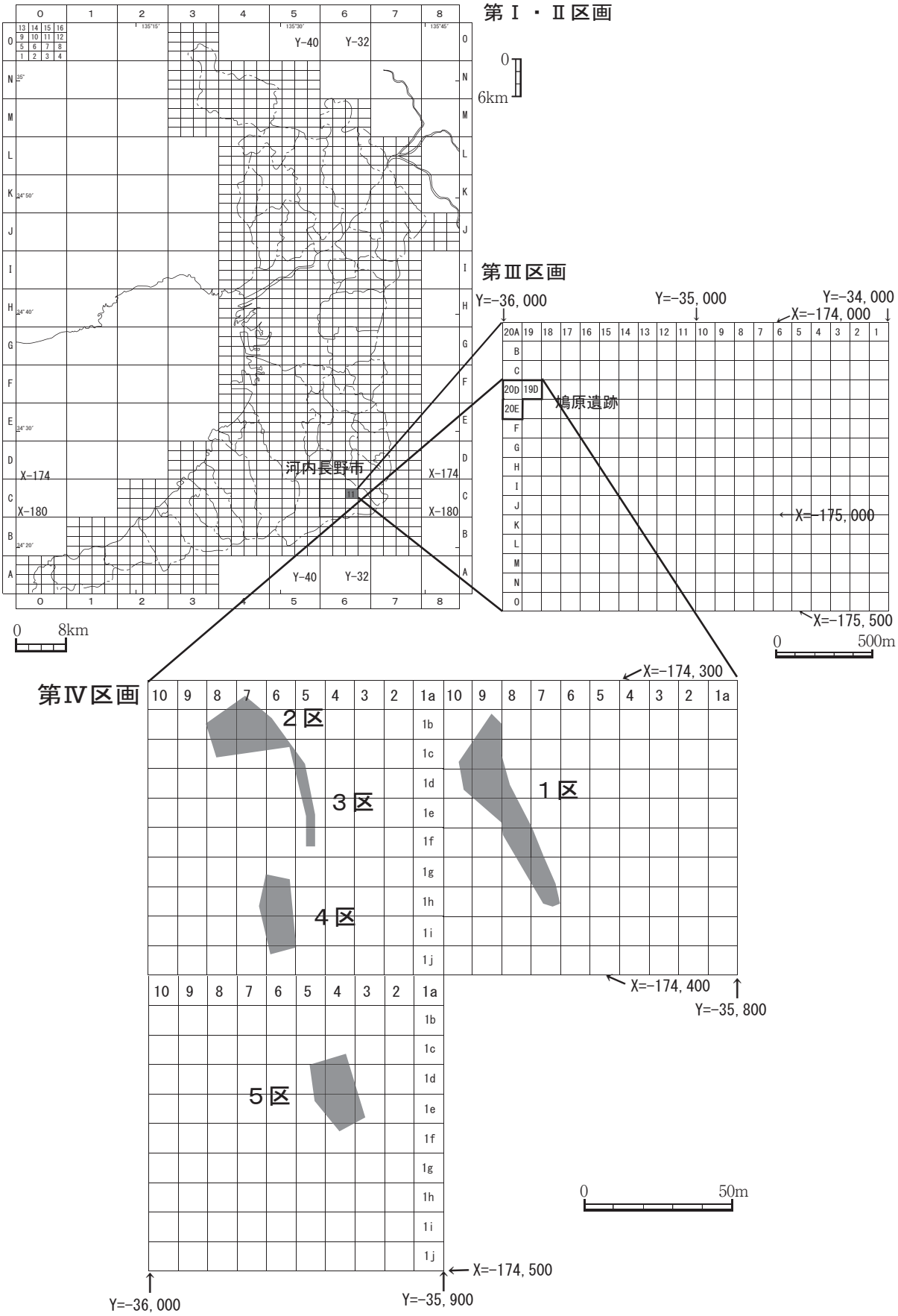

第Ⅰ・Ⅱ区画
0
6km
Y-40
Y-32
X-174
X-180
河内長野市
0 8km
第Ⅲ区画
Y=-36, 000
Y=-35, 000
Y=-34, 000
X=-174, 000
鳩原遺跡
X=-175, 000
X=-175, 500
0 500m
第Ⅳ区画
X=-174, 300
2区
3区
1区
4区
X=-174, 400
Y=-35, 800
5区
0 50m
X=-174, 500
Y=-36, 000
Y=-35, 900

図３　鳩原遺跡　地区割図

第３節　歴史的環境

鳩原遺跡は、河内長野市南東部の標高約250ｍの山間部に位置し、和泉山脈を水源とする石見川によって形成された上川谷と呼ばれる谷の中程に立地する。この谷沿いに国道310号が通る。この道は、かつて大沢峠道と呼ばれ、古くから河内国と大和国とを結ぶ幹線道路でもあった。

鳩原遺跡の南東部には、縄文時代の散布地や中世の集落跡があることで知られる太井遺跡、縄文時代・平安時代・中世の散布地である鳩原東端遺跡・鳩原西端遺跡、東側に隣接して中近世の寺社遺跡の川上神社遺跡がある。現在も川上神社があり、その付近には、弥勒寺と呼ばれる寺がある。さらに、石見川に沿って約1.5㎞下ると、観心寺遺跡および観心寺の旧境内の一部を含む寺元遺跡がある。先にも述べたが、石見川沿いに発達した大沢街道は河内国と大和国を結ぶ幹線道路であり、この街道沿いに平安時代から近世の遺跡が発達していることが分かる。鳩原遺跡のある鳩原地区および太井遺跡のある太井地区は、「観心寺七郷」とよばれる観心寺の寺領であった（図４）。

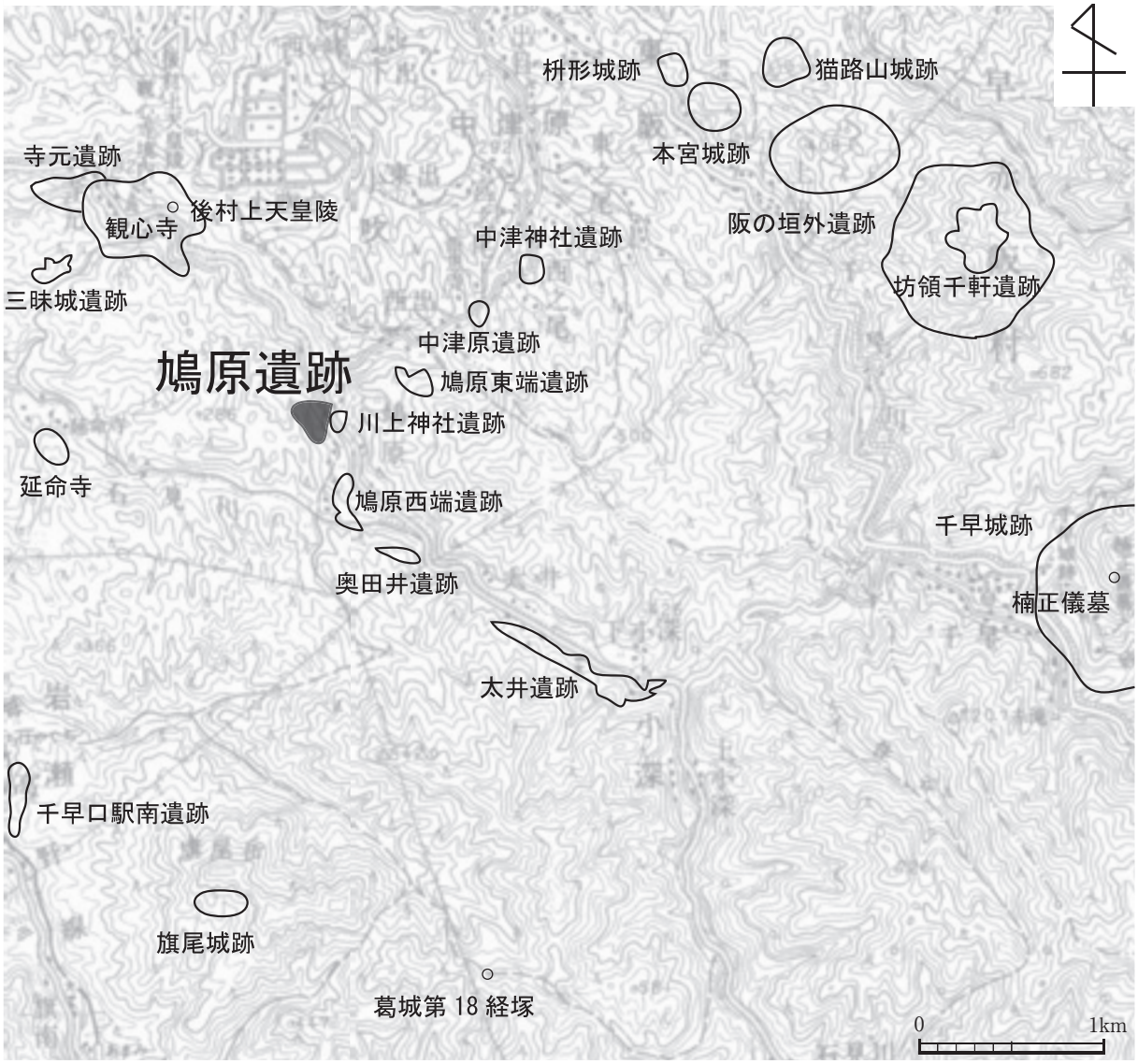


図４　鳩原遺跡と周辺の遺跡

第２章　鳩原遺跡の調査成果

第１節　１区

（１）層序

１区は、棚田によって上・下段に二分されているため、上段と下段に分けて記述する。

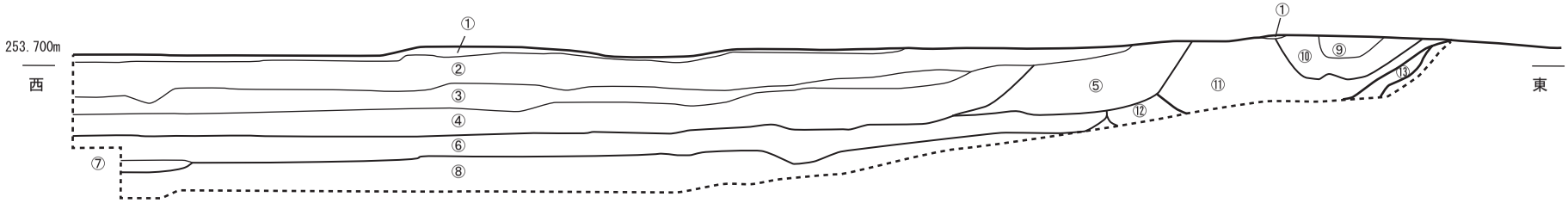
調査区上段は全体的に、黒褐色土の現行の水田耕土、灰褐色土の水田床土、灰色の中世耕作土が堆積する。それらを除去したところで地山と考えられる黄褐色土となる。上段は、東側が高いため、厚さ10㎝で地山にいたる。南西側については、人為的な盛土のため、２ｍ弱掘削しても地山には至らなかった。北側については、風化した花崗岩が堆積している。なお、遺構は調査区の中央付近に集中しており、北に上がるにつれて希薄となるのは、地盤が良好でないためと考えられる（図５・６、図版２）。

調査区下段の全体的な堆積は、上段と同じ堆積状況を示す。南側は、人為的な盛土がなされており、１ｍ程度掘削して地山と考えられる面に到達する。

（２）遺構と遺物

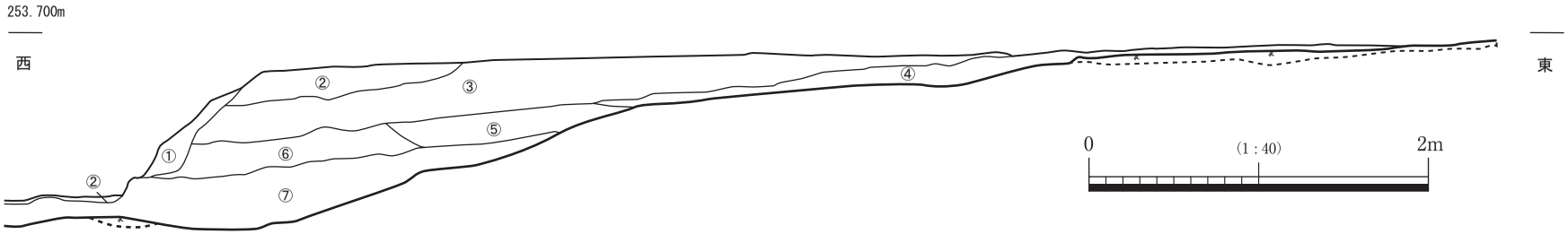
1003井戸　調査区中央部で検出された直径４ｍの井戸である。後述する1001土坑を切る。掘削される範囲を調査対象としたため、深さは不明である。井戸内からは、人頭大の石が複数出土しており、石組み井戸と考えられる（図７・９、図版３）。後述する遺物は、埋戻し土から出土している（図11･12、図版23･26～28）。１は瓦器椀の底部で、底径7㎝、内面にヘラ磨き、外面にナデ調整を施す。橋本・川越編年の和泉型Ⅱ期に該当するか。２は瓦器皿で、復元口径8.8㎝、器高1.4㎝。内面に暗文があり、外面はナデ調整を施す。３は土師皿で、復元口径8.5㎝、器高1.5㎝。内外面ともにナデ調整。４は土師皿、復元口径8.2㎝、器高1.3㎝、内外面ともにナデ調整。５は瓦質土器甕、内面はナデ調整、外面はタタキを施す。口縁部はナデにより外反する。６は瓦質土器すり鉢で、すり目は10条一単位とする。内面はナデ調整、外面はケズリ調整を施す。７は瓦質土器すり鉢で、すり目は20条一単位とする。内面はナデ調整、外面はケズリ調整を施す。８は瓦質土器羽釜で、復元口径23.8㎝。内外面ともにナデ調整、一部にススのようなものが付着している。９は瓦質土器羽釜で、復元口径22.8㎝。内面ハケメが残り、外面は鍔より上はナデ、鍔より下はケズリ調整を施す。①は瓦質土器羽釜である。59は右巴文軒丸瓦である。瓦当面の大半が欠損する。60は右巴文軒丸瓦である。上端部欠損。61は唐草文軒平瓦である。62・④は連珠文軒平瓦である。③は蓮華文軒平瓦である。⑤は丸瓦で、穿孔を穿つ。内面には、吊紐痕がはっきりと残る。①・③～⑤は写真のみの報告である。この他、図化していないが、須恵器、瓦器、土師皿、瓦質土器、瓦などの破片が多く出土している。

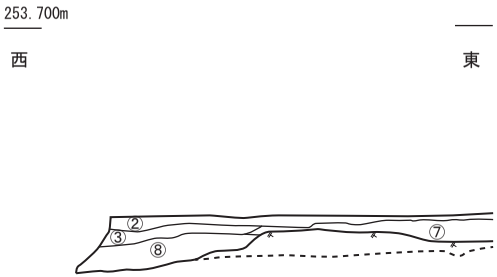
1001土坑　調査区中央部で検出された長径1.3ｍの土坑である。前述の1003井戸に切られる。掘削される範囲を調査対象としたため、深さは不明である（図７・９、図版３）。上層部より土師皿の完形品が多く出土している。10は瓦質土器皿で、復元口径9.6㎝、器高1.7㎝、摩耗につき調整不明。11は瓦質土器皿、復元口径9.6㎝、器高1.7㎝、摩耗につき調整不明。12は瓦質土器皿、復元口径9.6㎝、器高1.7㎝、



①暗灰黄(2.5Y5/2)砂質埴土(SC)
②褐(7.5YR4/4)軽埴土(LiC)
③オリーブ褐(2.5Y4/3)重埴土(HC)
④オリーブ褐(2.5Y4/6)軽埴土(LiC)
⑤暗灰黄(2.5Y5/2)砂質埴壌土(SCL)
⑥暗灰黄(2.5Y4/2)砂質埴土(SC)
⑦暗褐(10YR3/4)砂質埴土(SC)
⑧オリーブ褐(2.5Y4/3)重埴土(HC)
⑨オリーブ褐(2.5Y4/4)重埴土(HC)
⑩褐(10YR4/4)重埴土(HC)
⑪暗褐(10YR3/4)砂質埴壌土(SCL)
⑫にぶい黄褐(10YR5/3)重埴土(HC)
⑬明黄褐(10YR6/6)重埴土(HC)

図5　1区　東西アゼ1　南壁　土層断面図





①現代耕作土
②褐(7.5YR4/4)軽埴土(LiC)
③オリーブ褐(2.5Y4/3)重埴土(HC)※②層より粘性が強い
④オリーブ褐(2.5Y4/6)軽埴土(LiC)※マンガンを多く含む。中世耕作土
⑤暗灰黄(2.5Y4/2)砂質埴土(SC)※地山=黄褐(2.5Y5/4)シルト質埴壌土(2.5Y5/4)がブロック状に含まれる。遺構埋土
⑥暗灰黄(2.5Y4/2)砂質埴土(SC)
⑦黄褐(2.5Y5/4)砂質埴土(SC)

図6　1区　東西アゼ2　南壁　土層断面図

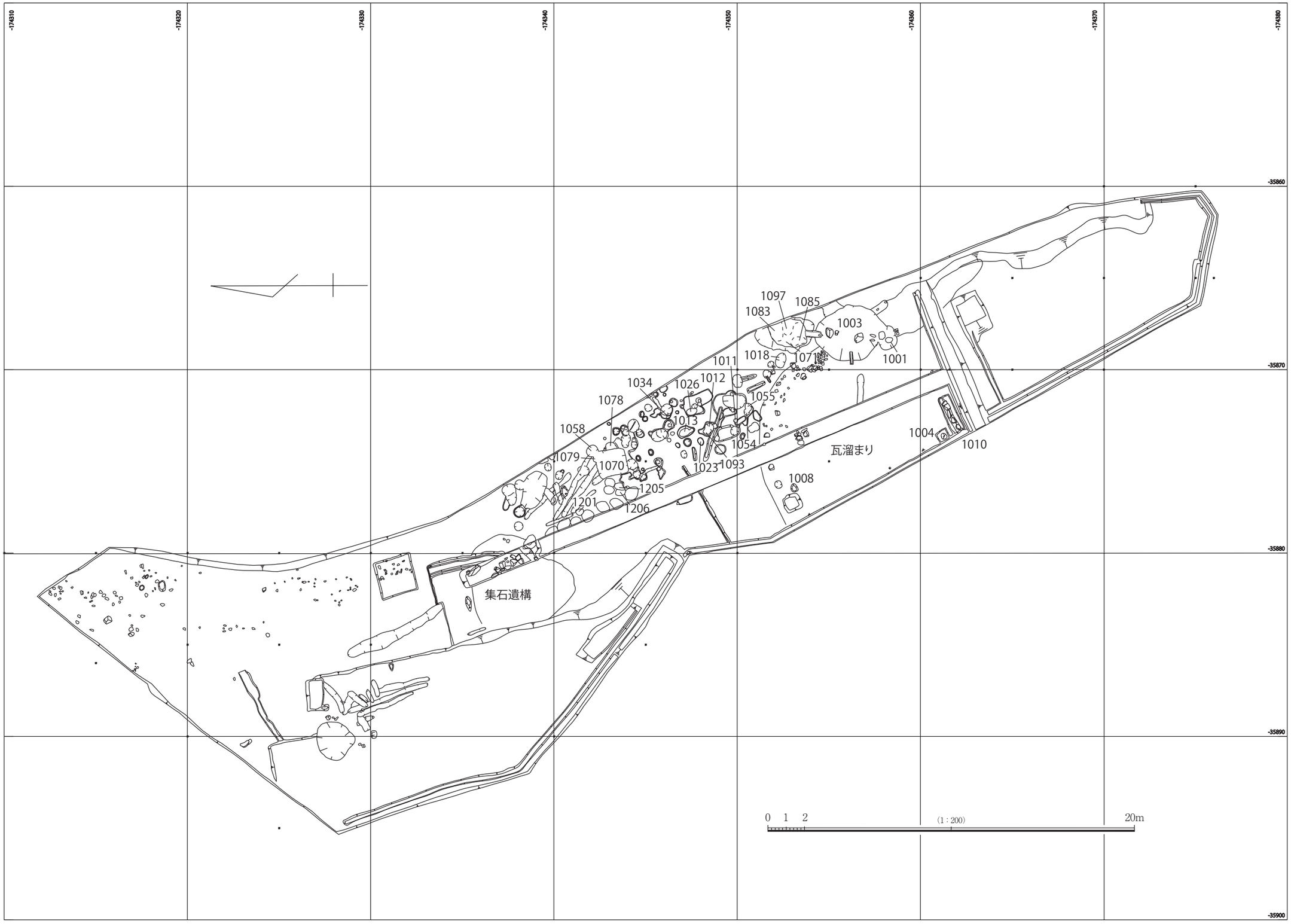


図7　1区　検出遺構　平面図

摩耗につき調整不明。13は瓦質土器皿、復元口径9.6cm、器高1.7cm、摩耗につき調整不明。14～19は土師皿で、口径７cm前後、器高１cm前後。内面、外面ともにナデ調整を施す。実測していないが、前述の土師皿とほぼ同サイズの土師皿が５枚、直径９cmと10.8cmの瓦質土器皿が出土している。20は瓦質土器風炉もしくは深鉢の破片である。21は瓦質土器すり鉢で、内面にすり目があり、外面にケズリを施す。22は器種不明の瓦質土器底部である。底径は10cm。内面は摩耗しており調整不明だが、外面はケズリ調整を施す。23は瓦質土器こね鉢、復元口径27.1cm、器高12.3cm。内面上半は、剥落が著しく調整不明だが、

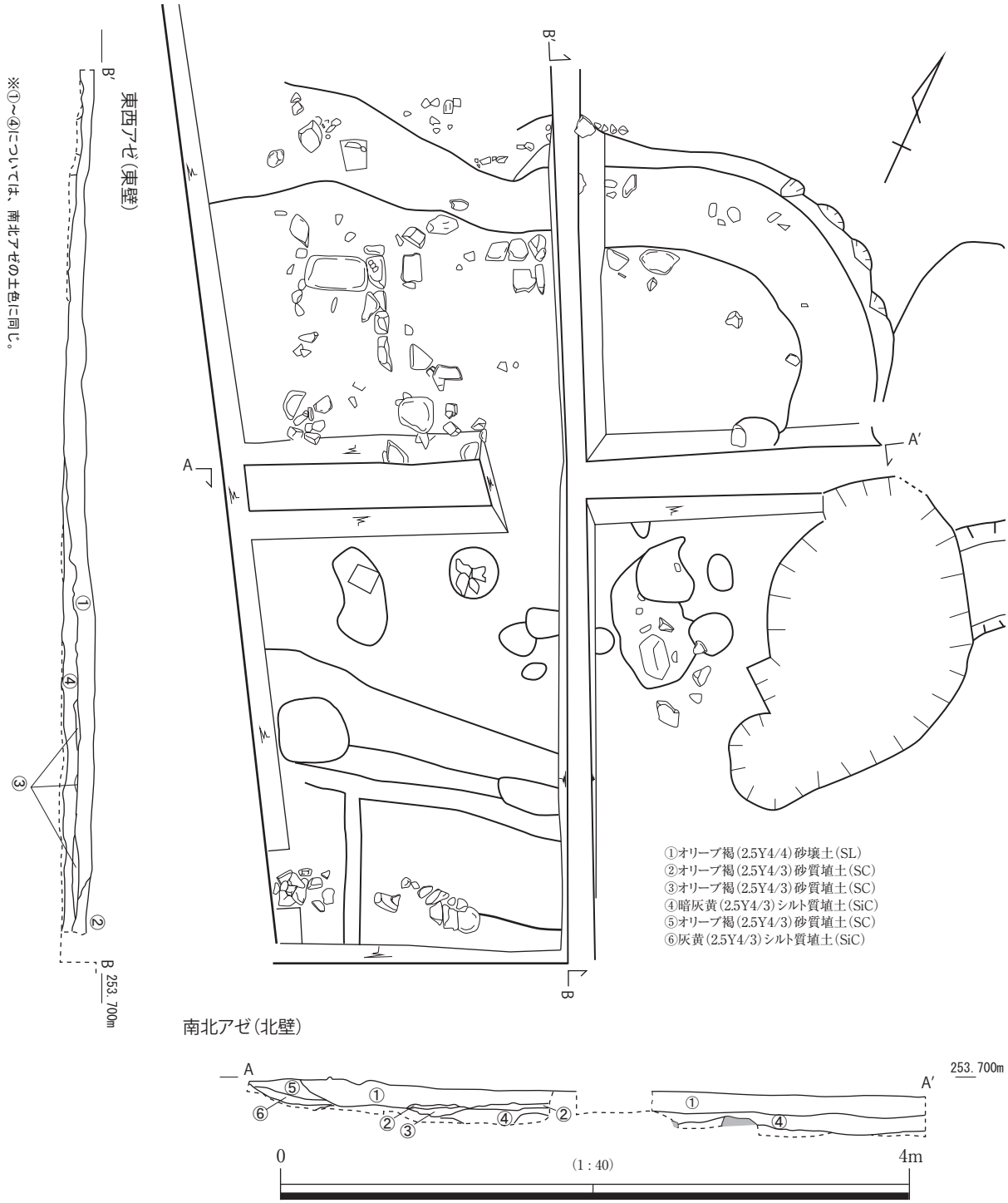
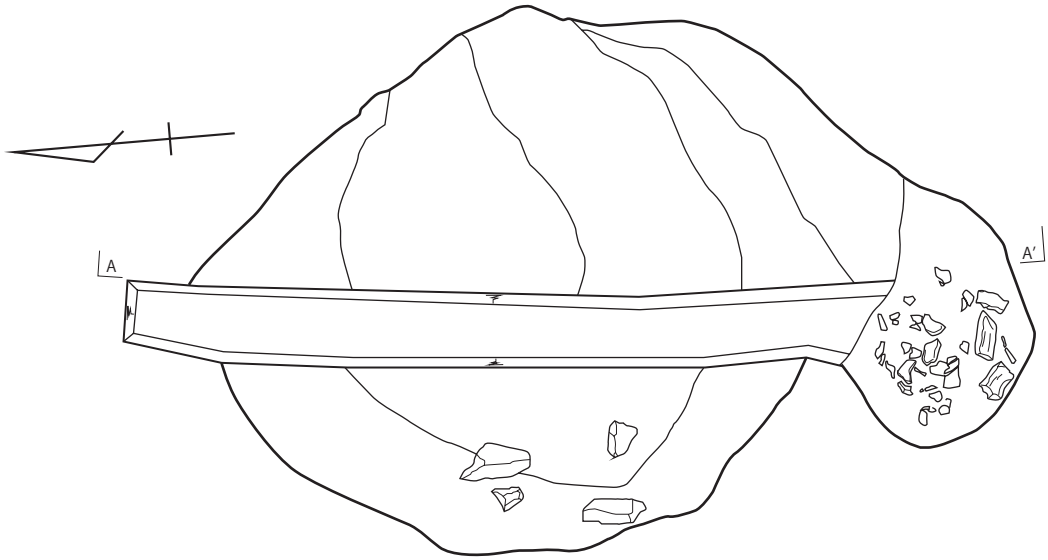
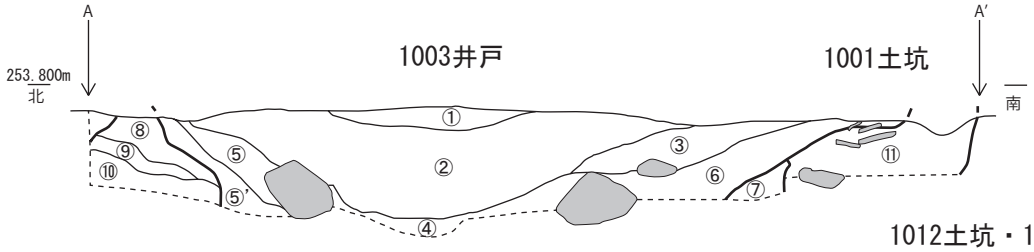
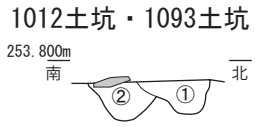


図８　瓦溜まり　平面図・断面図

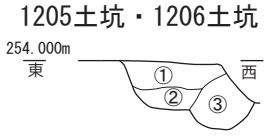




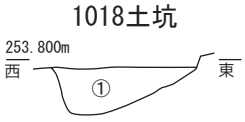
①オリーブ褐(2.5Y4/4)砂壌土(SL)
②オリーブ褐(2.5Y4/3)砂質埴土(SC)
③オリーブ褐(2.5Y4/3)砂質埴土(SC)
※②層より粘性が強い
④暗灰黄(2.5Y4/3)シルト質埴土(SiC)
⑤オリーブ褐(2.5Y4/4)砂質埴土(SC)
⑤′オリーブ褐(2.5Y4/4)砂質埴土(SC)
⑥暗オリーブ褐(2.5Y3/3)砂質埴土(SC)
⑦褐(10YR4/6)重埴土(SC)
⑧黄褐(10YR5/6)シルト質埴土(SiC)
⑨黄褐(10YR5/6)シルト質埴土(SiC)
※⑧層のようなブロック土を含まない。
⑩明黄褐(10YR6/6)砂質埴土(SC)
⑪暗灰黄(2.5YR4/2)重埴土(HC)



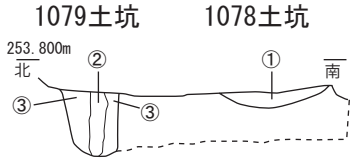
①灰黄褐(10YR4/2)軽埴土(LiC)
②黒褐(2.5Y3/2)砂質埴壌土(SCL)



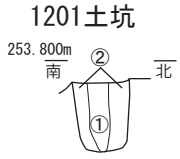
①灰黄褐(10YR5/2)砂質埴土(SC)
②黄褐(10YR5/6)軽埴土(LiC)
③にぶい黄褐(10YR4/3)砂質埴土(SC)



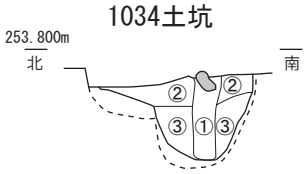
①灰黄褐(10YR5/2)軽埴土(LiC)



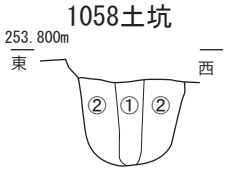
①黒褐(10YR5/2)砂質埴土(SC)
②黒(10YR4/4)重埴土(HC)
③黄褐(10YR5/6)砂質埴土(SC)



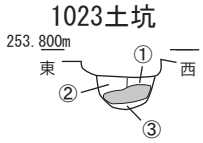
①黄褐(10YR5/6)シルト質埴土(SiC)
②黄褐(10YR6/6)軽埴土(LiC)



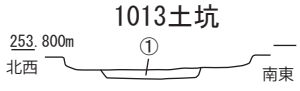
①にぶい黄褐(10YR4/3)重埴土(HC)
②にぶい黄褐(10YR4/4)砂質埴土(SC)
③オリーブ褐(2.5YR4/6)軽埴土(LiC)



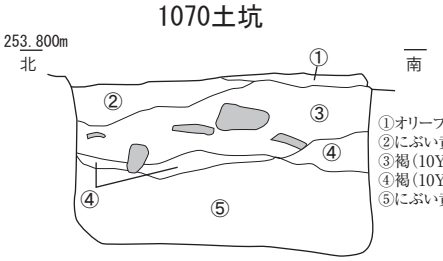
①褐灰(10YR5/1)砂質埴土(SC)
②灰黄褐(10YR4/2)砂質埴土(SC)



①灰黄褐(10YR4/2)重埴土(HC)
②黄褐(10YR5/6)砂質埴土(SC)
③にぶい黄褐(10YR5/4)砂質埴壌土(SCL)

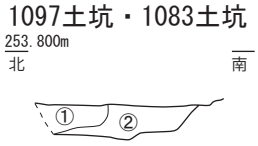


①灰黄褐(10YR5/2)軽埴土(LiC)



①オリーブ褐(2.5Y4/4)砂壌土(SL)
②にぶい黄褐(10YR4/3)砂質埴土(SC)
③褐(10YR4/4)砂壌土(SL)
④褐(10YR4/4)シルト質埴土(SiC)
⑤にぶい黄橙(10YR6/3)壌土(L)

①褐(10YR4/4)砂質埴壌土(SCL)
②オリーブ褐(2.5Y4/4)砂質埴土(SC)



①黄褐(10YR5/6)重埴土(HC)
②褐(10YR4/4)砂質埴壌土(SCL)

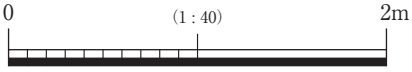


図９　１区　検出遺構　平面図・断面図（１）

外面はユビオサエが残る。24は瓦質土器羽釜、復元口径20.1㎝、内外面ともにナデ調整を施す。25はふいごの羽口。被熱により変色し、一部鉱滓が付着する。63・64は右三巴文軒丸瓦で、ともに上端部が欠損する（図11･12、図版24･26）。

1012土坑　調査区中央部で検出された長径0.4m、深さは0.2mの土坑である。後述する1093土坑に切られる（図7・9）。26は土師皿で、復元口径7㎝、残存器高1㎝。内面にススが付着するため、調整は不明。外面は指オサエのちナデを施す。27は瓦質土器鉢の破片で、内面ハケメ調整、外面ケズリ調整を施す。口縁端部は横ナデにより三角形を呈す（図11）。

1093土坑　調査区中央部で検出された長径0.4m、深さ0.19mの土坑である（図7・9）。図化できる遺物は出土していない。

1205土坑　調査区中央部で検出された長径0.5m、深さ0.26mの土坑である（図7・9）。図化できる遺物は出土していない。

1206土坑　調査区中央部で検出された長径1.3m、深さ0.3mの土坑である（図7・9）。28は土師皿で、口径6.8㎝、器高1.4㎝。29は土師皿で、口径8.65㎝、器高1.8㎝。全体にゆがむ（図11、図版25）。

1018土坑　調査区中央部で検出された長径0.8m、深さ0.24mの土坑である（図7・9）。瓦器椀片が出土している。

1078土坑　調査区中央部で検出された長径0.6m、深さ0.1mの土坑である（図7・9）。31は瓦器椀の底部である。格子状の暗文が入る。和泉Ⅱ期くらいのものか。②は青磁碗小片で、時期は南宋くらい。この他にも、土師皿などが出土している（図11、図版25）。

1079土坑　調査区中央部で検出された長径0.3m、深さ0.35mで、中心に直径0.1mの柱痕が残る（図7・9）。出土遺物なし。

1201土坑　調査区中央部で検出された長径0.3m、深さ0.4mで、中心に直径0.1mの柱痕が残る（図7・9）。時期決定できるような遺物は出土していない。

1034土坑　調査区中央部で検出された長径0.8m、深さ0.45mで、中心に直径0.1mの柱痕が残る（図7・9）。

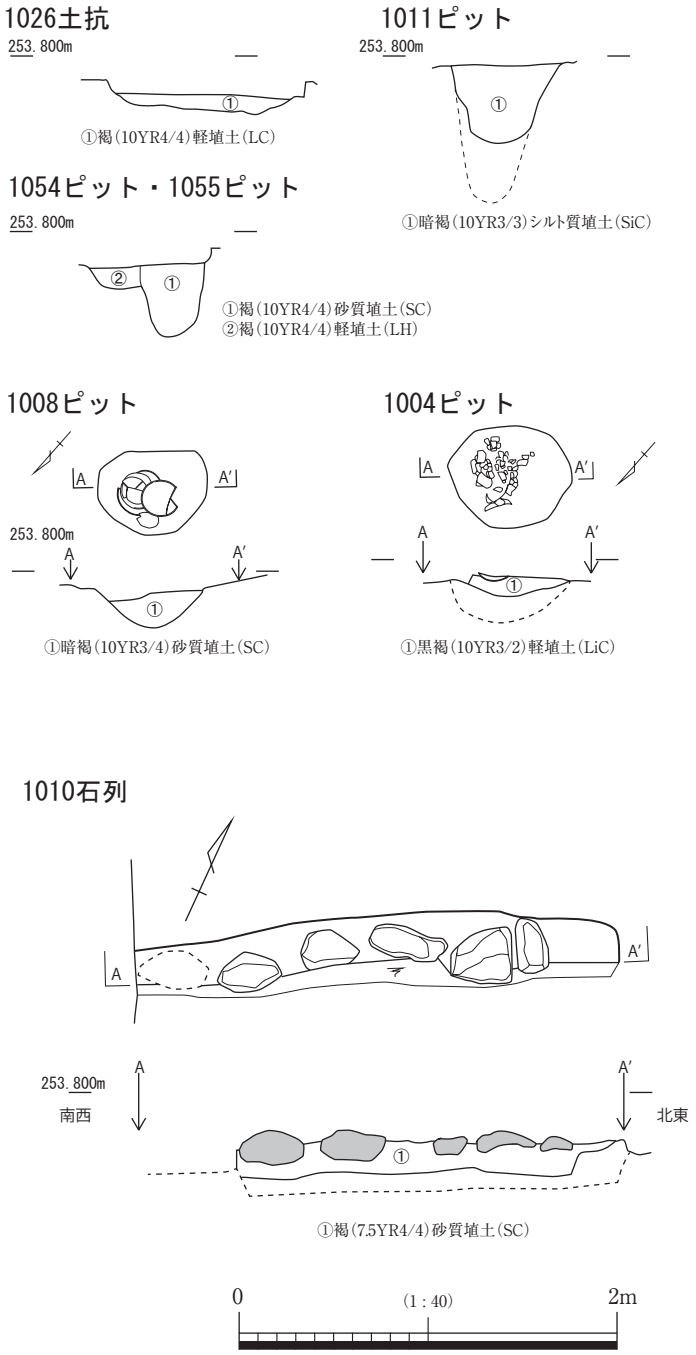


図10　1区　検出遺構　平面図・断面図（2）

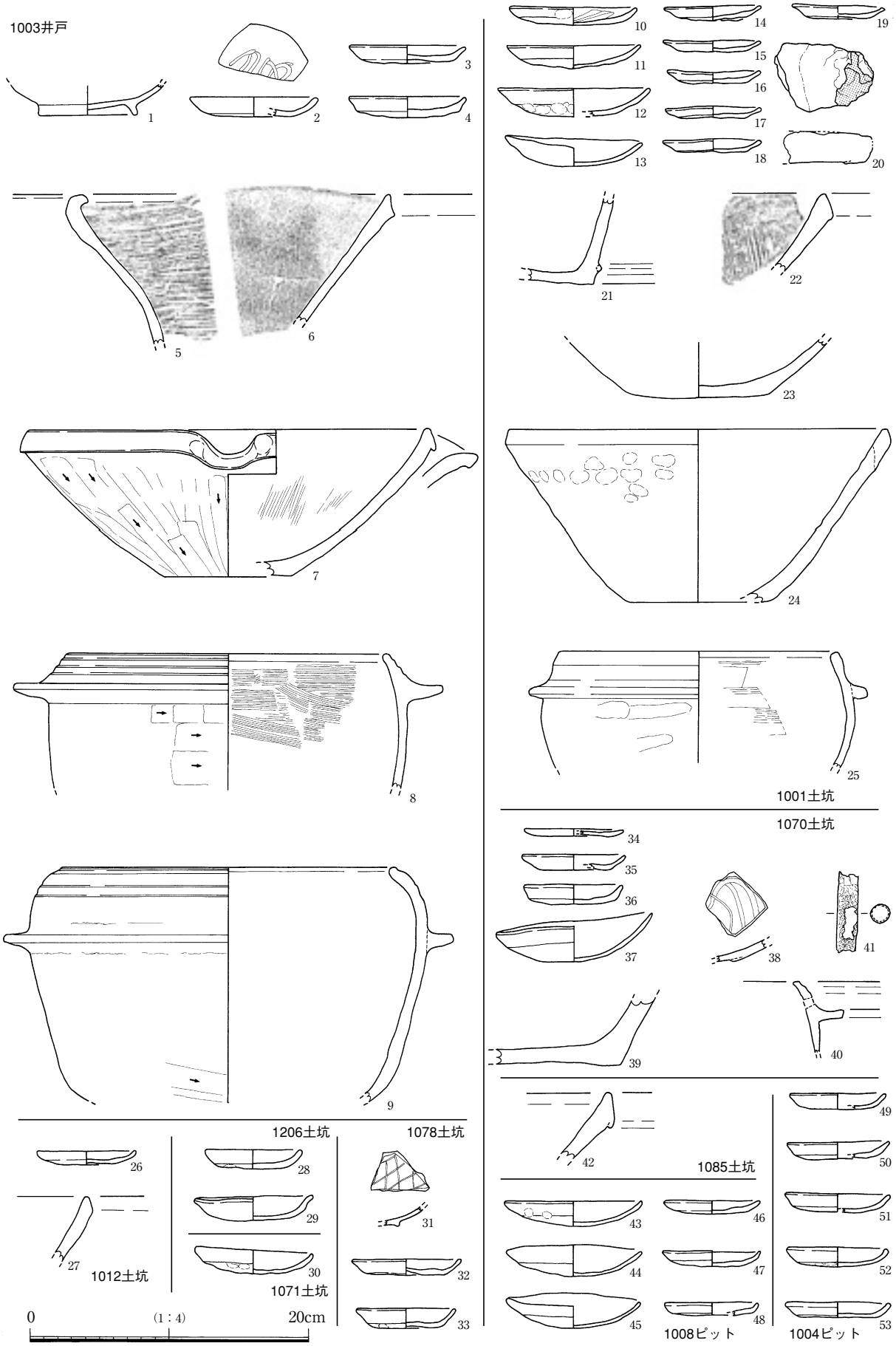

1003井戸
1001土坑
1070土坑
1206土坑
1078土坑
1012土坑
1071土坑
1085土坑
1008ピット
1004ピット
0
(1：4)
20cm

図11　遺物　実測図（1）

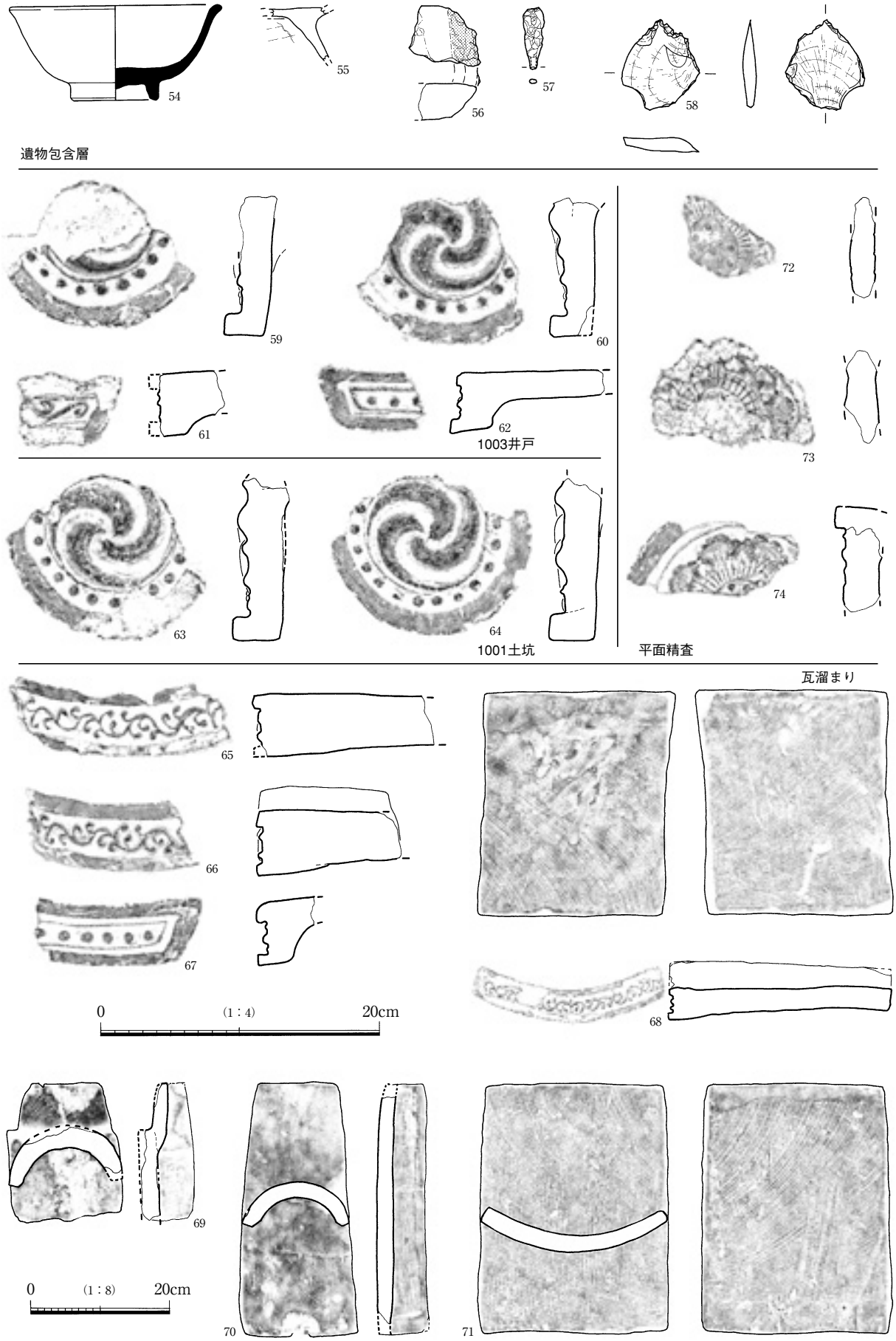


図12　遺物　実測図（２）（54～67・72～74はS=１/４、68～71はS=１/８）

1058土坑　調査区中央部で検出された長径0.56m、深さ0.45mで、中心に直径0.15mの柱痕が残る（図７・９）。1034土坑ともに、時期決定できるような遺物は出土していない。

1023土坑　調査区中央部で検出された長径0.3m、深さ0.2mで、長径0.2cmの根石と考えられる石が出土した（図７・９）。時期決定できるような遺物は出土していない。

1013土坑　調査区中央部で検出された直径0.8m、深さ３cmの土坑である（図７・９）。土師皿、瓦器椀などが出土した。いずれも小片につき詳細な時期は不明である。

1070土坑　調査区中央部で検出された長辺1.5m、短辺1.4mの方形を呈する、深さ0.95mの土坑である（図７・９）。37は瓦質土器皿、口径11.4cm、器高2.9cm、内外面ともにナデ調整を施す。38は3層から出土した瓦器椀の底部、高台三角形を呈し、うずまき状の暗文、橋本・川越編年の和泉型Ⅳ期に相当するか。34は土師皿、復元口径7.5cm、器高1.1cm、内面調整不明、外面ナデ調整を施す。35は土師皿、復元口径7.2cm、器高1.4cm、内面ナデ、外面磨滅により調整不明。36は土師皿で復元口径7.2cm、器高1.4cm、内面ナデ、外面磨滅により調整不明。39は陶器甕の底部。内外面ともにナデ調整を施す。40は土師質羽釜、復元口径23cm、焼成後、口縁部に穴を穿つ。41は用途不明青銅製品。残存長5.8cm、径1.4cm、重さ13.5ｇ。５層からは39・40が出土している（図11、図版24･29）。

1071土坑　調査区中央部で検出された土坑である（図７・９）。30は瓦質土器皿、口径8.6cm、器高1.9cm。この他、瓦質土器の小片などが出土している。

1085土坑　調査区中央部で検出された長径1.6m、深さ0.2mの土坑である（図７・９）。42は瓦質土器鉢の破片である。内外面ともに磨滅している（図11）。

1083土坑　調査区中央部で検出された土坑である（図７・９）。調査区外にのびるため大きさ不明。時期を特定できる遺物は出土していない。

1097土坑　調査区中央部で検出された土坑である（図７・９）。調査区外にのびるため大きさ不明。瓦器椀や土師質羽釜の破片が出土している。

1026土坑　調査区中央部で検出された長径0.9m、深さ0.1mの土坑である（図７･10）。時期を特定できる遺物は出土していない。

1011ピット　調査区中央部で検出された直径0.5m、深さ0.4mのピットである（図７･10）。瓦器椀の破片が出土するが、小片につき詳細な時期は不明。

1054ピット　調査区中央部で検出された直径0.3m、深さ0.1mのピットである（図７･10）。瓦器椀の破片、土師皿の破片が出土するが、いずれも小片につき詳細な時期は不明である。

1055ピット　調査区中央部で検出された直径0.3m、深さ0.4mのピットである（図７･10）。1054ピットとの切合い関係は不明である。なお、時期を特定できる遺物は出土していない。

1008ピット　調査区中央部で検出された長径0.6m、短径0.45cmの楕円形を呈するピットである。深さは0.2mを測る（図７･10、図版４）。43は取り上げ№1瓦質土器皿で、口径9.5cm、器高2.2cm。内外面ともにナデ調整を施す。44は取り上げ№3瓦質土器皿で、口径9.8cm、器高1.9cm。内外面ともにナデ調整を施す。45は取り上げ№6瓦質土器皿、口径10cm、器高1.8cm。内外面ともにナデ調整を施す。46は取り上げ№2完形の土師皿で、口径７cm、器高1.1cm。内外面ともにナデ調整を施す。47は取り上げ№7土師皿で、口径７cm、器高１cm。内外面ともにナデ調整を施す。48は取り上げ№4土師皿で、復元口径6.8cm、器高0.9cm。内外面

ともにナデ調整を施す。図示したもの以外に、瓦質土器皿や土師皿が出土している（図11、図版25）。

1004ピット　調査区中央部で検出された直径0.6m、深さ0.1mのピットである（図7･10、図版4）。49は土師皿で、口径9.8㎝、器高1.9㎝、内外面ともにナデ調整を施す。50は土師皿で、復元口径6.8㎝、器高0.9㎝、内外面ともにナデ調整を施す。51は瓦質土器皿で、口径10㎝、器高1.8㎝。内外面ともにナデ調整を施す。52は完形の土師皿で、口径7㎝、器高1.1㎝、内外面ともにナデ調整を施す。53は完形の土師皿で、口径7㎝、器高1.1㎝。内外面ともにナデ調整を施す（図11）。

1010石列　調査区中央部南寄りで検出された石列である。人頭大程度の石が6個並ぶが、調査区外に続いており全長や用途は不明である。石の周辺を20㎝程度掘り下げて石を据え付ける（図7･10、図版6）。なお、時期を特定できる遺物は出土していない。

集石遺構　調査区中央北東寄りで検出された。棚田を作る際に遺構面が削平されており、正確な大きさは不明である。中央付近に直径50㎝前後の石が多数出土している。周辺の土坑や井戸からは、礎石と考えられる石が出土していることから、本調査区内に建てられていた建物が破壊された際に廃棄したと考えられる（図7、図版6）。

瓦溜まり　本遺構からは多数の瓦が出土している（図7・8、図版5）。65は唐草文軒平瓦。凸面はナデ調整。凹面はナデ調整。66は唐草文軒平瓦。凸面はナデ調整。凹面はナデ調整。67は連珠文軒平瓦。69は丸瓦。凸面はナデ調整。凹面はナデ調整。70は丸瓦で行基葺き瓦である。全長36.5㎝、広端幅16.5㎝、狭端幅12㎝を測る。凸面はナデ調整。凹面はナデ調整。68は唐草文軒平瓦で、全長32.3㎝、広端27.5㎝、狭端26㎝、弧深3.7㎝。凸面はナデ調整。凹面は布目が残る。ナデ調整。71は平瓦で、全長35.8㎝。広端25.5㎝、狭端26.7㎝。凸面はナデ調整。凹面はナデ調整。凸面に離れ砂が残る。68、71は瓦溜まりの底から出土している。瓦の状況から礎板の代わりに使われていたと考えられる。54は被覆土掘削時に出土した青磁碗である。口径14.7㎝、底径5.9㎝、器高6.8㎝を測る。高台は削り出して成形する。全体的にオリーブ灰（10Y6/2）色を呈す。中国からの輸入品であり、時期は南宋代のものである。⑥は丸瓦である。玉縁長5㎝、玉縁幅9.5㎝。凸面縄目、凹面には、コビキAと強い吊紐痕が残る。本遺構から出土した瓦は、概ね13～14世紀の時期観を示す（図12、図版25･27～29）。平瓦・軒平瓦と丸瓦・軒丸瓦に分けて重量を計測した。結果、平瓦・軒平瓦の総重量は約300kg、丸瓦・軒丸瓦は約70kgであった。平瓦は平均4kg／1枚、軒平瓦は約5kg／1枚を量る。丸瓦については、完形品がなかったため、正確な数値は不明だが、行基葺き瓦で約2kg／1枚である。それぞれの総重量を1枚当たりの重量で割り戻すと、平瓦・軒平瓦で46枚程度、丸瓦で14枚程度となるので、大半は別の建物に転用されている可能性がある。

素掘溝　調査区内で、北東－南西方向と北西－南東方向の耕作に伴う素掘溝が検出された。先述の遺構よりも古い段階のものはない。出土遺物から中世以降に掘削されたと考えられる。

平面精査　55は高台付土師皿である。白色を呈す。56はふいごの羽口で、被熱しており変色する、一部鉱滓付着。57は用途不明鉄製品である。全長4.4㎝、厚さ0.3㎝、重さ9.2g。全体的に錆に覆われているが、先端に向かって尖っていることから、釘などの可能性が高い。58はサヌカイトの剝片であり、未製品と考えられる。全長6.48㎝、幅5.7㎝、厚さ1㎝、重さ37.6g。72～74は蓮華文軒丸瓦である。73以外は、瓦溜まり付近を精査中に出土しており、瓦溜まりの遺物と同時期と考えられる。軒丸瓦の大半は巴文であることから、蓮華文軒丸瓦は、別の建物の瓦を再利用したものと考えられる（図版26･29）。

第２節　２区

（１）層序

鳩原遺跡は金剛山の西麓に所在する。このうち２区は、東方の山側から西に向かって延びる丘陵の尾根先端部に位置している。２区における地山面の標高は、調査区南壁の東端部でT.P.＋240.86m、西端部でT.P.＋240.12mをはかり、約70～80㎝の高低差をもって、ゆるやかに西に向けて傾斜している。一方、調査区西壁の北端部ではT.P.＋240.18mをはかり、調査区の南北方向は、ほぼ平坦な面をなしている。２区から約35m西に下った谷側の地点では、石見川が北西に向かって流れている。

調査区西南部においては、縄文時代の包含層が厚く堆積し、複雑に切り合った遺構と、多数の遺物を検出した。２区の土層堆積状況については、調査区南壁・西壁・北壁の土層断面図を掲載した（図13、図版７～９）。２区では、地表面から地山面までに、第１～９層の堆積が認められた。調査開始前に、広い範囲で、現在の耕作土を撤去しており、本来の地表面は、およそT.P.＋241.1～241.3mである。

第１層は現代の耕作土である。第２層については、床土をはさみながら堆積する近現代以前の耕作土とみられる。第２層は８層に細分層した。削平を受けたためか、第２層内には、近代・近世の顕著な遺物は含まれていない。第３層は、縄文土器や石器を多く含むほか、一部、古代から中世の遺物も包含する。縄文時代の包含層を撹乱した状態で堆積した中世の包含層と考えられる。第５層からは縄文時代の土器・石器が大量に出土しており、縄文時代の包含層とみられる。第４・６・７・８層は、山側の調査区南東部にのみ堆積する土層である。第７・８層は地山が削られて堆積した土層とみられる。第９層は、調査区西部において地山直上に広く堆積する土層で、縄文土器を含む縄文時代の包含層である。

２区の発掘調査では、第３層下面を縄文時代の遺構面として精査したが、縄文時代の包含層と縄文時代の遺構埋土の判別が不明確で、遺構の肩部を検出することが不可能であった。そのため、基本的な堆積土層に加えて、各壁面断面にて確認した遺構埋土と考えられる土層を①～⑨層で示した。以上のような土層の堆積状況であるため、埋土⑥層に含めた土層のうち、西壁北部から北壁に広く堆積する土層等は、縄文時代の包含層である可能性もある。遺構埋土のうち、時期的に新しいと推定する埋土を①として、順次、番号を付している。これらの遺構埋土からは縄文時代の遺物が出土している。

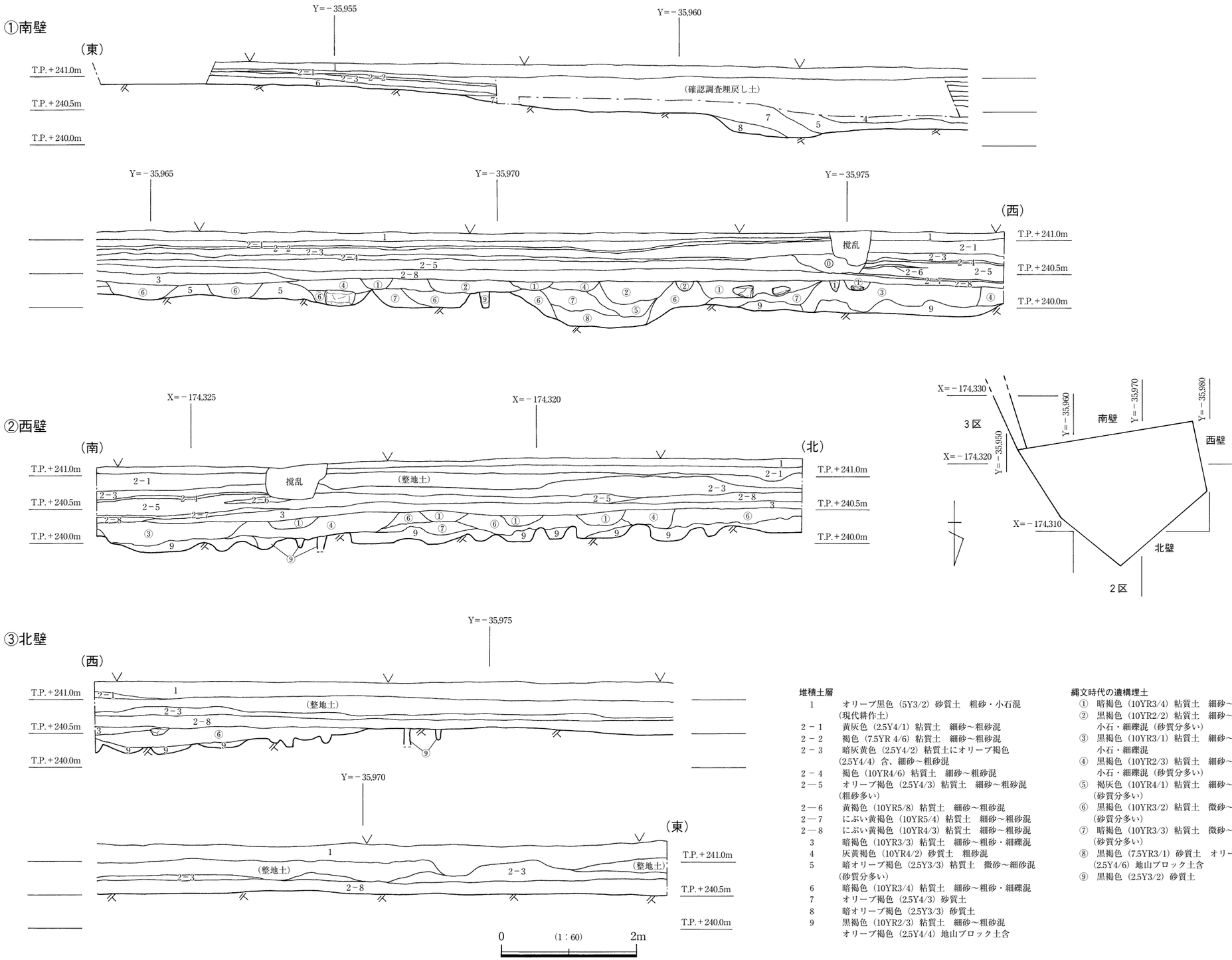
基本層序

第１層

現代の耕作土層である。オリーブ黒色（5Y3/2）砂質土に粗砂・小石が混じる。

第２層

近現代以前の耕作土層とみられる。第２－１層は黄灰色（2.5Y4/1）粘質土に細砂～粗砂が混じる。第２－２層は褐色（7.5YR4/6）粘質土に細砂～粗砂が混じる。第２－３層は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土にオリーブ褐色（2.5Y4/4）を含む。細砂～粗砂が混じる。第２－４層は褐色（10YR4/6）粘質土に細砂～粗砂が混じる。第２－５層はオリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土に細砂～粗砂が混じる。粗砂の含有多い。第２－６層は黄褐色（10YR5/8）粘質土に細砂～粗砂が混じる。第２－７層はにぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土に細砂～粗砂が混じる。第２－８層はにぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土に細



堆積土層

1	オリーブ黒色（5Y3/2）砂質土　粗砂・小石混（現代耕作土）
2－1	黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　細砂～粗砂混
2－2	褐色（7.5YR 4/6）粘質土　細砂～粗砂混
2－3	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土にオリーブ褐色（2.5Y4/4）含、細砂～粗砂混
2－4	褐色（10YR4/6）粘質土　細砂～粗砂混
2－5	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土　細砂～粗砂混（粗砂多い）
2－6	黄褐色（10YR5/8）粘質土　細砂～粗砂混
2－7	にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土　細砂～粗砂混
2－8	にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　細砂～粗砂混
3	暗褐色（10YR3/3）粘質土　細砂～粗砂・細礫混
4	灰黄褐色（10YR4/2）砂質土　粗砂混
5	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土　微砂～細砂混（砂質分多い）
6	暗褐色（10YR3/4）粘質土　細砂～粗砂・細礫混
7	オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土
8	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土
9	黒褐色（10YR2/3）粘質土　細砂～粗砂混 オリーブ褐色（2.5Y4/4）地山ブロック土含

縄文時代の遺構埋土

①	暗褐色（10YR3/4）粘質土　細砂～粗砂混
②	黒褐色（10YR2/2）粘質土　細砂～粗砂・小石・細礫混（砂質分多い）
③	黒褐色（10YR3/1）粘質土　細砂～粗砂・小石・細礫混
④	黒褐色（10YR2/3）粘質土　細砂～粗砂・小石・細礫混（砂質分多い）
⑤	褐灰色（10YR4/1）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）
⑥	黒褐色（10YR3/2）粘質土　微砂～細砂混（砂質分多い）
⑦	暗褐色（10YR3/3）粘質土　微砂～細砂混（砂質分多い）
⑧	黒褐色（7.5YR3/1）砂質土　オリーブ褐色（2.5Y4/6）地山ブロック土含
⑨	黒褐色（2.5Y3/2）砂質土

図13　２区　調査区南壁・西壁・北壁　土層断面図

砂～粗砂が混じる。西壁から約2.5m地点の南壁面で確認した第２－３層下面の遺構については、耕作に関わる遺構とみられる。埋土⓪層は暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土に細砂が混じる。粘性強い。

第３層

暗褐色（10YR3/3）粘質土に細砂～粗砂・細礫が混じる。縄文土器・石器のほか中世の遺物を含む。

第４層

灰黄褐色（10YR4/2）砂質土に粗砂が混じる。

第５層

暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土に微砂～細砂が混じる。砂質分多い。調査区西部一帯に、本来は安定して厚く堆積していたものとみられる。この包含層の上面からは、時期差を有しながら、複雑に切り合う遺構が調査区南西部を中心に広く認められる。第５層上面は、南壁中央部でT.P.＋240.4m、西に向かってわずかに傾斜して、南壁西部でT.P.＋240.3m、西壁北部でT.P.＋240.5mをはかる。第３層の堆積する中世の段階で、およそT.P.＋240.4mの高さで水平に削平して、平坦面をつくり、土地利用されたと考えられる。その際に、第５層とともに、多くの遺構の上面も削平されたとみられる。

第６層

暗褐色（10YR3/4）粘質土に細砂～粗砂・細礫が混じる。調査区南東部の地山上面に堆積する。

第７層

オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂質土で、調査区南東部の地山上面に堆積する。

第８層

暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土で、同じく、調査区南東部の地山上面に堆積する。

第９層

黒褐色（10YR2/3）粘質土に細砂～粗砂が混じり、オリーブ褐色（2.5Y4/4）地山ブロック土を含む。調査区西部において地山直上に広く堆積する土層で、縄文土器を包む縄文時代の包含層である。

縄文時代の遺構埋土

①層　暗褐色（10YR3/4）粘質土に細砂～粗砂が混じる。

②層　黒褐色（10YR2/2）粘質土に細砂～粗砂・小石・細礫が混じる。砂質分多い。縄文時代の遺物を含む。

③層　黒褐色（10YR3/1）粘質土に細砂～粗砂・小石・細礫が混じる。

④層　黒褐色（10YR2/3）粘質土に細砂～粗砂・小石・細礫が混じる。砂質分多い。縄文時代の遺物を含む。

⑤層　褐灰色（10YR4/1）粘質土に細砂～粗砂が混じる。砂質分多い。

⑥層　黒褐色（10YR3/2）粘質土に微砂～細砂が混じる。砂質分多い。

⑦層　暗褐色（10YR3/3）粘質土に微砂～細砂が混じる。砂質分多い。

⑧層　黒褐色（7.5YR3/1）砂質土にオリーブ褐色（2.5Y4/6）地山ブロック土を含む。

⑨層　黒褐色（2.5Y3/2）砂質土で、樹木の痕跡の可能性もある。

（２）遺構と遺物

２区は、西に延びる尾根の先端部に立地する。調査区上面の長さは、谷側の西壁約10.5m、南壁26m、北壁17m、東壁は外側に屈曲しているが、直線にして約23mをはかる。地山面の面積は339㎡で、平面形は不定形な台形を呈している。西の石見川に向かって地山面が傾斜していくため、調査区西南部を中心に厚い縄文時代の包含層の堆積が認められ、多数の遺構・遺物を検出した（図14）。

図14　２区　平面図

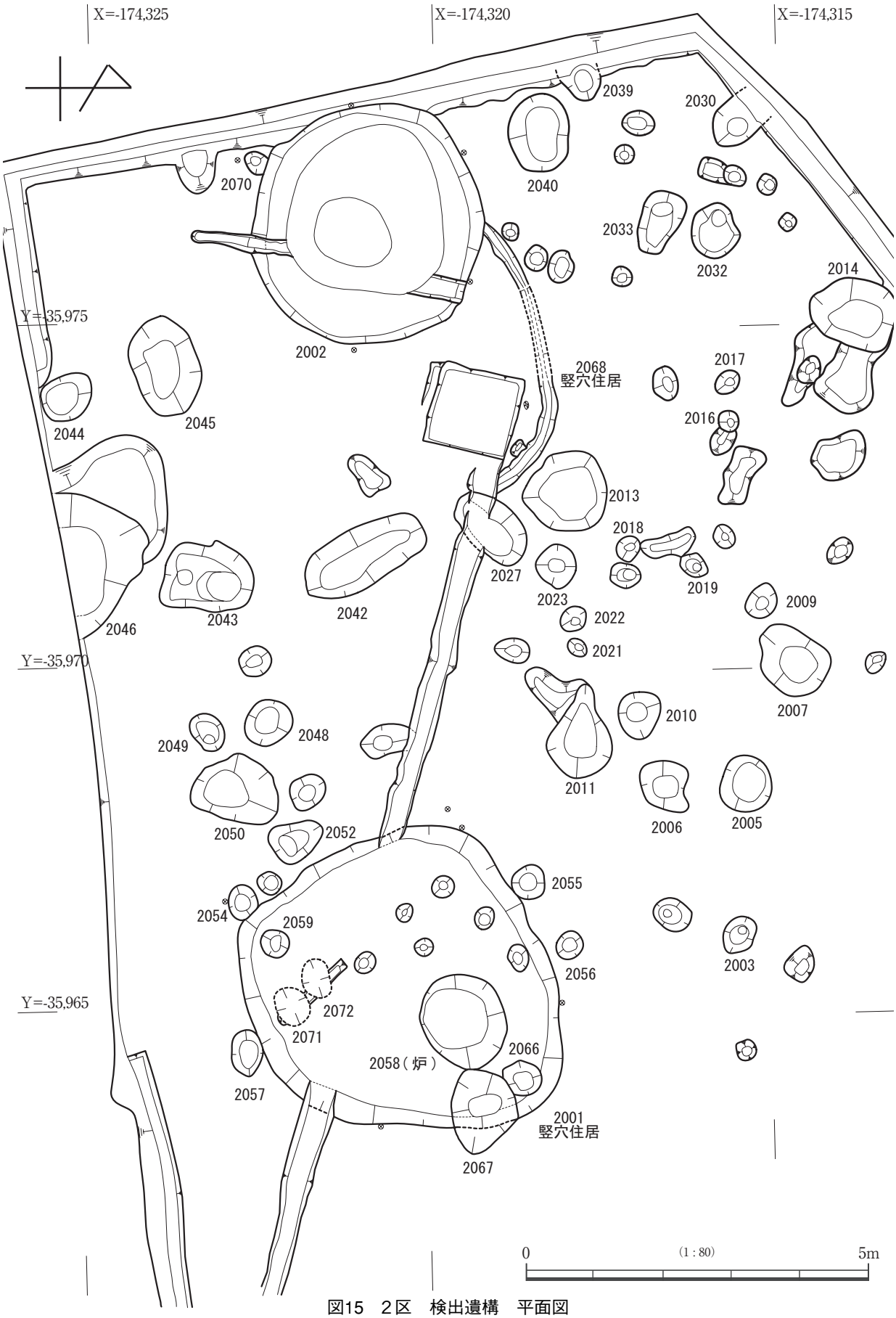


図15　２区　検出遺構　平面図

大部分が縄文時代の遺物で、一部、古代・中世の遺物が混じる第３層から下層には、縄文時代の遺物のみが含まれており、また、第３層が削平されている地点でも、第２－７層から下層は、同じく縄文時代の遺物のみが包含されていた。そのため、第３層下面を縄文時代の遺構面として精査し、縄文時代の遺構検出を試みたが、包含層と埋土の正確な判別が不可能であった。また、この遺構面には、調査区南西部を中心に、大小多数の石が広く堆積し、人為的に置かれたものか、自然に流れ込んだ石であるかの区別がしがたいものが多くみられた（図版10ａ）。ひとまず、明らかに自然堆積とみられる石を取り除き、調査区全域の石の実測図作成と写真撮影の後、遺構に伴う可能性のある石を残して、第５層以下の包含層ならびに遺構埋土を慎重に掘削し、最終的には、地山上面にて遺構検出をおこなった。

その結果、2001竪穴住居・2068竪穴住居（周溝のみ残存）の２棟の竪穴住居と、墓坑や柱穴の可能性のある土坑を含んだ、全70基の土坑を検出した（図15、図版10ｂ・ｃ）。また、遺構内および包含層から、整理箱にして（通常コンテナ―54×34×15㎝）14箱分の遺物が出土した。以下、主要な遺構と出土遺物について記述する（注）。

2001竪穴住居　調査区中央部南寄りで検出した竪穴住居である（図16、図版12～13）。残存する住居の壁部確認以前に、縄文時代包含層である第５層ならびに同レベルの遺構埋土を掘削していく過程で、住居内相当範囲にて、多数の残存状態の良い縄文土器や石器を検出した（図版11ａ・ｂ・ｃ）。2001竪穴住居の規模は、長辺約4.5ｍ、短辺約4.3ｍで、平面形はいびつな隅丸方形を呈する。検出面から床面までの深さは、中央部で20㎝をはかり、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土である（図版12ａ）。なお、住居の壁際に巡っていたと考えられる柱穴は不明確で、2059土坑のみ柱穴の可能性がある。壁溝は認められなかった（図版13ａ）。埋土上面ならびに埋土、住居床面から縄文土器や石器が出土した。縄文土器は北白川Ｃ式～中津式が多く存在するが、量的には中津式が中心であり、住居の廃絶は後期初頭の中津式の時期と考えられる。

2058土坑（炉）　2001竪穴住居内北東部に穿たれた土坑で、この住居に伴う炉跡とみられる（図16）。住居検出面においては、南北に1.8ｍ、東西に1.5ｍの楕円形の範囲に、褐色を帯びた炭化物を含む焼土の広がりが確認できた。また、この焼土をまわりに長さ30～50㎝程度の石がみられ、炉を囲んでいた石が、廃絶後に散乱した可能性がある（図版12ｂ・ｃ）。2058土坑の住居床面での規模は、南北1.3ｍ、東西1.4ｍをはかり、平面形は楕円形を呈し、検出面からの深さは中央部で35㎝、断面形は浅いＵ字形を呈する。埋土は、焼土層検出面の南部分に堆積していた土層は、黒褐色（7.5YR3/1）の細砂～粗砂混じりの粘質土で、赤褐色（2.5YR4/8）と黒色（2.5Y2/1）の焼土や炭化物を含んでいる。この下層は褐色（7.5YR4/3）の細砂から粗砂を含む砂質土に、にぶい黄褐色（5YR4/4）と極暗褐色（7.5YR2/3）の焼土や炭化物を含む土層、さらに下層には褐色（10YR4/4）の細砂～粗砂混じりの砂質土が堆積する（図版13ｃ・ｄ）。埋土から出土した縄文土器は縄文時代中期末の北白川Ｃ式である。炉埋土出土の土器は、2001竪穴住居の時期を考える上で検討を要する。

2071土坑・2072土坑　2001竪穴住居内の南部で、併置された状態で検出した（図16・17、図版13ｂ）。各土坑には、埋設時点では大形の完形品であったと考えられる縄文土器が出土した。これらの土器は底部を下にし、長さ10～20㎝の複数の石で固定して土中に埋めていた。検出面での土坑の平面形は、2071土坑が東西約65㎝、南北53㎝、2072土坑が東西約73㎝、南北42㎝の不定形な台形を呈する。２基とも地

山面を中央部では深さ約6cm掘り下げており、断面形は浅いＵ字形を呈する。埋土は、上層に暗褐色（10YR3/3）の、微砂～細砂混じりの粘質土、下層には、灰黄褐色（10YR4/2）の、砂質分の多い微砂混じり粘質土が堆積する。2072土坑内の縄文土器の底部は完存しており、穿孔が施されていた。2071土坑内の縄文土器は縄文時代後期初頭～前葉、2072土坑内の縄文土器は中期末～後期初頭頃とみられる。

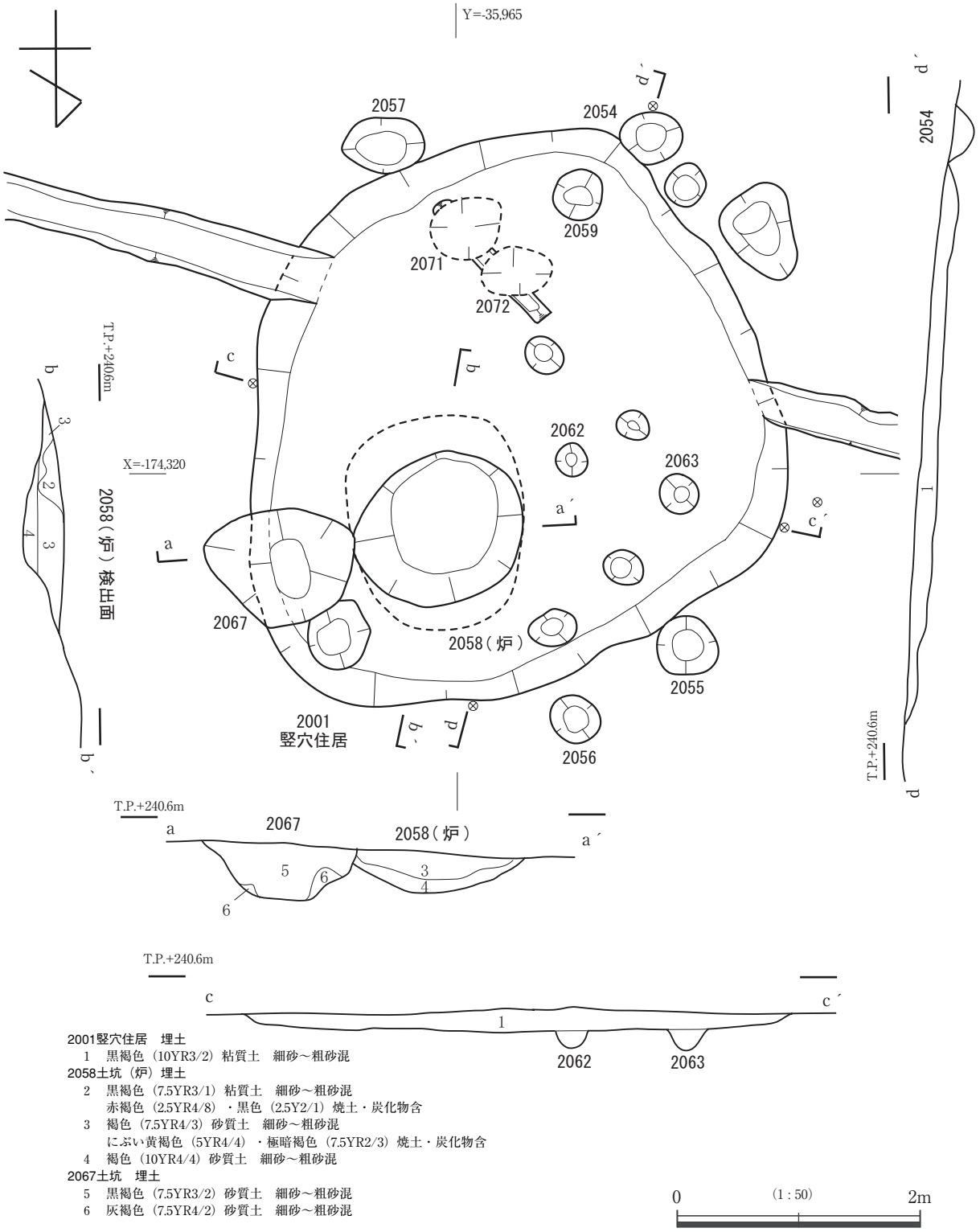


図16　2001竪穴住居・2058土坑（炉）・2067土坑　平面図・断面図

遺構の検出状況から、2001竪穴住居廃絶以降に埋設した土器棺の可能性が考えられる。

2068竪穴住居　調査区西部で検出した竪穴住居の周溝とみられる（図18、図版14ａ･15ａ）。周溝は地山面で検出した。南西部は2002土坑に大きく破壊された状態で検出した。周溝の東端部付近から西壁にいたる範囲は、調査区の中で、最も遺構・遺物の集中する地点で、2068竪穴住居の南東部についても、住居廃絶以降の土地利用で削平されたものと考えられる。残存する住居北壁部の周溝は湾曲しているが、直線にして約４ｍをはかり、2001竪穴住居の南西壁部と2068竪穴住居の周溝は、ほぼ同一の形状をなす。平面形は不明であるが、同程度の規模の住居であったと推定できる。検出面での周溝の幅は24～28㎝で、断面形は深さ12㎝のＵ字形をなす。埋土は黒褐色（10YR3/2）の粗砂を多く含む細砂～粗砂混じりの粘質土である。2001竪穴住居と同様、2068竪穴住居の推定範囲内からは多数の遺物が出土した。特に、住居北東部に相当する、確認調査時のトレンチ北西隅部周辺に縄文土器が密集していた。また、この範囲からは、竪穴住居廃絶後とみられる縄文時代後期の土器も多数出土した。2068竪穴住居の時期は、この一帯の縄文土器に中津式が少なく、時期的に遡る北白川Ｃ式が多くみられることなどから、縄文時代中期末頃とみられる。中津式を多く含む2001竪穴住居とは併存していなかったと考えられる。

2002土坑　調査区西壁に接して検出した最大規模の土坑である（図18、図版14ａ）。平面形は、径3.3×3.5ｍのほぼ正円形を呈する。断面形は、中央部で深さ1.15ｍの不定形ないびつな擂鉢状を呈する。土坑の壁際に沿って、部分的に、浅いＵ字形の周溝状の落ち込みが残存していた。埋土は６つの層からなる（図版14ｂ・ｃ）。下層から順にみると、地山上面にあたる埋土最下層の６層は黒褐色（2.5Y3/2）の砂質土、５層は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土に、にぶい黄褐色（10YR4/3）粘土ブロック土が多く混じる。３・４層は黒褐色（10YR2/3）の微砂～細砂混じりの粘質土で、４層には５層と同様の粘土ブロック土が多く含まれる。２層は暗灰黄色（2.5Y4/2）の微砂～細砂混じりの粘質土、最上層の１層は灰黄褐色（10YR4/2）微砂～細砂混じりの粘質土で、１層と２層は叩きしめたような状態で堆積していた。周溝状の落ち込みは、３層に近い土層だが、明確に分層し難い。黒褐色（10YR2/2）微砂～細砂混じりの砂質土である。土坑内の北斜面で、流れ込んだ状態で宮滝式の浅鉢（図版14ｄ）を検出した。縄文時代後期後葉の段階で、2002土坑は機能を失っていたとみられる。この土坑の上層には、土石流によるとみられる多数の石が堆積していた。

2067土坑　2001竪穴住居の北東部の壁と、この住居の炉跡である2058土坑を、上面から切り込む状態で穿たれた土坑である（図16、図版13ａ）。土坑の規模は、長径1.23ｍ、短径0.95ｍをはかり、検出面での平面形は不定形な台形を呈する。深さは中央部で47㎝をはかり、土坑の床面は平らに近く、断面形はやや丸みを帯びた深い台形を呈する。

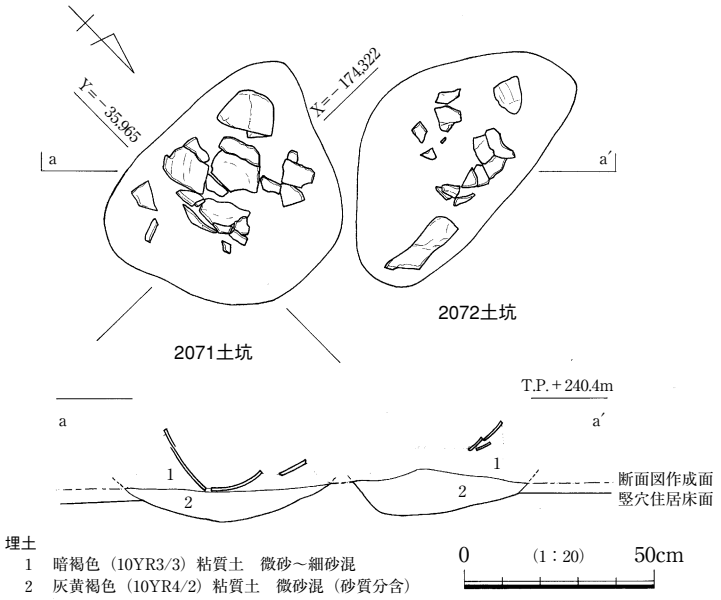


図17　2071土坑･2072土坑　縄文土器出土状況　平面図・断面図

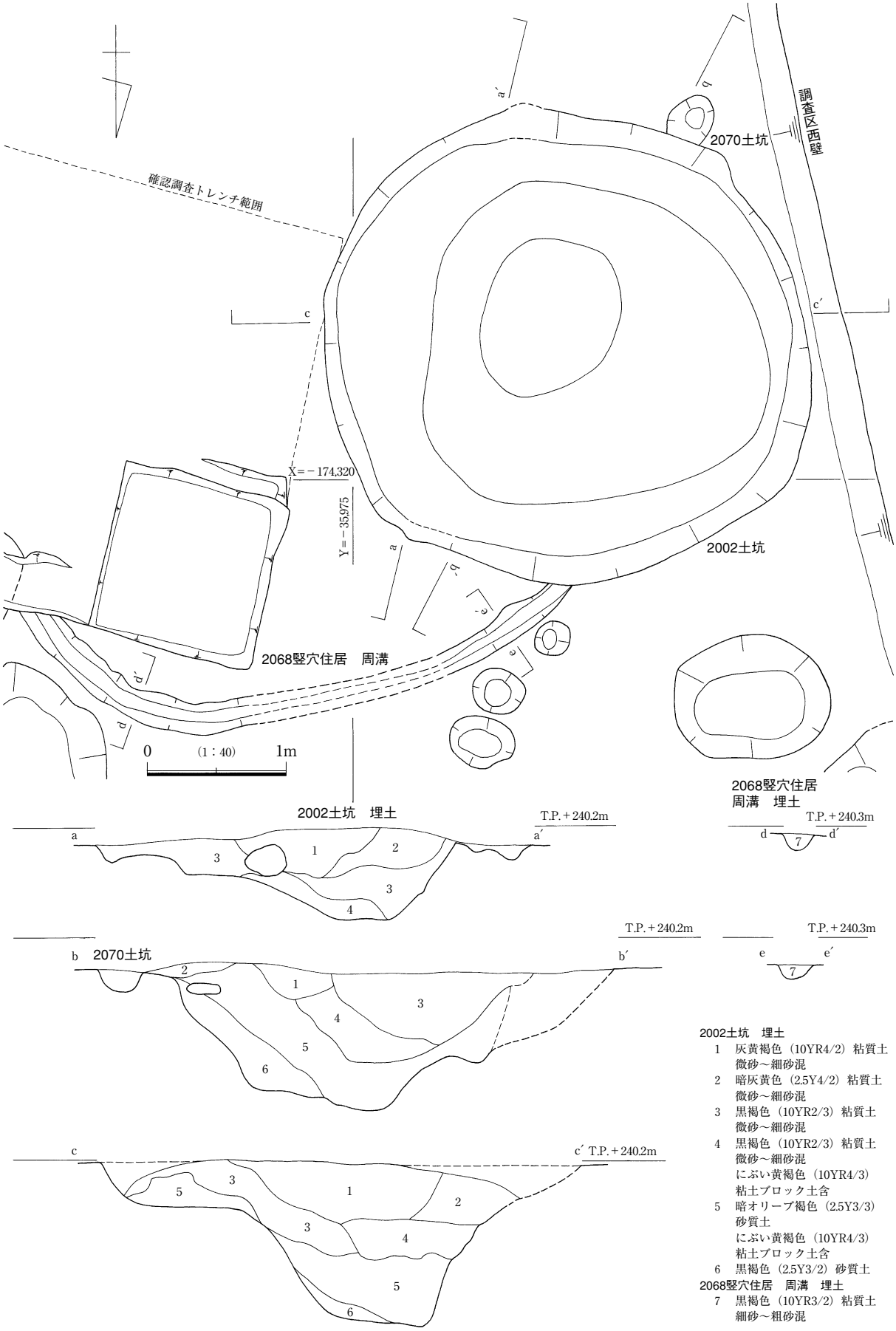


図18　2068竪穴住居・2002土坑　平面図・断面図

埋土は、黒褐色（7.5YR3/2）細砂～粗砂混じりの砂質土で、土坑下部の壁面に堆積した土層は、灰褐色（7.5YR4/2）の細砂～粗砂混じりの砂質土で、より砂質分が多い（図版13ｄ）。土坑の平面・断面形などから、墓坑の可能性が考えられる。この土坑埋土には、縄文時代後期前葉にあたる四ツ池式もしくは北白川上層式１期、掘之内１式の縄文土器が含まれていた。出土遺物からも2001竪穴住居廃絶後といえる。

2007土坑　調査区南西部に長径１ｍ以上の大形土坑10基を検出した（図15、図版10ｂ・ｃ）。2007土坑は、調査区中央部北寄りに位置する。土坑の平面形は長径1.16ｍ、短径0.87ｍのいびつな隅丸方形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.29ｍの台形をなす。埋土上面中央部に、長さ約32×15㎝～14×8㎝の３個の石を検出した。埋土は、２層に分かれ、上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土で、下層（２）は、灰黄褐色（10YR4/2）の微砂～粗砂混じりの粘質土で、上層よりも砂質分が強い（図19、図版16ａ）。土坑埋土から縄文土器片が出土した。

2011土坑　調査区中央部、2007土坑から南へ約2.4ｍ地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.38ｍ（原形は1.14ｍの可能性）、短径0.97ｍのいびつな隅丸方形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.24ｍの台形をなす。埋土東部から、長さ23×14㎝と15×14㎝の2個の石を検出した。埋土は、２層に分かれ、上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土で、下層（４）は、暗褐色（10YR3/3）の細砂～粗砂混じりの粘質土、砂質分が強い（図19、図版16ｂ）。土坑埋土から縄文時代中期末の北白川Ｃ式の深鉢が出土した。

2013土坑　調査区西寄り、2011土坑から西へ約2.3ｍの地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.24ｍ、短径1.18ｍのいびつな隅丸方形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.56ｍの台形をなす。埋土上面や埋土内から、最大長さ47×20㎝～14×11㎝の６個の石が積み重なるように出土した。埋土は４層に分かれる。最上層（６）は黒褐色（10YR2/3）の細砂～粗砂混じりの粘質土で、炭化物を含む。この下層（７）には、上層と類似する土層に赤褐色（5YR4/6）の焼土塊や、炭化物、土器片が含まれていた。さらに下層（４）は暗褐色（10YR3/3）の細砂～粗砂混じりの粘質土、砂質分が強い。埋土最下層（２）には、灰黄褐色（10YR4/2）の微砂～粗砂混じりの砂質分の強い粘質土が堆積する。（図19、図版15ｂ）。土坑埋土から縄文時代中期末の北白川Ｃ式の深鉢が出土した。

2014土坑　調査区西寄りの北壁沿いの、2007土坑から西へ約4.3ｍの地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.29ｍ、短径0.93ｍのいびつな隅丸方形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.23ｍの台形をなす。埋土から、長さ31×18㎝と18×10㎝の２個の石を検出した。埋土（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、埋土（２）は灰黄褐色（10YR4/2）の微砂～粗砂混じりの粘質土である（図19、図版16ｃ）。土坑埋土から縄文時代後期初頭の中津式の浅鉢が出土した。

2027土坑　調査区西寄り、2013土坑に隣接した地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.24ｍ、短径0.86ｍの不定形な楕円形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.23ｍの台形をなす。埋土上面中央部と埋土内に、長さ35×22㎝～９×７㎝の４個の石を検出した。埋土は３層に分かれる。上層（８）は灰褐色（7.5YR4/2）の細砂～粗砂混じりの砂質分の多い粘質土、中層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、下層（９）は最上層と類似した土層（８）に、褐灰色（7.5YR4/1）のブロック土を含むものである（図19、図版16ｅ）。土坑埋土から、縄文時代後期初頭の中津式とみられる深鉢が出土している。

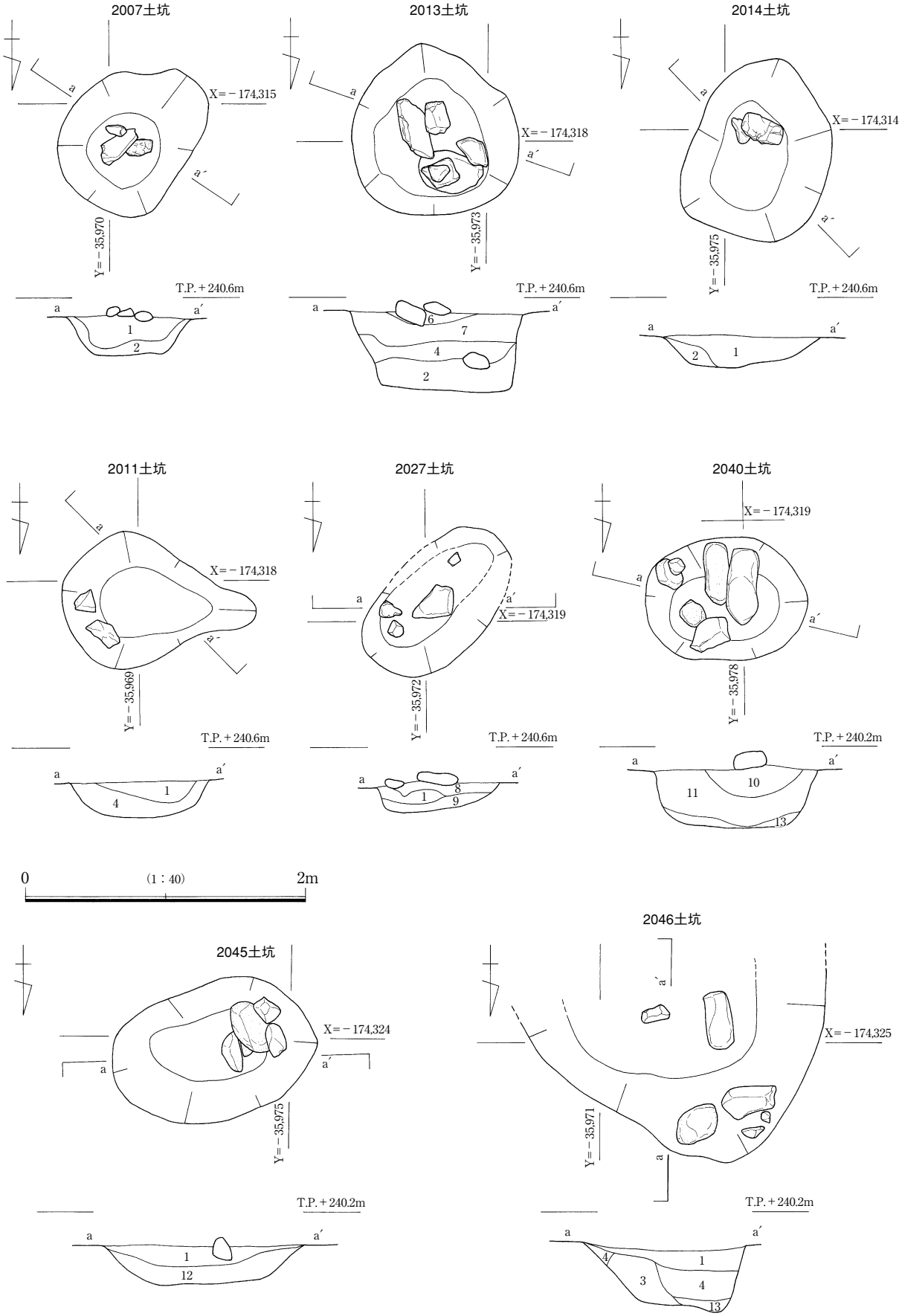
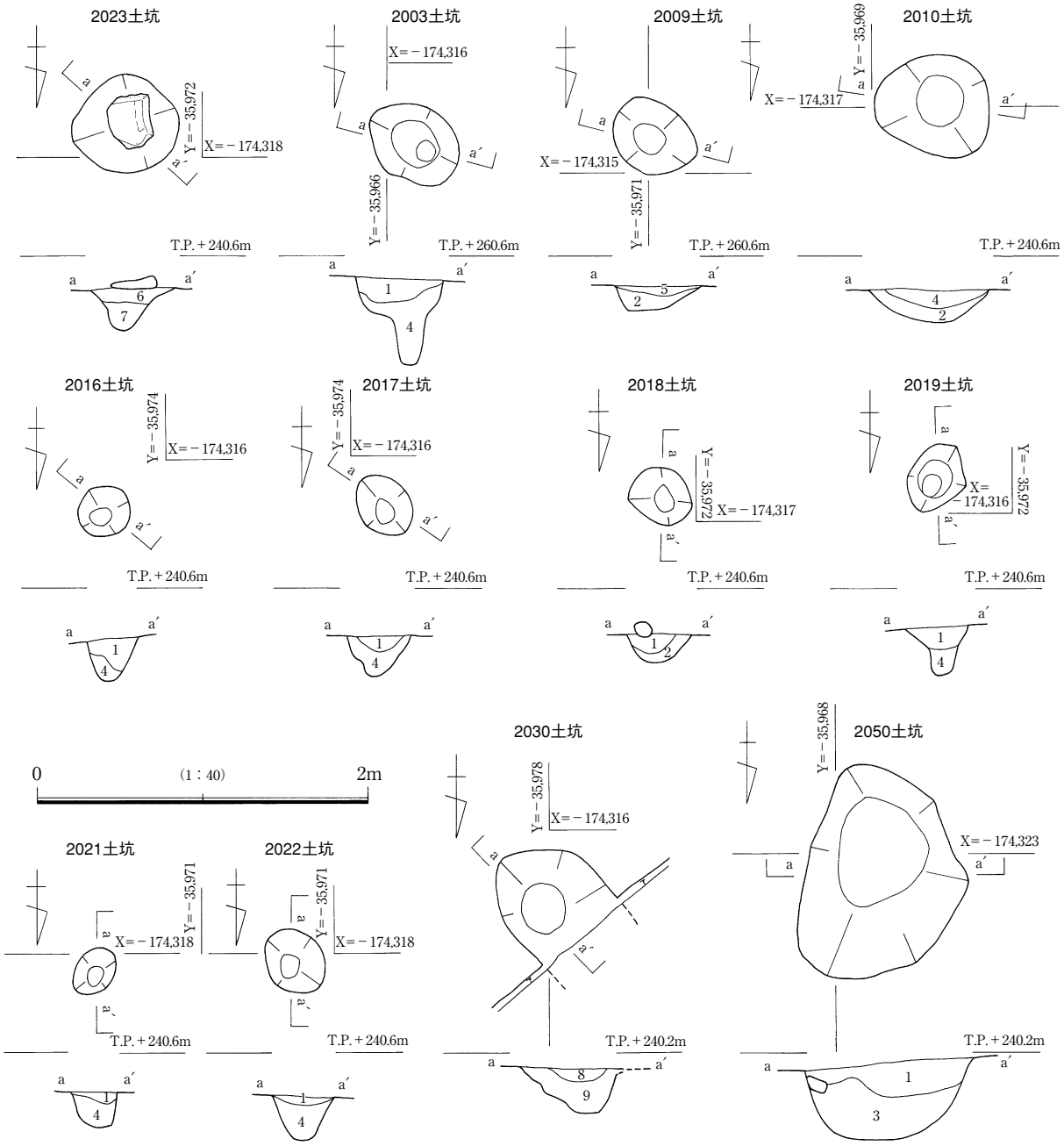


図19　2007・2011・2013・2014・2027・2040・2045・2046土坑　平面図・断面図

2040土坑　調査区西壁沿い、2013土坑から西に約４ｍの地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.16m、短径0.9mの不定形な楕円形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.43ｍの台形をなす。埋土上面や埋土内から、最大長さ54×22㎝～12×13㎝の６個の石が積み重なるように出土した。埋土は３層に分かれ、上層（10）は暗褐色（7.5YR3/3）で、細砂～粗砂混じりの砂質分の多



2003・2007・2009・2010・2011・2013・2014・2016～2019・2021～2023・2027・2030・2040・2045・2046・2050土坑　埋土

1　黒褐色（10YR3/2）粘質土　細砂～粗砂混
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　微砂～粗砂混（砂質分多い）
3　黒褐色（10YR3/2）粘質土　細砂～粗砂混　地山粘土ブロック土含
4　暗褐色（10YR3/3）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　細砂～粗砂混　炭化物含
6　黒褐色（10YR2/3）粘質土　細砂～粗砂混　炭化物含
7　黒褐色（10YR2/3）粘質土　細砂～粗砂混　赤褐色（5YR4/6）焼土塊・炭化物・土器片含
8　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）
9　灰褐色（7.5YR4/2）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）褐灰色（7.5YR4/1）ブロック土を含む。
10　暗褐色（7.5YR3/3）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）
11　極暗褐色（7.5YR2/3）粘質土　細砂～粗砂混
12　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）
13　黒褐色（7.5YR3/1）粘質土　細砂～粗砂混（砂質分多い）

図20　2003・2009・2010・2016～2019・2021～2023・2030・2050土坑　平面図・断面図

い粘質土、中層（11）は極暗褐色（7.5YR2/3）の細砂～粗砂混じりの粘質土である。下層（13）は、黒褐色（7.5YR3/1）の細砂～粗砂混じりの砂質分の強い粘質土である。埋土は３層とも、かたくしまった状態で堆積している（図19、図版15ｃ）。

2043土坑　2027土坑から南に約3.2ｍの地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.21ｍ、短径1.02ｍの不定形な楕円形を呈する（図15、図版10ｂ・ｃ）。断面形は、土坑の底面が平らで、検出面からの深さは0.34ｍの台形をなす。埋土上面には、長さ32×26㎝～24×11㎝の３個の石が出土した。埋土は2層に分かれる。上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土で、下層（３）には、上層（１）と類似した土層に地山ブロック土が混じるものである。2043土坑から南壁にかけての範囲は、遺構の切り合いが特に著しいため、上面の石を残した状態で地山面にて土坑の規模を確認した。土坑埋土から北白川Ｃ式から中津式、称名寺Ⅱ式の深鉢が出土した。縄文時代後期初頭頃とみられる。

2045土坑　2043土坑から西へ約２ｍ、調査区西寄りの南壁から約2.1ｍの地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.44ｍ、短径0.96ｍの不定形な楕円形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.27ｍの台形をなす。埋土上面や埋土内に、長さ39×26㎝～10×８㎝の５個の石を検出した。埋土は２層に分かれ、上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、下層（12）は灰黄褐色（10YR4/2）の細砂～粗砂混じりの砂質分の多い粘質土である（図19、図版16ｆ）。土坑埋土から、北白川Ｃ式から中津式とみられる小片が出土している。

2046土坑　調査区西部に位置し、南壁に切られた状態で検出した。土坑の規模は、調査区内で東西2.21ｍ、南北1.26ｍをはかり、さらに南に広がる。大形の不定形な楕円形を呈すると推定する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.42ｍの台形をなすとみられる。埋土上面や埋土内に、長さ42×20㎝～９×８㎝の６個の石を検出した。埋土は４層に分かれる。上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、この下層（４）は暗褐色（10YR3/3）の細砂～粗砂混じりの砂質分の多い粘質土、土坑北側面部に堆積する土層（３）には、上層（１）と類似した土層に地山ブロック土が混じるものである。最下層（13）は、黒褐色（7.5YR3/1）の細砂～粗砂混じりの砂質分の強い粘質土である（図19、図版17ｆ）。土坑埋土から、縄文時代中期末から後期初頭にあたる北白川Ｃ式から中津式の縄文土器、二次加工のある剝片が出土している。

2050土坑　2043土坑から東へ約２ｍ、調査区中央部南寄りの地点で検出した土坑である。土坑の平面形は長径1.28ｍ、短径0.97ｍの不定形な台形を呈する。断面形は、土坑の底面が平らに近く、深さは0.44ｍの丸みのある台形をなす。埋土内に長さ15㎝×９㎝程度の３個の石を検出した。埋土は２層に分かれ、上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、下層（３）は、上層（１）と類似した土層に地山粘土ブロック土を含むものである（図20、図版17ｅ）。土坑埋土から、縄文時代後期とみられる縄文土器小片が出土している。

以上の2007・2011・2013・2014・2027・2040・2043・2045・2050の９基の土坑と、前述の2067土坑は、平均すると、長径1.25ｍ×短径0.95ｍと同規模の大形土坑で、検出面での平面形は不定形な楕円形・隅丸方形・台形である。また、断面形は底面が平坦な台形を呈する特徴があり、これらの土坑は墓坑の可能性が考えられる。また、埋土内に積み重なった状態で検出した石は、上面に置いていた石が落ち込んだとも考えられる。なお、2046土坑は特に大形であり、墓坑を含む遺構の重複が推定できる。

2003・2009・2010・2016・2017・2018・2019・2021・2022・2023・2030土坑　先の９基と2067・2046土坑を含めた土坑を大形とすると、この項で報告する11基の土坑は小形の土坑である（図20）。これらの土坑は、全て、調査区北部で検出した（図15、図版10ｂ・ｃ）。各土坑の規模と形状は、2003土坑が長径0.58ｍ、短径0.47ｍの楕円形、深さ0.53ｍの漏斗状の断面形、2009土坑が長径0.54ｍ、短径0.42ｍの楕円形、深さ0.13ｍの浅いＵ字形、2010土坑が長径0.68ｍ、短径0.65ｍの不定形な台形、深さ0.18ｍの浅いＵ字形、2016土坑は径0.32ｍの円形、深さ0.27ｍの深いＵ字形、2017土坑は長径0.14ｍ、短径0.30ｍの楕円形、深さ0.24ｍの深いＵ字形（図版17ｂ）、2018土坑は長径0.37ｍ、短径0.34ｍの楕円形、深さ0.17ｍの浅いＵ字形（図版17ｃ）、2019土坑は長径0.43ｍ、短径0.34ｍの楕円形、深さ0.30ｍの漏斗状の断面形、2021土坑は長径0.32ｍ、短径0.24ｍの円形に近い楕円形、深さ0.22ｍの深いＵ字形、2022土坑は長径0.41ｍ、短径0.35ｍの楕円形、深さ0.26ｍの深いＵ字形を呈する（図版17ｄ）。2023土坑は、径0.59ｍの円形、深さ0.24ｍの深いＵ字形をなす。土坑中央の埋土上面に、長さ33×26㎝の平らな石を置いている（図版17ａ）。2030土坑はこれらの中では規模が大きく、長径0.66ｍ、短径0.60ｍの楕円形で、断面は深さ0.27ｍの深いＵ字形を呈する（図版16ｄ）。

埋土は、2003・2016・2017・2019・2021・2022土坑は、上層（１）は黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、下層（４）は暗褐色（10YR3/3）の砂質分の多い細砂～粗砂混じりの粘質土である。2003土坑の下層には焼土のブロック土が含まれている。2010土坑は、上層（４）は暗褐色（10YR3/3）の砂質分の多い細砂～粗砂混じりの粘質土、下層（２）に灰黄褐色（10YR4/2）の微砂～粗砂混じりの粘質土が堆積する。2009土坑は上層（５）がにぶい黄褐色（10YR4/3）の細砂～粗砂混じりの粘質土に炭化物が混じる。下層（２）は2010土坑と同じく、灰黄褐色（10YR4/2）の微砂～粗砂混じりの粘質土が堆積する。2018土坑は、上層（１）に黒褐色（10YR3/2）の細砂～粗砂混じりの粘質土、下層（２）には灰黄褐色（10YR4/2）の微砂～粗砂混じりの粘質土が堆積する。2023土坑は、上層（６）は黒褐色（10YR2/3）の細砂～粗砂混じりの粘質土で、炭化物を含む。下層（７）には、上層と類似する土層に赤褐色（5YR4/6）の焼土塊や、炭化物、土器片が含まれていた。2013土坑の上部層と同様の土層の堆積がみられた。2030土坑は2027土坑と同じく、上層（８）は灰褐色（7.5YR4/2）の細砂～粗砂混じりの砂質分の多い粘質土、下層（９）は上層と類似した土層（８）に、褐灰色（7.5YR4/1）のブロック土を含むものである。

2003・2010・2016・2017・2021・2022・2023・2030土坑から、縄文土器が出土している。2023土坑からは北白川Ｃ式、2030土坑からは宮滝式が出土した。2009土坑からは削器、2017土坑からは石皿が出土した。これらの土坑の性格は不明であるが、このうち、円形土坑の上面に平石を置く2023土坑は墓坑の、2003・2017・2019土坑は断面形の特徴などから柱穴の可能性がある。

2001竪穴住居出土　縄文土器　住居埋土内および埋土上面から、多数の縄文土器が出土した（図21・22、図版30～32）。図21－１は住居南東部、２は中央部の埋土上面から出土した深鉢口縁部で、中津式に属する。３～５は外面に肥厚する口縁部をもつ深鉢で、北白川Ｃ式である。６・７も同じく北白川Ｃ式に属する。８・９は2001竪穴住居内の2058土坑（炉）の埋土内で検出したもので、北白川Ｃ式に含まれる。縄文時代中期末頃といえる。10～15は残存状態の良い底部である。10は器壁の薄い粗製土器、12は小形の底部をもつ深鉢で、ともに後期とみられる。11は上げ底の小形の底部をもつ浅鉢で、外面に

はていねいなミガキが施される。北白川Ｃ式から中津式といえる。13～15は器壁の厚い大形の底部をもつもので、14が中期末の北白川Ｃ式、13・15は中期に含まれる可能性がある。

図22－19・20・21・23・29・30・31・32・34・36・38は北白川Ｃ式の深鉢、18・33が北白川Ｃ式から中津式、22・37は中津式、35･39は中期もしくは後期前葉、24・26・27・28は後期に属するとみられる。また、41は福田ＫⅡ式もしくは四ツ池式で後期前葉、40は後期後半、25は凹線文を施した元住吉山Ⅱ式から宮滝式の後期後半頃と考えられる。42は縄文時代中期中葉の船元式である。

2071土坑・2072土坑出土　縄文土器　2001竪穴住居内南部で検出した２基の土坑に並んで埋設されていた深鉢である（図21－16・17、図版33ａ）。16は北西側の2072土坑から、17は南東側の2071土坑から出土した。16は体部から底部への屈曲部に粘土を貼り付けており、低い高台状を呈する。底部は径6.4㎝で、中央部に径1.8×1.5㎝の楕円形の穿孔が施されている。17は底部から体部にかけて、高さ32.5㎝まで残存している。底部の中央部の形状は欠損のため不明である。底部復元径は10.1㎝、体部最大復元径は33.0㎝である。器壁は６㎜程度と薄い。外面はたて方向のケズリの上にナデを施す。外面の体部上方部には比較的厚く、下方部には薄くススが付着する。16は縄文時代中期末～後期初頭、17は後期初頭～前葉頃とみられる。

2068竪穴住居推定範囲出土　縄文土器　竪穴住居の北部周溝の位置から推定した住居範囲内出土の縄文土器である（図23・24、図版33ｂ～36）。遺構の項で記載したように、住居廃絶後の遺構の切り合いが多く、出土土器にも時期的なばらつきが認められる。確認調査トレンチ北西部隅の方形部周辺から多数の遺物が出土したため、この地点を基準に取り上げた。特に西部側に集中していた。図23・24－43～78・89～94は西部、79～88・95は東部側で検出した。図23－43・44は北西部から、45はやや北寄りで出土したもので、43･44は北白川Ｃ式、45は北白川Ｃ式の中でも馬場川O式に含まれる深鉢である。縄文時代包含層および同レベルの遺構埋土上層にて、これらの大形破片を検出した。46～48・55は南西部の同一地点の地山に近いレベルの土層内で検出した。46は後期前葉の四ツ池式深鉢、47は後期の浅鉢、48は後期前半の粗製土器、55は後期前半に含まれるものである。49～54は北西部上層の同一地点から出土したもので、49は中期中葉の船元Ⅱ～Ⅲ式、50は中期中葉の里木Ⅱ式、52・54は中期末の北白川Ｃ式､51は後期中葉の一乗寺Ｋ式、53は後期前半とみられ、時期差が認められる。また、北西部上層からは、56･57が北白川Ｃ式、58・61・62が後期に属すとみられる。南西部上層から出土した60は、後期前葉の北白川上層式1期の深鉢である。北部の地山に近いレベルの同一地点から、59の中期もしくは後期とみられる深鉢と63の縄文時代早期、神並上層式の押型文の深鉢が出土した。

図24－64・65・66・68は北西部の同一地点で、64・68は北白川Ｃ式、65・66は後期とみられる。69～71・74・75・76・78は南西部の同一地点で、69・70・74・76は北白川Ｃ式、71は後期前半の北白川上層式２期、75は後期前葉、78も後期の深鉢とみられる。南西部で検出したもののうち、73は北白川Ｃ式、77は後期中葉の一乗寺Ｋ式、67も後期の粗製深鉢とみられる。南東部の同一地点から、突起状山形口縁をもつ79や、81・85の北白川Ｃ式の深鉢をはじめ多くの破片が出土した。また、北東部では、80・87が中期末の北白川Ｃ式に、88の後期前葉の北白川上層式が出土した。南部では、84・86が北白川Ｃ式に対し、82・83が後期のものと考えられる。実測可能な底部として、89～95を掲載した。89・90・93～95は縄文時代中期の底部とみられる。95は上げ底状の底部で、内面には強い指押さえが施される。また、91

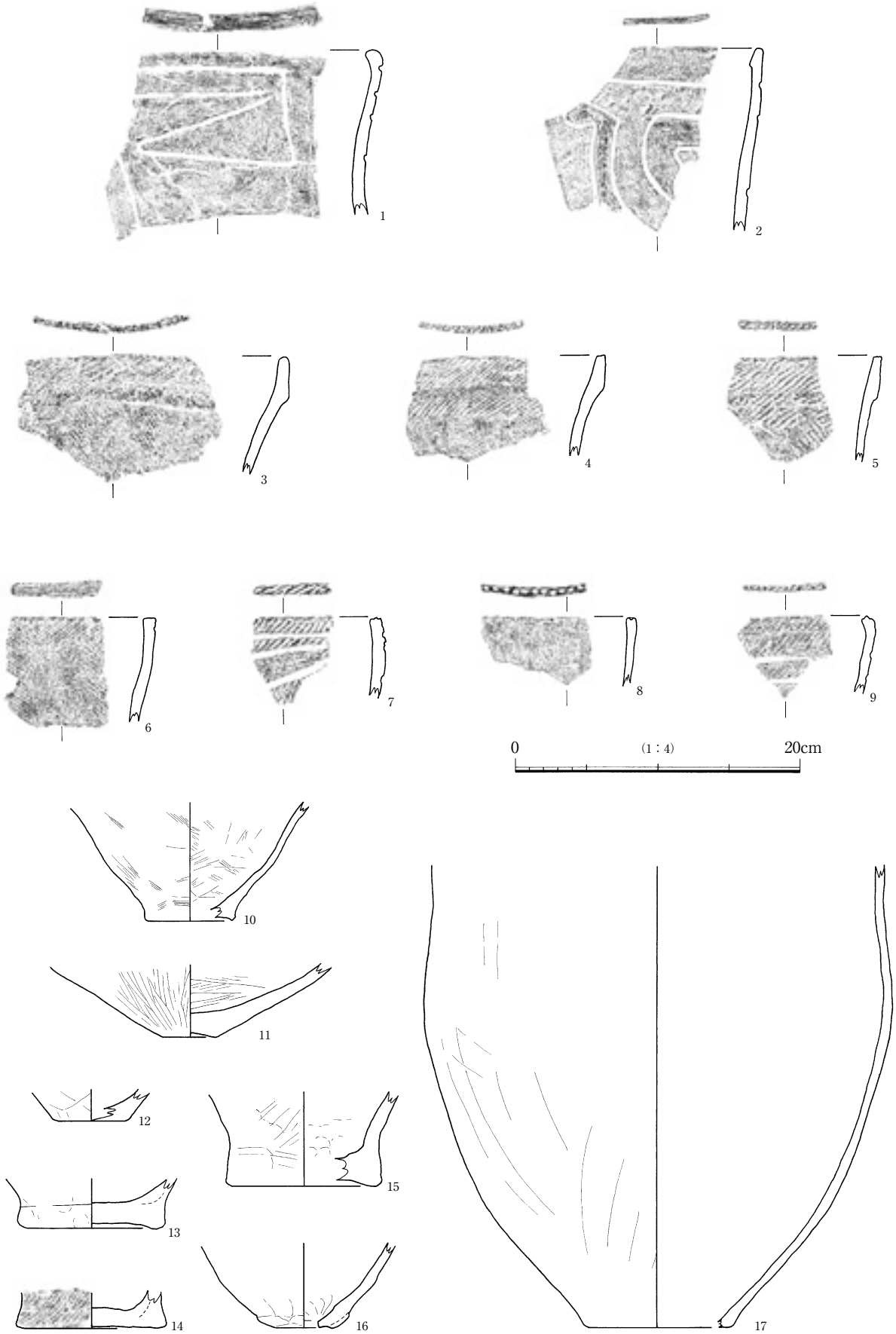


図21　縄文土器　実測図（1）

図22　縄文土器　実測図（２）

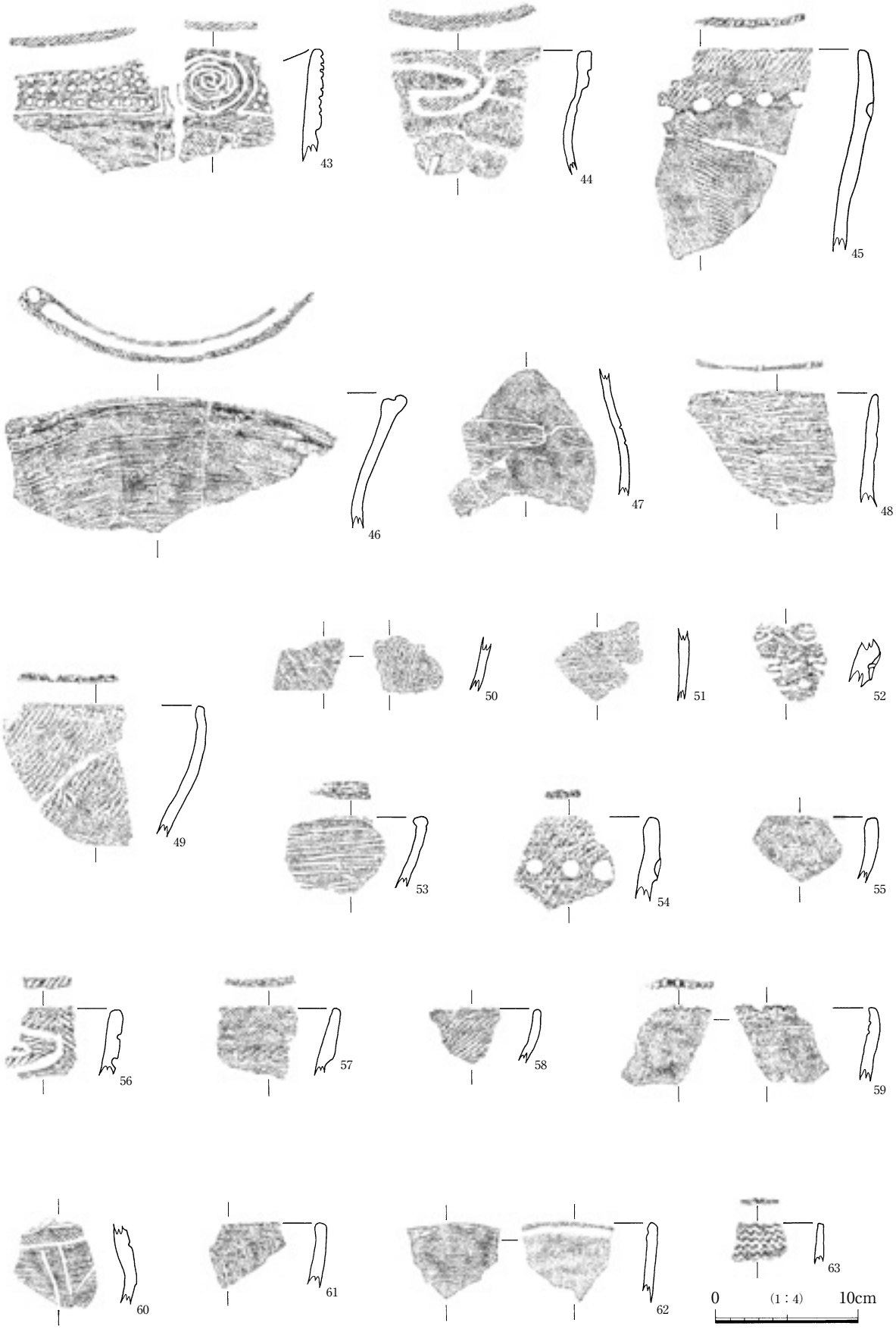


図23　縄文土器　実測図（３）

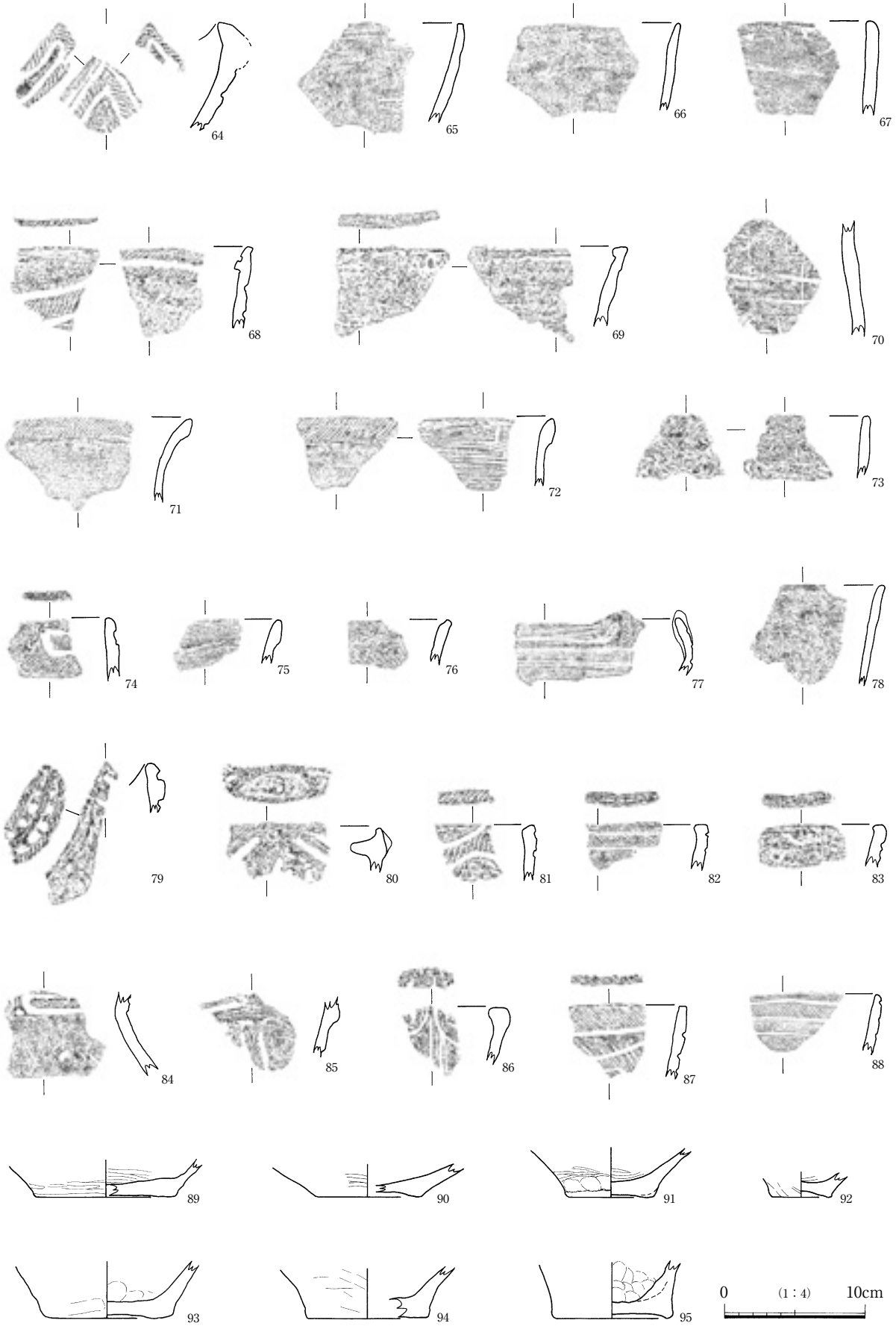


図24　縄文土器　実測図（4）

は2072土坑内の穿孔のある土器と同様に、底部から体部の屈曲部に粘土を貼り付け、体部外面を指で強く押さえている。92は上げ底の小形の底部で、外面にミガキが残る。91と92は後期の底部とみられる。

2002土坑出土　縄文土器　図25－96は、底部と体部の屈曲部に凹線をもつ浅鉢とみられる。底部外面にケズリ、底部内面と体部内外面にはミガキを施す。後期後葉の滋賀里式の古い方を含む宮滝式の新しい要素をもつ浅鉢である。97・98は混入とみられる北白川Ｃ式の浅鉢と深鉢である（図版37ａ）。

2006土坑出土　縄文土器　99はゆるやかに屈曲した細い頸部から外下方に体部がのびる。内外面ともにナデで仕上げる。体部外面に、一部、鉤状の沈線が残る。体部内面にススが付着する。北白川Ｃ式から中津式の深鉢とみられる。100は外に張り出した底部で、内面にススが付着している。北白川Ｃ式と考えられる（図版37ａ）。

2011土坑・2013土坑出土　縄文土器　101は2011土坑、102は2013土坑埋土から出土した。ともに北白川Ｃ式の深鉢である（図版37ａ）。

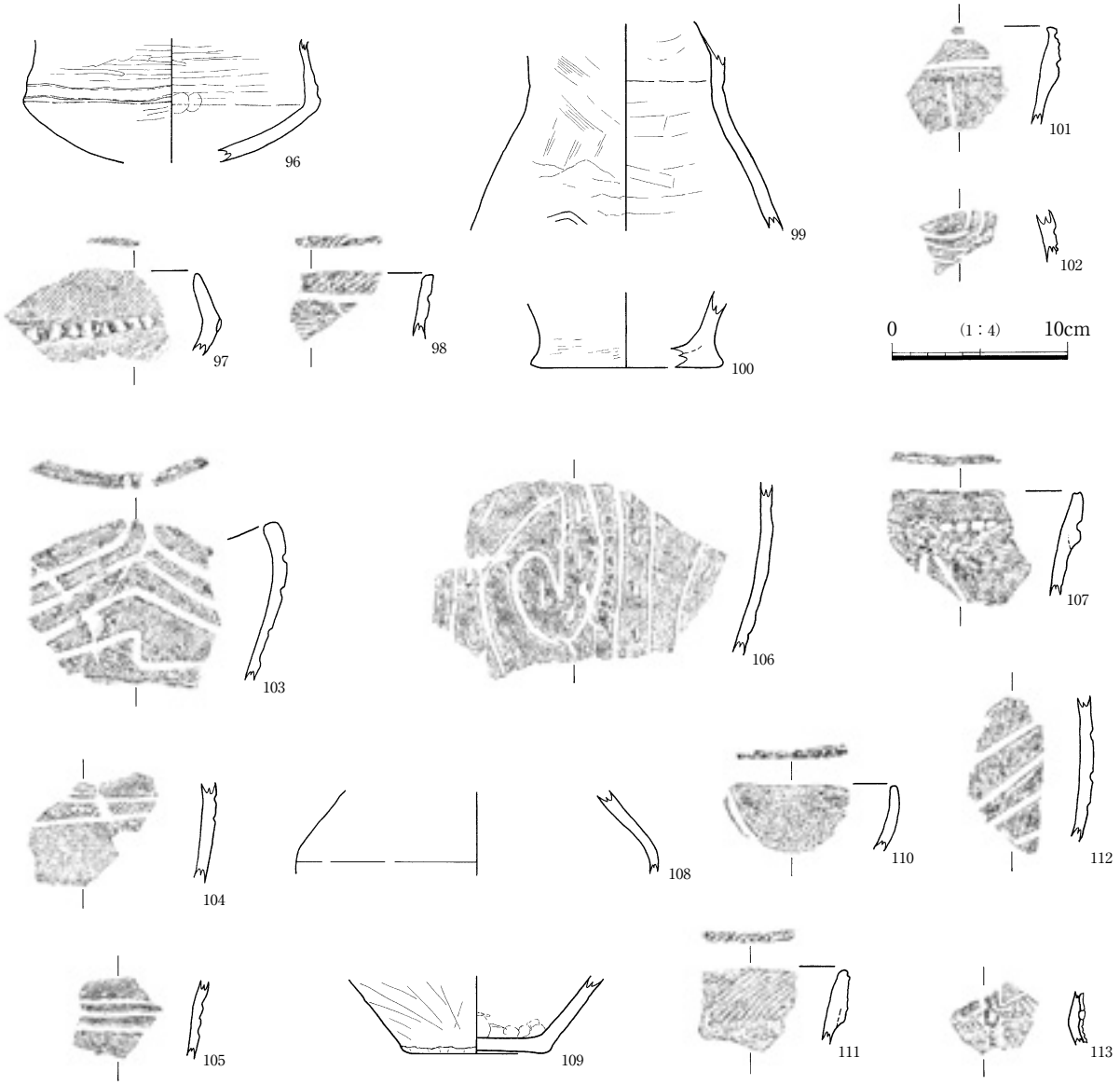


図25　縄文土器　実測図（５）

2014土坑出土　縄文土器　103は埋土内上層から出土した大形の破片で、中津式の浅鉢とみられる（図版37ｂ）。

2027土坑・2030土坑出土　縄文土器　104は2027土坑出土の中津式の深鉢、105は2030土坑出土の宮滝式の深鉢である（図版37ｂ）。

2043土坑出土　縄文土器　106は「Ｊ」字文を施す深鉢の体部で、後期前葉の称名寺Ⅱ式である。外面にはススが付着する。107は中津式の深鉢とみられる（図版37ｂ）。

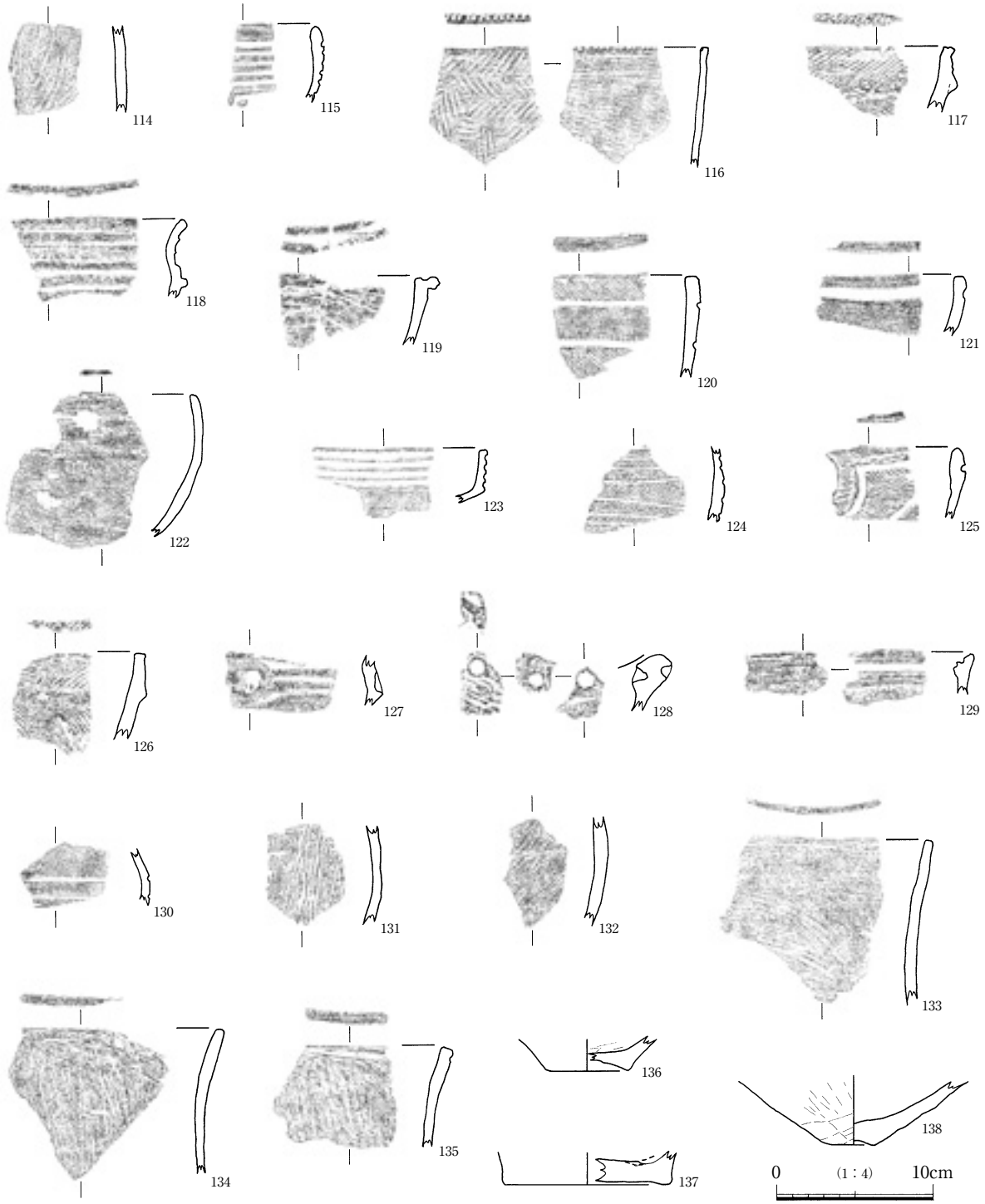


図26　縄文土器　実測図（６）

2046土坑出土　縄文土器　111は北白川Ｃ式、112は北白川Ｃ式から中津式、110は中津式に属するとみられる。108は後期の浅鉢、109は、同じく後期前葉とみられる底部で、内面には指押さえが残る（図版38ａ）。

2067土坑出土　縄文土器　113は四ツ池式もしくは北白川上層式１期（掘之内１式）に含まれるもので、後期前半といえる（図版37ｂ）。

包含層出土　縄文土器　縄文土器が含まれていた包含層については、層序の項で記載したように、1中世段階で撹乱のあった第３層、2純粋な縄文包含層である第５層、3およそT.P.＋240.4mで削平された土層面以下、一部、特定不可能な遺構埋土を含む層から出土したものである。2・3については、分別できないため、第５層として取り上げた。図26－114～127・138（図版38ｂ、図版39ａ・ｂ）は第５層、128～133・136・137（図版39ａ・ｂ）は第５層と第３層の分層が不明確な地点、134・135（図版39ｂ）は第３層から出土した。

第５層の縄文土器のうち、116は縄文時代前期中葉の北白川下層Ⅱ式、114は中期中葉の船元式である。116は地山に近い土層から出土した。中期末から後期の段階では、117・126は北白川Ｃ式、120・125は中津式、119は後期前葉の四ツ池式、115は四ツ池式に併行する松ノ木式に属するものである。また、124は後期中葉の一乗寺Ｋ式、元住吉山Ⅰ式もしくは北白川上層式３期に含まれるものである。後期後葉の時期には、122・123が元住吉山Ⅱ式から宮滝式、121が宮滝式前後、118・127が宮滝式に属する土器と考えられる。また、138は小型の上げ底の底部から外上方に大きく開く体部をもつ浅鉢である。外面には一部、ミガキが残る。後期とみられる。第３・５層のうち、137は器壁の厚い安定した底部で、中期の深鉢の底部とみられる。129は四ツ池式、130は一乗寺Ｋ式もしくは元住吉山式､132は元住吉山式、136は上げ底の薄い器壁をもつ底部で、元住吉山式とみられる。128は元住吉山式から宮滝式の口縁部とみられる。その他、131・133も後期の粗製土器といえる。第３層からは134・135の同じく後期に含まれる粗製土器が出土した。掲載した土器は、出土土器の中で、拓本採取の可能な大きさのものを選択している。調査区の最も土地利用された時期を、縄文時代中期末から後期初頭とすると、包含層からは後期の土器の割合が多いことが認められる。

2001竪穴住居出土　石器　住居内または埋土上面から、図27－139～145（図版40ａ）、図版40ａ－①～⑧（写真のみ掲載）の打製石器、および図30－157・158（図版41ａ）、41ａ－⑫～⑯（写真のみ掲載）の磨製石器が出土した。139・140は、凹基式石鏃で、小型、軽量である。139は側縁が直線的で、形状は正三角形に近い。140は基部がやや鋭角的で、左右の脚部の長さが大きく異なる。側縁は中央部がわずかに外湾する。ともに完形で、重さは139が0.5ｇ、140が0.9ｇをはかる。141は横型の石匙である。たての長さ4.0㎝、重さ8.2ｇである。142は楔形石器で、全体の形状は長方形を呈する。重さ23.8ｇである。2058炉の埋土から出土した。143は削器で、２面に自然面が残る比較的大形の正方形をなす。重さ59.4ｇとなる。144・145は石核である。144は住居中央部の遺物集中地点で、139と近接して出土した。重さは127.7ｇである。145は住居内北西部の壁際の床面にくいこんだ状態で出土した。重さ170.5ｇをはかる。①は142同様、炉埋土から出土した二次加工のある剝片で、重さは3.1ｇである。②～⑧は二次加工のある剝片で、住居中央部で出土した。重さは②が5.6ｇ、③は8.4ｇ、④は17.6ｇ、⑤は28.6ｇ、⑥は28.1ｇ、⑦は24.4ｇ、⑧は55.3ｇをはかる。石材は二上山北麓産のサヌカイトである。

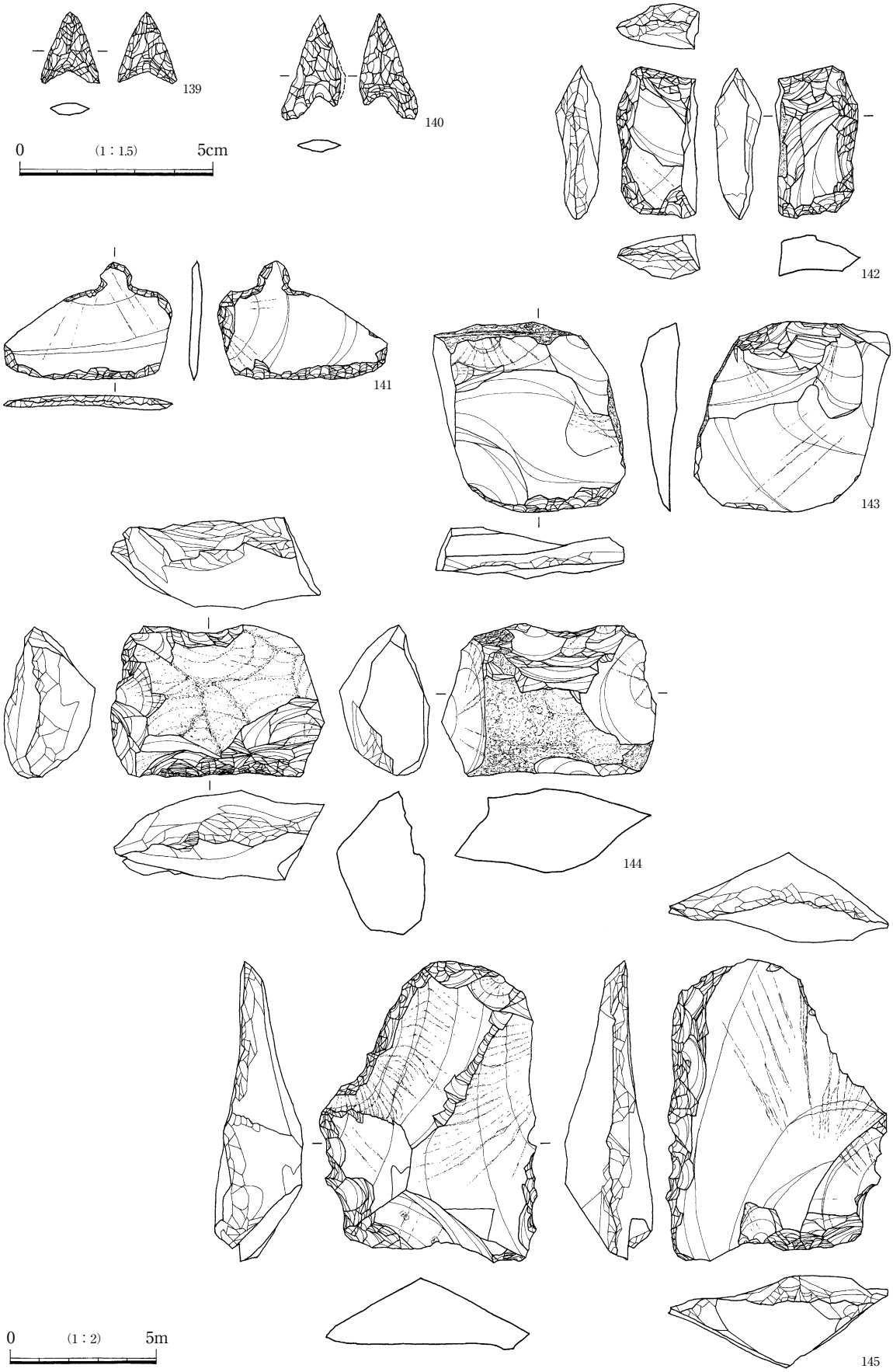


図27　打製石器　実測図（1）

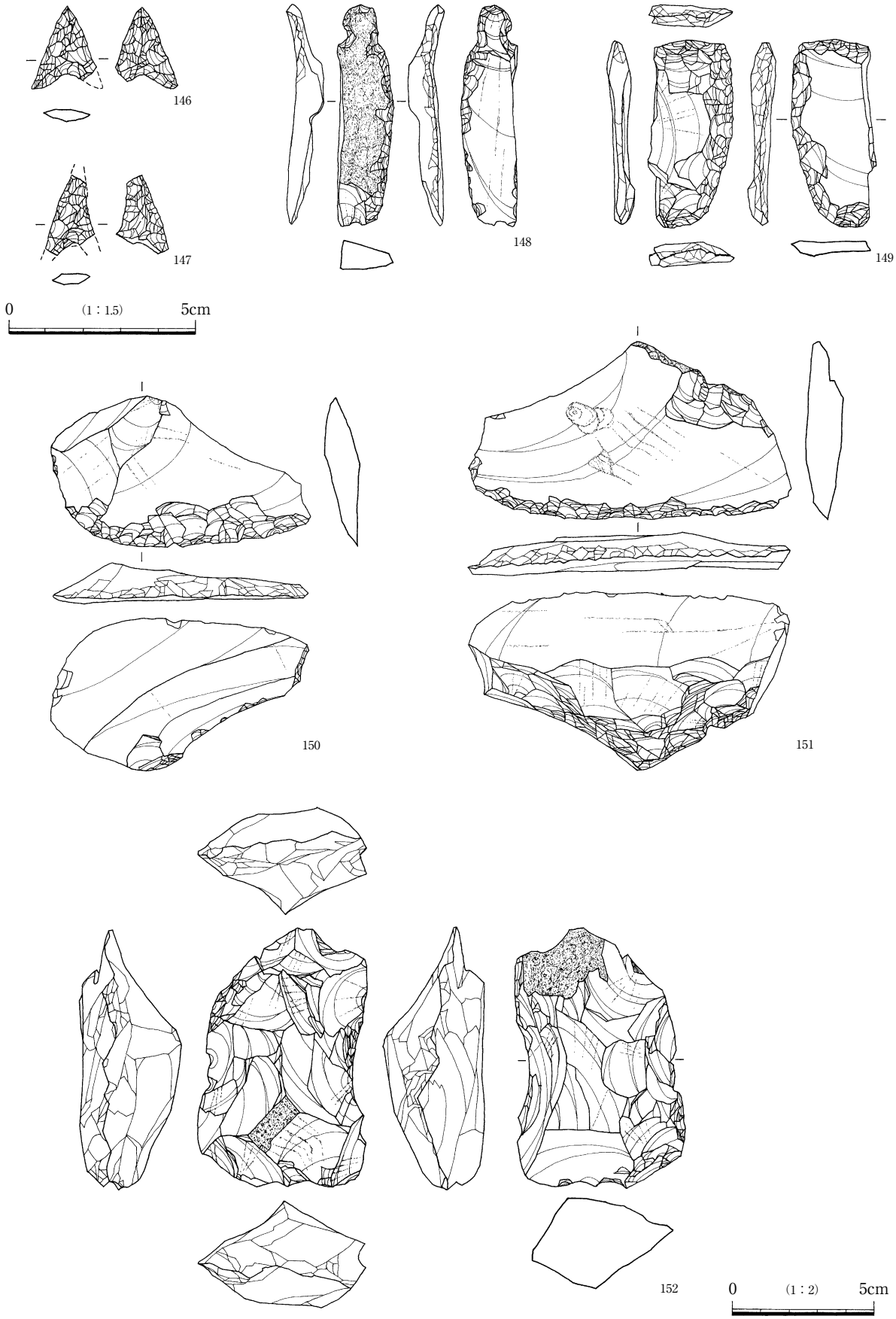


図28　打製石器　実測図（２）

157は磨製石斧で基部のみ残存している。扁平な両刃が作り出されていたとみられる。重さは277.3ｇである。158は敲石もしくは凹石である。住居内北東部の炉跡の上面から157の石斧と接するように出土した。両主面・両側面・両端面に敲打痕の残る敲石で、特に主面の敲打痕は顕著である。重さは568.2ｇをはかる。⑮は打製石器が多く含まれる地点から出土した磨石で、特に両端面の磨痕が顕著である。重さ641.7ｇである。⑯も部分的に敲打痕も残るが、磨痕が顕著で、主に磨石として用いられたものとみられる。重さ788.6ｇである。⑫・⑬は石錘である。不整形な楕円形の河原石の上下端を打ち欠いて、抉りを入れている。⑫は重さ74.2ｇ、⑬は重さ83.2ｇである。⑭は敲石で掲載写真の上下端面に、特に顕著な敲打痕が残る。また、主面には磨痕もみられる。

2068竪穴住居推定範囲出土　石器　住居推定範囲内から、図28－146～152（図版40ｂ）、図版40ｂ－⑨・⑩（写真のみ掲載）の打製石器、図30－159・160・161・164（図版41ｂ）、図版41ｂ－⑰～⑳（写真のみ掲載）の磨製石器が出土した。縄文土器の出土状況と同様に、これらの石器も、住居の埋土の他、別の切り合いをもつ遺構の埋土、または包含層に含まれていた可能性のある石器も含む。146・147は凹基式石鏃で、2001竪穴住居出土の石鏃と同じく小型・軽量である。146はやや縦長の二等辺三角形で、片方の脚端部が欠損する。147は細く長い二等辺三角形で、片方の側縁は中央部がわずかに外湾する。先端部と左右の脚部の一部が欠損している。重さは146・147ともに0.8ｇをはかる。148は縦型の石匙である。片面には自然面が残る。重さ16.0ｇである。149は削器で、両面からていねいに打ち欠いて薄い刃部を作り出している。重さ16.0ｇである。150・151は削器で、刃部は直線的に作り出している。重さは150が49.9ｇ、151が92.9ｇである。152は石核で、2068竪穴住居範囲内もしくはやや東側の地点から出土した。２面に自然面を残すもので、加工前の石材の厚みが３～４㎝であった可能性がある。重さ178.2

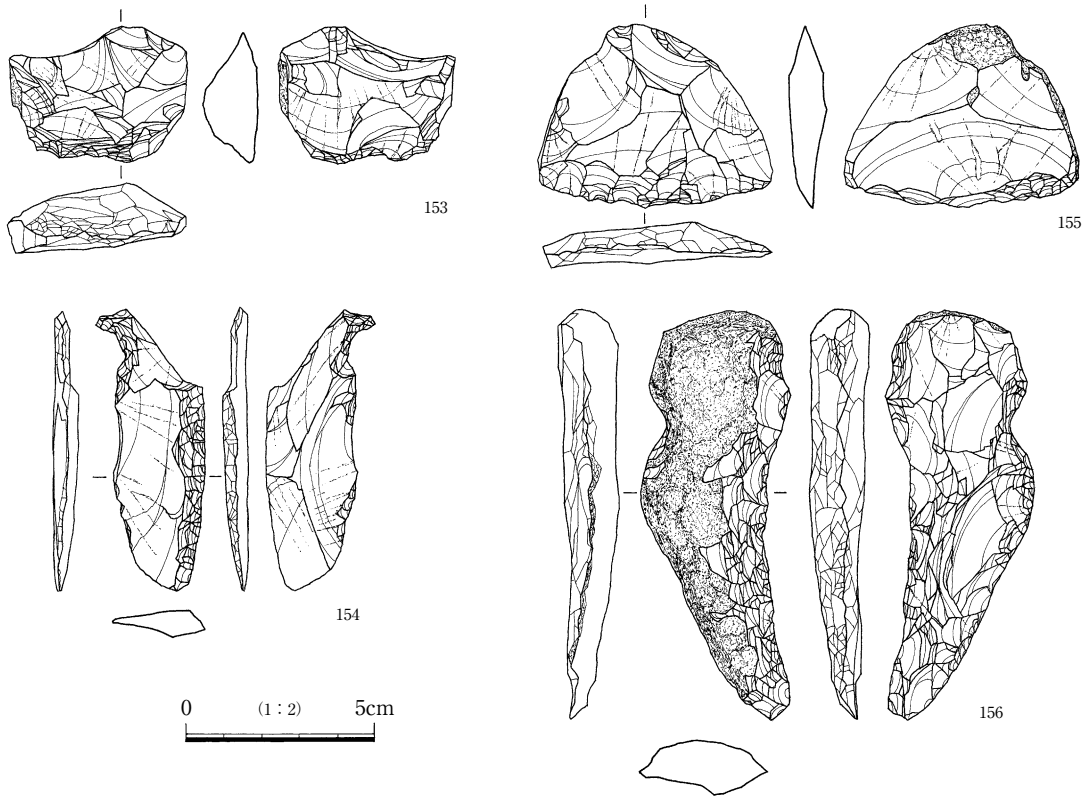


図29　打製石器　実測図（３）

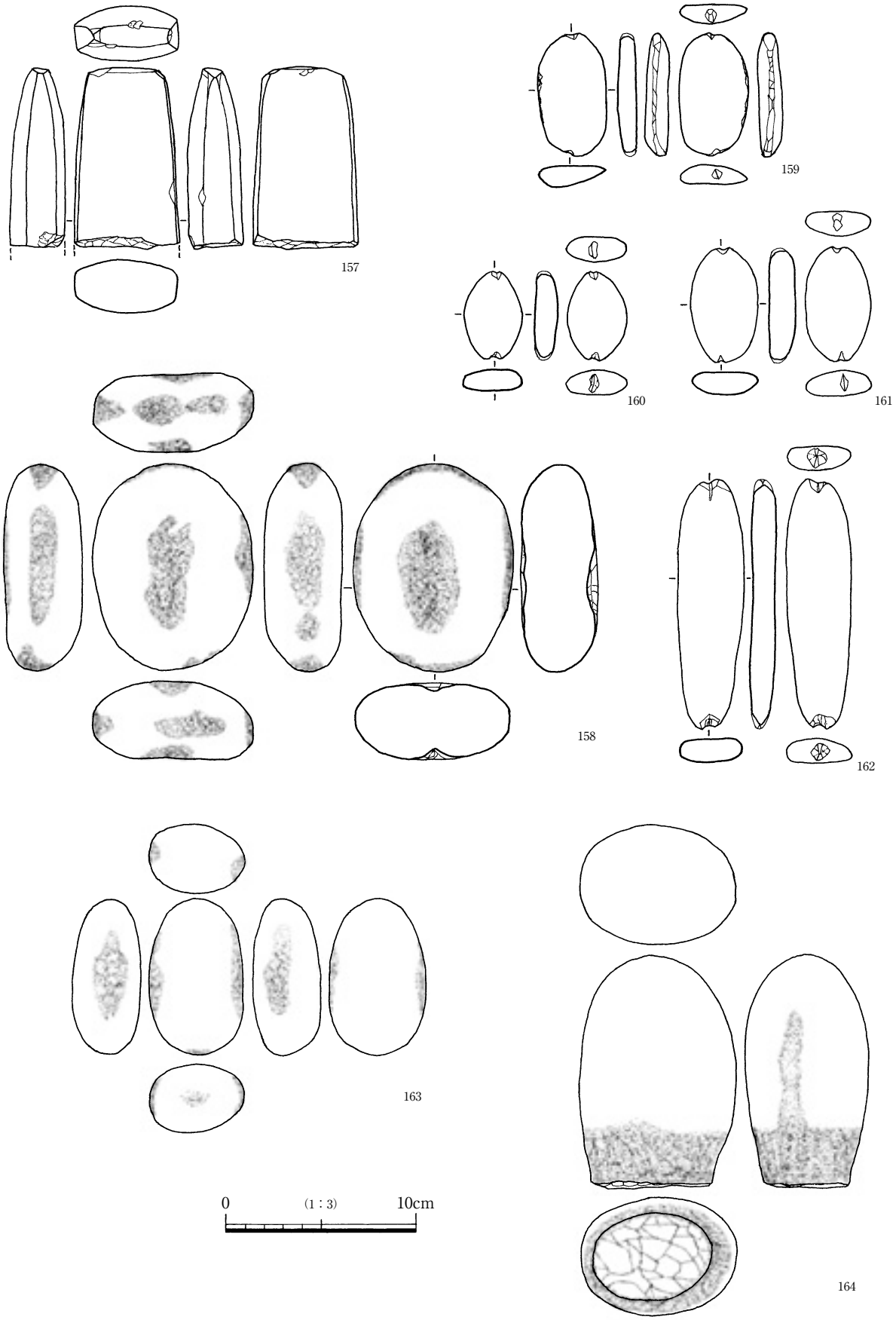


図30　磨製石器　実測図

ｇである。⑨・⑩は二次加工のある剝片で、⑨は14.4ｇ、⑩は42.6ｇをはかる。147・148・150・151は縄文土器、剝片、チップ、焼けた石などの集中する確認トレンチ内の北西部分から出土している。石材については、151が法恩寺山のガラス質安山岩の可能性があり、住居範囲内出土の剝片１点が金山産サヌカイトであるという教示を得た。その他は二上山北麓産のサヌカイトである。

159・160・161は漁撈に使われたとみられる石錘である。住居範囲内の北東部から出土した。楕円形の扁平な河原石の両端部を159は打ち欠き、160・161は擦り切りで抉りを入れているとみられる。159は紐擦れ状の痕跡が残る。重さは159が41.5ｇ、160が26.0ｇ、161が43.6ｇをはかる。⑰は隅丸方形の石錘で、四辺に粗雑な打ち欠きが施されている。表面に十字にかけた紐状の擦痕が残る。重さは61.0ｇである。⑱はやや扁平な球形の磨石、⑲は長い俵形の敲石とみられる。⑱は重さ170.5ｇ、⑲は重さ582.8ｇをはかる。164は用途不明の砂岩製の磨製石器である。住居北部の土器や石器の密集した地点から出土した。一方の端部近くには擦痕が残り、全体に細くなっている。端面は打ち欠いているとみられる。片方の端部は丸く、中央に敲痕状のものが残る。長さ12.2㎝、最大幅8.2㎝、重さ970.0ｇである。⑳は平坦な主面中央部に磨面をもつもので、石皿として用いられたとみられる。重さは282.2ｇである。

2002土坑・2009土坑・2017土坑・2046土坑出土　石器　図29－153（図版40ｂ）は2002土坑出土の削器で、重さ31.2ｇである。また、154（図版40ｂ）は2009土坑出土の縦長の削器で、重さ13.2ｇである。図版40ｂ－⑪（写真のみ掲載）は2046土坑出土の二次加工のある剝片で、重さ41.3ｇをはかる。二上山北麓産のサヌカイトである。図版41ｂ－㉑（写真のみ掲載）は、柱穴の可能性がある2017土坑から出土した。一部欠損しているが、楕円形の扁平な砂岩である。平坦な主面に敲打痕・擦痕、また側面には敲打痕がみられる。敲石・石皿・台石として使ったものとみられる。重さは432.4ｇである。

包含層出土　石器　縄文土器の項で記載した堆積状況と同様の土層に包含されていた石器である。図29－155（図版40ｂ）は第３～５層に、156（図版40ｂ）は第５層から出土した。155は両面から打ち欠いた刃部をもつ削器で、重さ29.5ｇである。156は削器で、片面に自然面を残す。重さ67.5ｇである。図30－162・163（図版41ｂ）は第３～５層に含まれていた。162は、他の石錘と異なり、長さ13.1㎝、最大幅3.3㎝、厚1.3㎝の扁平な細長の形状を呈する。両端部には擦り込んだ抉りを入れている。石材は緑色片岩とみられる。重さは107.3ｇをはかる。163は俵形の磨石で、側面に磨痕がみられる。重さ220.5ｇである。

包含層出土　土師器・瓦器　第２・３層出土の古代・中世の遺物６点については、写真を掲載した（図版42ｂ－㉒～㉗）。㉒は高台をもつ土師器椀で、内外面にミガキを施す。11世紀末頃と考えられる。㉓は土師質小皿、㉔は瓦器椀、㉕は瓦器皿の各口縁部で、13世紀後半から14世紀頃とみられる。㉖は比較的大型の高台を貼り付けた瓦器椀で、和泉型Ⅲ期、13世紀前半頃と考えられる。㉗は同じく瓦器椀の底部で、新しい段階の形骸化した高台をもつ。和泉型Ⅲ期、13世紀後半頃とみられる。

（注）本書に記載した縄文土器・石器などの遺物、竪穴住居・土坑などの遺構、また土石流について、多くの研究者の方々からの御教示を得た。

第３節　３区

（１）層序

３区は、２区の南東角から南に向けて国道沿いに設定した細長い調査区である。３区は、２区と同様に、山側から西に向かって延びる丘陵上に立地している。３区における地山面の標高は、調査区北端部でT.P.＋241.12mである。屈曲部から約５m、南端部からみて北へ約６mの地点で地山面が高くなる。この地点から、直線にして北へ約12mの地山の低い範囲には、２区と同じく、もしくはさらに多数の大小の石が堆積している。南端部での地山面は標高T.P.＋241.41mをはかる。

３区については、調査区東壁の断面土層図を掲載した（図31、図版18）。ここでは、２区に対応する土層として、第１層と、第２層内で細分した８層のうちの４つの層と、第６層の計６つの土層の堆積がみられた。さらに、３区では、地山面が低くなる地点から、北へ11mの範囲で地山直上に第10層の堆積が認められた。また、これらの基本層序以外に、中世の可能性のある炭化物を含む土層①と、大畦畔内の上・中・下層（②・③・④）がみられた。現在の地表面は、T.P.＋242.3～T.P.＋242.4mである。

第1層は現代の耕作土である。第２層については、床土をはさみながら堆積する近現代以前の耕作土とみられる。２区で堆積していた第２層内の第２－２・２－３・２－５・２－８層が確認できた。２区において堆積していた縄文時代の遺物も多く含む中世の包含層である第３層、縄文時代の包含層である第５層、地山直上に堆積する縄文時代の包含層である第９層は認められなかった。また、地山が削平されて堆積したとみられる第７・８層の堆積もみられなかった。

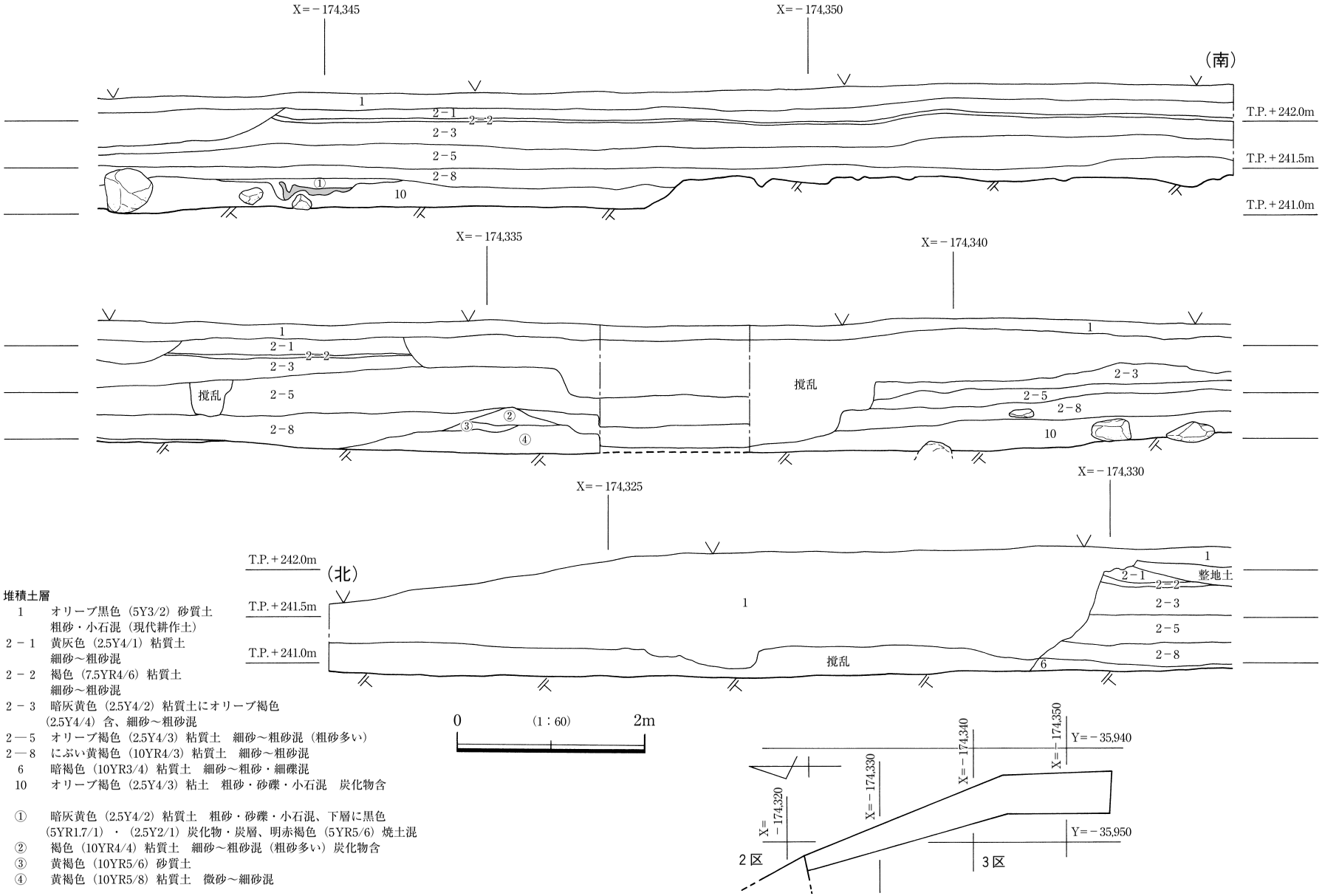
３区で確認した第10層は、南壁から約６m北の地山面が低くなる地点から中央部にいたる範囲に、地山上面に堆積する。オリーブ褐（2.5Y4/3）粘土に、粗砂・砂礫・小石混じりで、炭化物を少量含む。

以上の基本層序の他に、①～④層がみられた。①層は、調査区南端部から約９～11mの範囲に堆積していた中世とみられる炭化物を含む土層である。この層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土に、粗砂・砂礫・小石を含む層で、下部に、一部、明赤褐色（5YR5/6）の焼土の混じる黒色（5YR1.7/1）・（2.5Y2/1）の炭化物・炭層が厚く堆積するものである。この上層が中世の耕作土とみられる第２－８層であるが、①層の堆積地点から南壁にかけては、２区と異なり、砂礫・小石および炭化物を多く含んだ土層である。

また、②～④層は、調査区北端部から約14.5mの地点みられた大畦畔である。底部幅約3.5m、高さ５mの山形を呈する。畦畔は３層からなる。上層の②層は、褐色（10YR4/4）粘質土に細砂～粗砂が混じり、粗砂の含有が多い。炭化物含む。中層の④層は黄褐色（10YR5/6）砂質土、下層の⑤層は黄褐色（10YR5/8）粘質土に微砂～細砂が混じる。

（２）遺構と遺物

３区の平面形は細長い「く」字形を呈する。調査区北端から南東方向に約23mの地点で、ほぼ真南に屈曲してそのまま11.5m延びて、南端にいたる。南辺は約５mである。地山面での面積は86㎡である。顕著な遺構は存在しなかった。調査区南部の地山上面で、縄文時代晩期とみられる石刀を発見した。２区のような縄文時代の包含層の堆積はなかった。中世の包含層および地山面から、少量の縄文土器と二次加工のある剥片、および古代・中世の遺物が出土した（図32）。



堆積土層

1	オリーブ黒色（5Y3/2）砂質土 粗砂・小石混（現代耕作土）
2－1	黄灰色（2.5Y4/1）粘質土 細砂～粗砂混
2－2	褐色（7.5YR4/6）粘質土 細砂～粗砂混
2－3	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土にオリーブ褐色 （2.5Y4/4）含、細砂～粗砂混
2—5	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土　細砂～粗砂混（粗砂多い）
2—8	にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　細砂～粗砂混
6	暗褐色（10YR3/4）粘質土　細砂～粗砂・細礫混
10	オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘土　粗砂・砂礫・小石混　炭化物含
①	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土　粗砂・砂礫・小石混、下層に黒色（5YR1.7/1）・（2.5Y2/1）炭化物・炭層、明赤褐色（5YR5/6）焼土混
②	褐色（10YR4/4）粘質土　細砂～粗砂混（粗砂多い）炭化物含
③	黄褐色（10YR5/6）砂質土
④	黄褐色（10YR5/8）粘質土　微砂～細砂混

図31　3区　調査区東壁　土層断面図

地山面出土　石刀　調査区南部、地山面の南壁から約3.8m、東壁から0.4mの地点で石刀を検出した(図32)。この地点は、確認調査のトレンチ南東隅にあたり、確認調査の際に、この石刀と接合する柄端部が出土している。欠損している鋒部も確認調査時に破損した可能性があり、本来は完形であったものとみられる。石刀本体の下には長さ約14cm、幅約７cmのやや直方体の、また、南東約13cmの地点には長さ８cm、幅５cmの台形の石がみられた。石刀との関係は明確でない。石刀および２点の石は、北にやや傾斜する地山上面にて出土した。検出時の石刀本体上面の標高は、およそT.P.＋240.9mである（図34)。

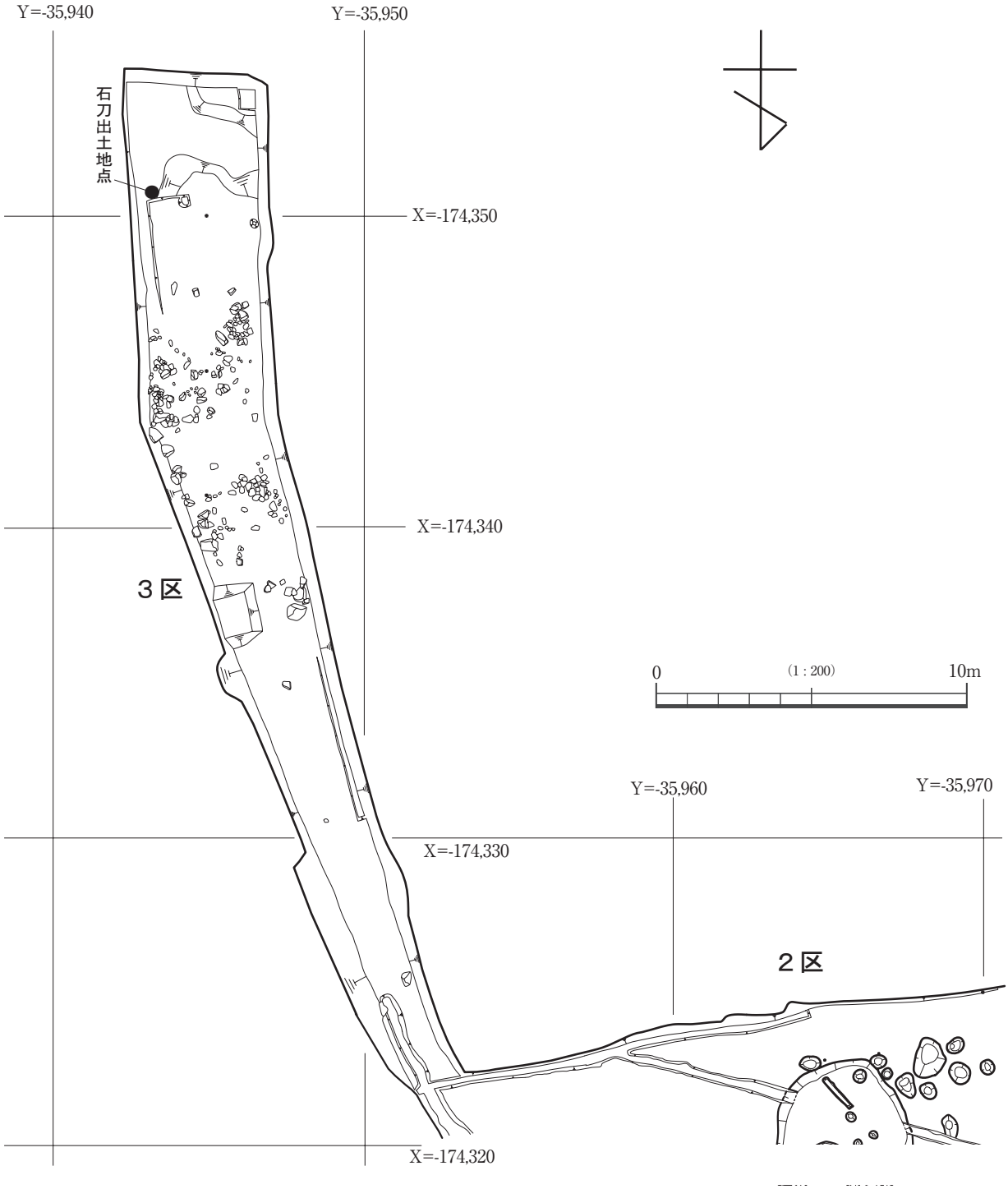


図32　３区　平面図

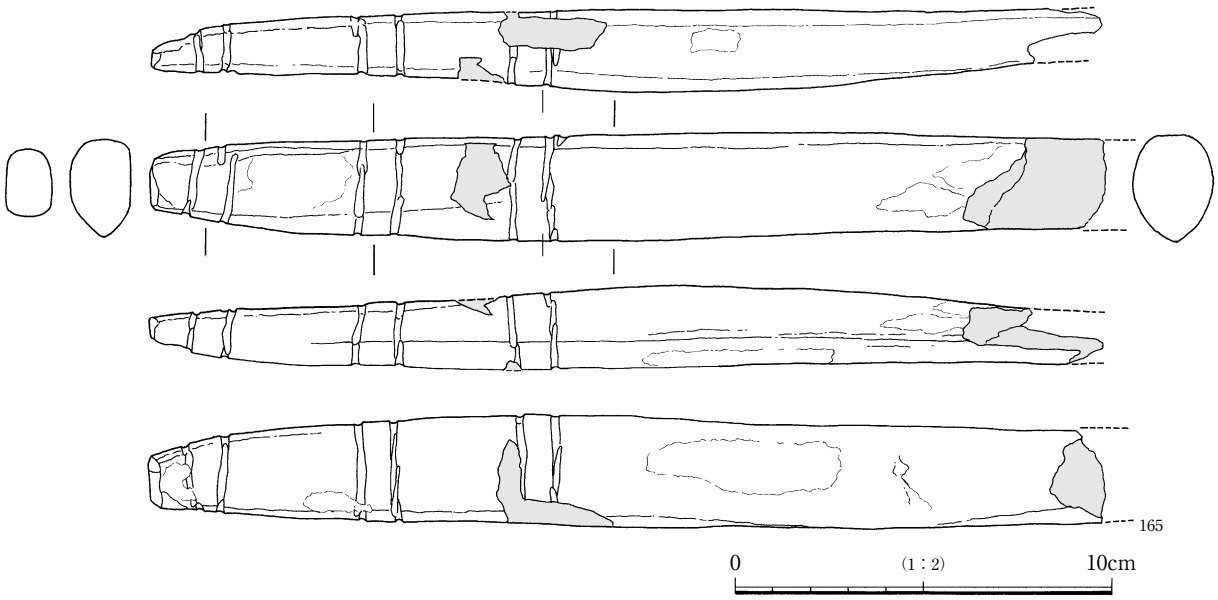


図33　石刀　実測図

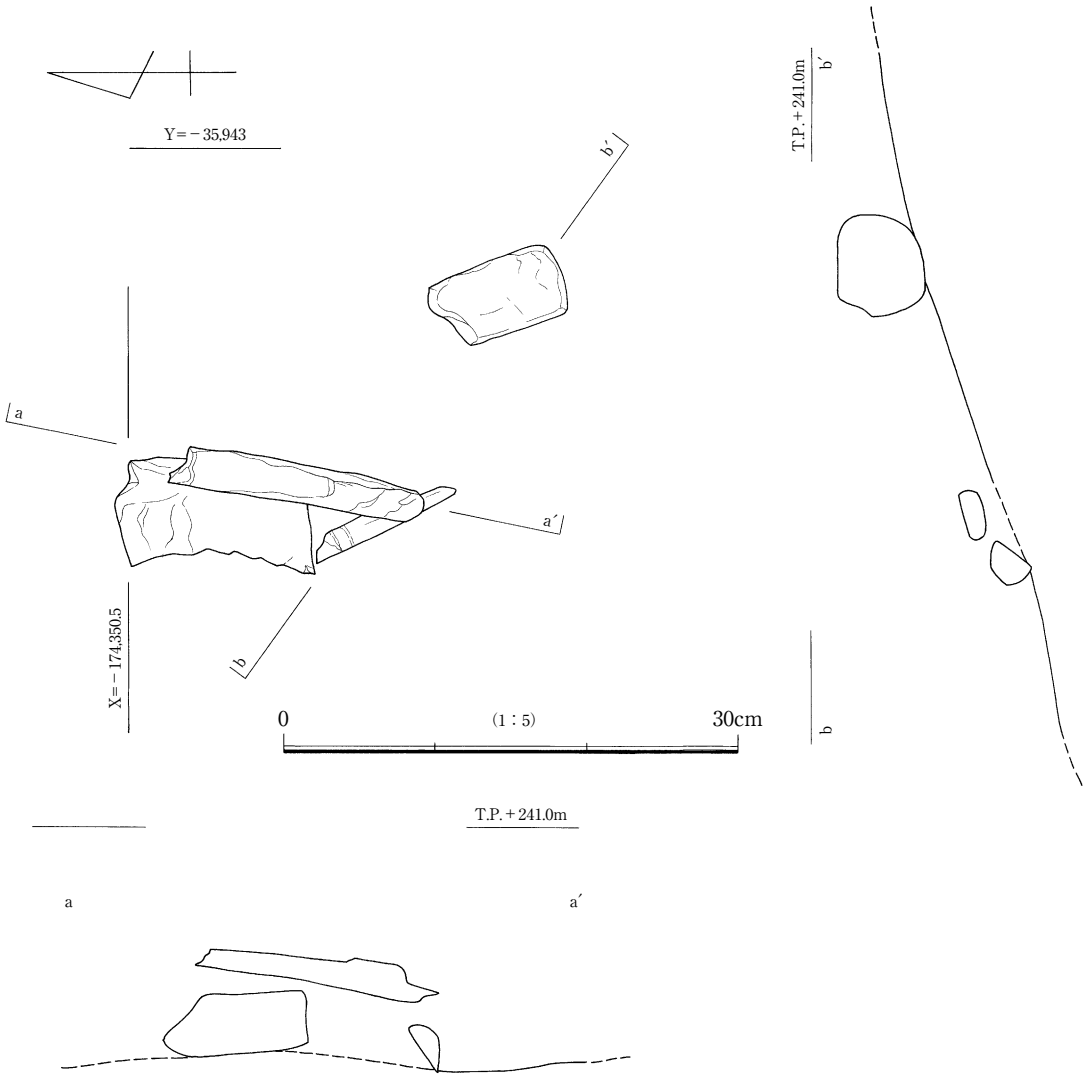


図34　石刀出土状況　平面図・断面図

石刀は、残存長25.3㎝、刃部最大幅2.9㎝、柄端部幅1.2㎝をはかる。身部と柄部の境は明瞭でない。身部は一側縁に刃部が付く刀状をなす。身部は柄部側がもっとも幅広く、鋒に向かって細くなる。身部断面は背部が平らで、刃部が尖る楔形を呈するが、上・下面は曲面をなす。身部最大厚は2.2㎝で、鋒部に向けて、片面が特に大きく内湾して薄くなる。柄部断面は端部で厚0.7㎝、身部側で2.1㎝をはかる。柄部も身部同様に、背面側がほぼ平らで厚く、刃部側は丸みを帯びるものの薄い。柄端部から3.5㎝の地点からは身部にかけて、刃部と類似した稜線が作られている。柄部は、身部と反対の面が大きく内湾して端部にいたる。

沈線は、柄端部から中心部へ、約1.1㎝と2.1㎝の位置に２条、5.5㎝と6.5㎝の位置に２条、9.5㎝と10.4㎝の位置に２条と、２条組にして計６条巡らせている。２条の間隔は、近似値を意図していたとみられる。石刀の表面には長辺方向のていねいな研磨の痕跡が残る。石材は粘板岩製で、すでに剝離した面をもつ石材を用いて加工している。縄文時代晩期前葉頃の石刀の可能性が考えられる（図33、図版42ａ）。

包含層出土　黒色土器・瓦器　主に第２－８層出土の古代・中世の遺物３点について、写真を掲載した（図版42ｂ－㉘～㉚）。㉘は外下方に開く高台を貼り付けた黒色土器椀の底部である。10世紀頃と考えられる。㉙は薄手の瓦器椀の口縁部で、内面にミガキが残る。13世紀後半から14世紀頃とみられる。㉚は断面方形の薄い高台を貼り付けた瓦器椀の底部で、13世紀後半頃と考えられる。

第４節　４・５区

（１）４区

４区は、国道309号の西側、石見川に向かう農道の南側に位置する。１・２・３区がのる川上神社が所在する尾根状の高まりの南側にあたる。東西約27.5m、南北約９ｍの調査区である。

礫を多く含む黄褐色粘土を地山としており、人頭大の礫群が露出していた部分もある。地山面は現地表面から南端部で深さ約0.6m、北端部で約1.6ｍをはかり、南から北へ傾斜する。南端では耕作土・旧耕作土の下層には地山の間に１層（灰色土）が存在するのみであるが、北に向って次第に土層の数を増やしていく。黄褐色～灰色を呈する土層であり、人為的な手は加わっていない。遺物の出土はない。

北端部より南へ７ｍほどの位置で旧耕作土から切り込む谷状地形が検出された。肩部ではベースとなる土層と埋土が互層状になっており、この谷状地形は長期間存在したことをうかがわせる。

谷状地形は東から西方向へ走る。大きく３層に分層され、上部から黄橙色土と灰色土のブロック土、灰色粘土、灰褐色粘土である。下部２層からは中世の瓦器、土師器や瓦の小片が出土した。

４区の東側に設置した確認調査のための調査区では、谷状地形の底部でピット、落ち込みなどが存在しており、密度はさほど高くないが中世の遺構の広がりが確認できた。鳩原遺跡の中世遺跡の広がりの一部である（図35、図版20）。

（２）５区

５区は、今回の調査においてもっとも南部に設定した調査区である。南北約22m、東西約12ｍの調査区である。

現地表面から地山面まで、南端部で約0.6m、北部で約1.6mをはかり、基本的に南から北へ傾斜する。耕作土、旧耕作土の直下に、淡褐色土（厚さ20～30㎝）があり、ここからは土師器の小片が出土した。中世に形成された土層と推定される。この土層を除去した面で浅い落ち込みが存在していた。その下部には黄褐色土、暗褐色土が存在している。下層の暗褐色土には人頭大の礫が含まれている。この２層の土層は近辺の遺跡で散見され、縄文時代に比定される。

調査区の南北両端部には谷状の落ち込みが検出された。南端部の谷状地形は、旧耕作土を除去した面で検出され、西壁に約５m、南壁に約2.5mをはかる。深さは約1.5mまで確認したが、底部を検出することはできなかった。灰色系の色調の土層を埋土とし、一部に炭化物が集積する部分がある。この谷地形を埋めて耕地として活用するようになってさほどの時間の経過は存在しないと推定される。

調査区の北端部は、一段低い（高低差約0.5m）耕作地となっている。この耕作地の境が谷状地形の肩部にあたる。肩部から約4.5mの幅を検出した。褐色～灰色系の土砂で埋まっている。

５区は、耕作地とされる以前は、東西に谷が走る凹凸のある地点であり、平坦な部分に中世にはいくばくかの遺構が形成された。また、縄文時代に比定される土層では、遺物・遺構の検出はなかったが、２区で検出された縄文時代の集落の周辺の環境を形成していたものであろう（図35、図版20）。

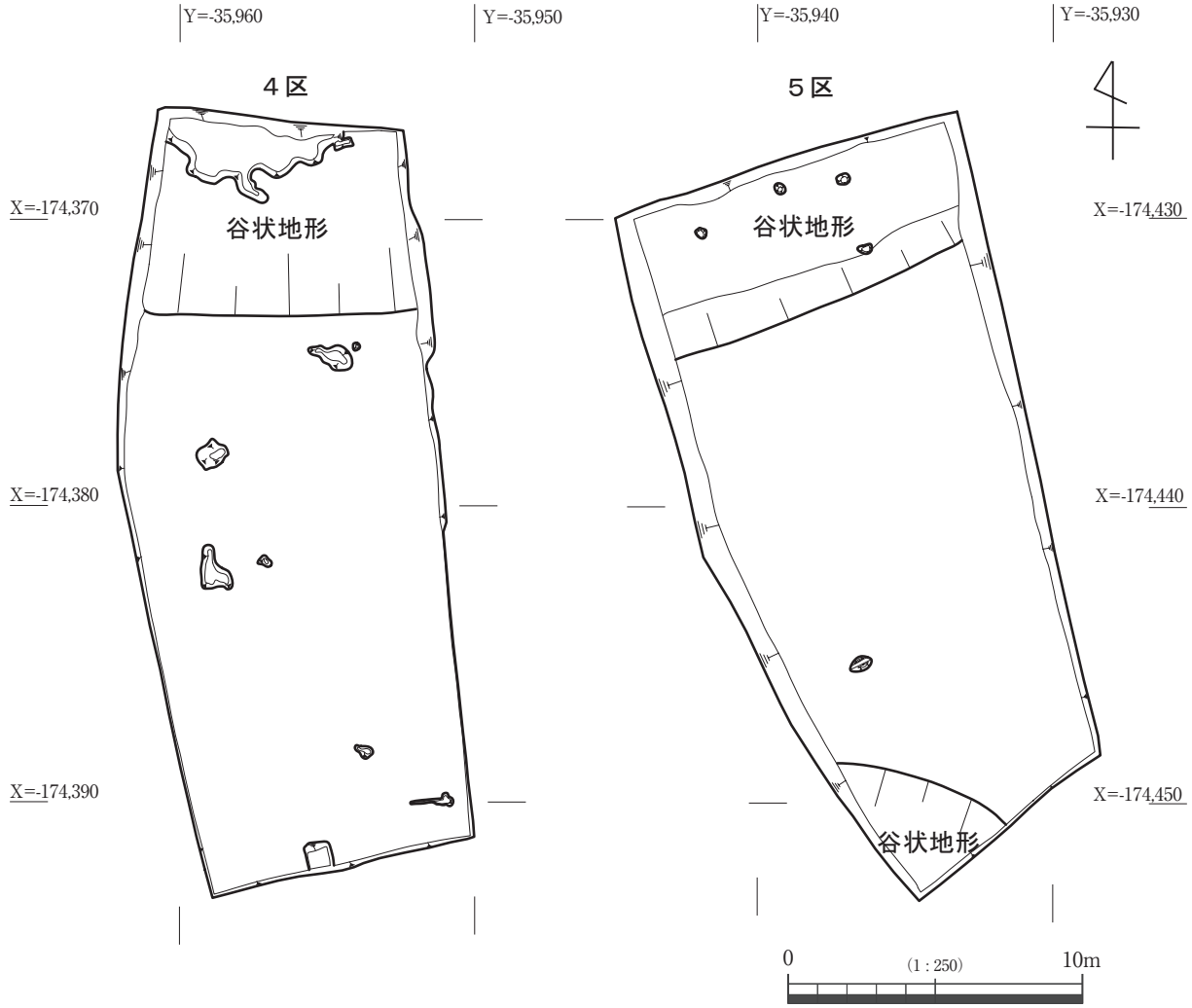


図35　４・５区　平面図

第３章　鳩原西端遺跡の確認調査

第１節　調査概要

鳩原西端遺跡のうち国道309号と石見川に挟まれた地区で確認調査を実施した。農地の整備工事の施工のなかで掘削・削平される地点に７箇所の確認トレンチを設置し、遺構・遺物の有無の確認をおこなった（図36、図版21・22）。

①トレンチ　深さ約150cmまで掘削して確認した。現耕作土の下部に６層の盛土が確認された。すべての土層が山側（東側）から川側（西側）に向かって傾斜している。地山は検出されなかったが、土層の堆積状況は地形を反映していると推定される。遺構・遺物は検出されなかった。

②トレンチ　深さ約120cmまで掘削した。ここで地山（礫層）を検出した。耕作土、旧耕作土の下層には均質な盛土（淡灰褐色土）が存在した。この層には土師器の小片がわずかに含まれていたが、原位置を保つものではない。

③トレンチ　深さ約105cmまで掘削し、地山を検出した。耕作土の下層に４層の盛土層が検出された。遺構・遺物は検出されなかった。

④トレンチ　上下２筆の耕地の境をなす法面に直交して設置した。上段では深さ約165cm、下段では約60cmまで掘削した。上段では耕作土の下層に礫（直径数～数十cm）が約100cmの深さで積み上げられていた。その下層には盛土である淡褐色土がみられ、傾斜しながら下段に連続する。しかし上下段ともに地山は検出できなかった。礫層から瓦器椀片などが出土したが、原位置を保つものではない。

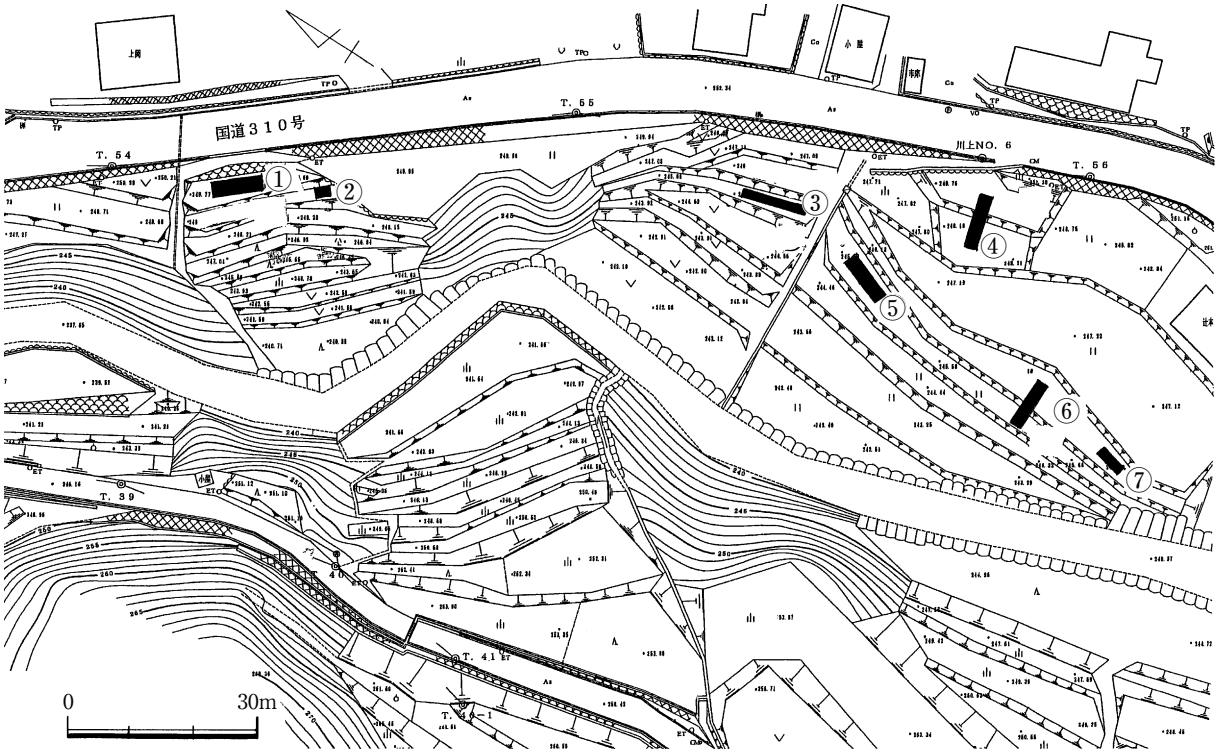


図36　鳩原西端遺跡　トレンチ配置図

⑤トレンチ　深さ約110㎝まで掘削した。耕作土の下層には４層が検出されたが、すべて盛土である。遺構・遺物は検出されなかった。

⑥トレンチ　下２筆の耕地の境をなす法面に直行して設置した。上段では深さ約110㎝、下段では約100㎝まで掘削し、地山を検出した。耕作土の下層には３層の盛土層があり、上段から下段へ傾斜して堆積していた。下段では地山面の上では厚さ20㎝前後の炭化物層が検出された。この一帯を盛土によって造成をするのに先立っておこなった「野焼き」によるものと推定される。遺構・遺物は検出されなかった。

⑦トレンチ　深さ約85㎝まで掘削した。耕作土の下層は茶褐色の砂礫層（直径数～30㎝の礫を多く含む）である。遺構・遺物は検出されなかった。

第２節　調査成果

いずれの確認トレンチにおいても厚い盛土層が確認された。当該地は石見川に向かう急斜面に盛土を施すことによって、耕地を造成していたことが確認できた。一部のトレンチで盛土中から土器の小片などが出土したものの原位置を保つものではなかった。遺構はもとより当該地に形成された遺物包含層も存在しなかった。

近隣の住民によると当該地の一帯の耕作地は、地山の上の盛土が降雨の後にたびたび崩壊するという。切土と盛土によって造成するのではなく、基本的に盛土によって急傾斜地に造成した耕地の実態を示す逸話である。

引用・参考文献（第１～４章）

千葉豊・矢野健一1991「縄文土器の変遷」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館

合田幸美・松山聡1992「第２章　縄文～弥生時代の遺構と遺物　―谷間のむら」『小阪遺跡』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター

河内長野市史編修委員会1994『河内長野市史　第１巻（上）本文編　考古』河内長野市役所

中世土器研究会1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

尾谷雅彦・合田幸美1998「第１節　宮山遺跡　MYK90-1」『河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ』河内長野市教育委員会

小林義孝・山元建・仁王浩司・岡田憲一2000「第Ⅳ章　縄文時代の向出遺跡」『向出遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター

中村健二2007「西日本の葬・墓制」『縄文時代の考古学９　死と弔い－葬制－』同成社

後藤信祐2007「刀剣形石製品」『縄文時代の考古学11　心と信仰－宗教的観念と社会秩序－』同成社

橋本久和2009『中世考古学と地域・流通』真陽社

第４章　総括

第１節　縄文時代

大阪府南東部に位置する河内長野市は、東は奈良県、南は和歌山県に隣接し、古くから交通の要衝として栄えていた地域である。鳩原遺跡は、現在の河内長野市域の南東部、金剛山西麓の山間部に立地している。鳩原遺跡をはじめ、周辺の鳩原東端遺跡、鳩原西端遺跡、南東1.5㎞の太井遺跡から縄文時代の遺物が出土しており、この一帯における縄文時代の人々の活動範囲がしだいに明らかになってきた。

今回の鳩原遺跡の発掘調査においては、東方の山側から西の石見川方向に延びる丘陵先端部に設定した２・３区において、縄文時代の遺構・遺物を検出した。遺構としては、２区から、竪穴住居２棟、墓坑の可能性が考えられる大形土坑、柱穴とみられる小形土坑等を含む70基の土坑を検出した。遺物としては、２区から、大量の縄文土器のほか、石鏃・削器・楔形石器・磨製石斧・磨石・敲石・石錘など、生活道具としての各種の石器類が出土した。さらに、石核や多くの剝片・チップが出土しており、石器製作をおこなっていたといえる。また、２区の南東に位置する３区からは、祭祀に用いたとみられる石刀が出土した。

１）竪穴住居

２区中央部南寄りで検出した2001竪穴住居は、一辺4.3～4.5ｍの隅丸方形を呈するもので、住居内北東部に石囲炉の可能性のある2058土坑（炉）が設けられていた。住居範囲内の埋土の上面から住居床面にかけては、大量の縄文土器が含まれていた。主に、北白川Ｃ式から中津式の土器で、量的なまとまりとしては中津式が中心といえる。その他、混入とみられる縄文時代中期中葉の船元式から、住居廃絶後の遺構内に含まれていたとみられる縄文時代後期の元住吉Ⅱ式～宮滝式の縄文土器が出土している。2001竪穴住居は、中津式の縄文時代後期初頭には、住居の機能を失っていたものと考えられる。

２区西部で検出した2068竪穴住居は、後世の削平を受けていたため、地山面で、幅24～28㎝の周溝を確認した。この一帯は、２区の中でも、最も遺構の切り合いが多く、遺物も密集するところである。そのため、2068竪穴住居推定範囲内から出土した縄文土器は、2001竪穴住居よりもさらに多様であり、縄文時代早期の神並上層式から、後期中葉の一乗寺Ｋ式まで出土した。この中で、量的に多いのが北白川Ｃ式である。中津式は、2001竪穴住居では量的なまとまりがみられたのに対し、2068竪穴住居上面には少量しか含まれていない。上面で検出した縄文土器の様相からではあるが、2068竪穴住居の時期は北白川Ｃ式の縄文時代中期末頃の可能性が考えられる。２棟の竪穴住居には、時期差があったとみられる。

２）土壙墓・土器棺墓

土坑では、およそ長径1.25ｍ×短径0.95ｍの同規模の楕円形・隅丸方形・台形のほぼ類似した平面形と、底面が平坦に近い台形の断面形を呈する大形土坑については、土壙墓とみられる。人骨を伴うものはなく、墓とする確証は無いものの可能性は高いと考えられる。また、2013土坑・2027土坑の東に隣接する2023土坑は、径約0.6ｍの円形土坑で、中央部上面には明らかに意図的に平石を置いている。乳幼

児の土壙墓と推定することもできる。その他、2001竪穴住居内の南部の2071土坑・2072土坑は、土坑内に固定した縄文土器の特徴や状況から、住居廃絶後に埋設された土器棺と考えられる。

墓と推定するこれらの土坑は、２区南部では東西方向に、2045・2043・2050・2071・2072土坑、やや北寄りに2067土坑が、2.0～2.5ｍの間隔で存在する。北部では東西方向に、2040・2013・2011・2067土坑が、最北部では2014・2007土坑が、南北方向でみると、西部では2043・2027・2013・2014土坑が、東部では2050・2011・2007土坑が、ほぼ並んだような位置関係にあると推定することができる。

土坑の時期については、2071土坑・2072土坑が、土坑の深さから2001竪穴住居廃絶後に埋設されたものと考えられる。また、同じく2001竪穴住居北東部を切り込んでいる2067土坑は、住居以後の土坑である。これらの墓とみられる土坑には、北白川Ｃ式～後期前葉頃の縄文土器片が含まれていた。竪穴住居とほぼ同じ時期か、または住居廃絶後に墓をつくった可能性が考えられる。

３）縄文土器

出土した縄文土器には、縄文時代早期の神並上層式、前期中葉の北白川下層Ⅱ式、中期中葉の船元Ⅱ・Ⅲ式、中期後葉の里木Ⅱ式・北白川Ｃ式、後期前葉の中津式・称名寺Ⅱ式・福田ＫⅡ式・四ツ池式・松ノ木式・北白川上層式１期・堀之内１式、後期中葉の北白川上層式３期・一乗寺Ｋ式・元住吉山Ⅰ式、後期後葉の元住吉山Ⅱ式・宮滝式がみられる。このうち、竪穴住居からは、縄文時代中期末から後期初頭とみられる北白川Ｃ式と中津式が、高い割合で出土した。各遺構のうち、大形土坑からは同じく北白川Ｃ式と中津式の他、縄文時代後期を中心とする土器が出土した。

２区南西部を中心に、遺構・遺物が密集するほか、縄文時代の包含層の厚い堆積が確認できた。この地点では、特に後期の遺構の切り合いが多く、盛んに土地利用されていたものと考えられる。この中で、西壁沿いに位置する2002土坑は遺構の性格は確定できないが、最も新しい時期である後期後葉の宮滝式の浅鉢が出土している。これ以降、確実に晩期に下る遺物はみられない。

４）縄文時代の鳩原遺跡

石見川に向かって延びる丘陵先端部では、縄文時代早期から人々の活動が始まり、断続的ではありながら、前期にも続いていたとみられる。中期中葉から後葉の段階は、遺構としての生活の痕跡は検出できなかったが、縄文土器の量も増加し、ある程度の土地利用がなされていたと考えられる。

中期末の北白川Ｃ式期になると活動が活発化し、竪穴住居での暮らしが始まる。この流れは後期初頭の中津式の段階に引き継がれる。各時期における集落の範囲は不明だが、２区の南西方向に広がっていたとみられる。また、住居と同じ時期か、または住居移動後には、この地点に墓域を形成した可能性が考えられる。その後、後期前葉以降、後葉の宮滝式の段階まで、多くの遺構の切り合い関係が認められることから、盛んに土地利用がなされたとみられる。当時の人々の活動の一拠点であったと考えられる。

２区のある丘陵先端部の緩斜面において、縄文時代の遺構面の上層に含まれていた大小多数の石は、東側の山からの土石流による自然堆積と考えられる。最終の遺構である2002土坑が、縄文時代後期後葉には機能を終えていることから、この段階の大規模な土石流によって、この地点での土地利用は中断され、主な生活領域を移動した可能性が考えられる。３区で検出した縄文時代晩期前葉頃の石刀の存在も含めて考えると、晩期以降には、当時の人々の活動の範囲が広がったものと推定される。

第２節　中世

今回の調査では、中世の遺構が確認できたのは１区だけである。井戸、土坑、瓦溜まり、集石遺構などが検出された。切合い関係をもつものもあり、大きく分けて２時期あったと考えられる。

瓦溜まりの埋土を除去したところ、部分的ではあるが規則的に並ぶ石を検出した。また、礎板の代わりに使用されたと考えられる瓦の完形品が３枚出土している。この他、炭化物を含む土坑や溝状の遺構を検出したが、ほ場整備の際に遺構面が保護されるため、今回は調査をおこなっていない。瓦溜まりの埋土から、瓦以外にも青磁碗や瓦器椀が出土しており、いずれも13～14世紀の年代観を示す。軒平瓦の製作技法から、鎌倉時代前半の時期観が得られた。瓦溜まり内部の遺構を掘削していないこと、遺構が調査区外に広がっているため全体の規模など詳細は不明である。しかし、瓦が大量に出土していることから、13世紀頃には建物が建てられていた可能性が高い。また、炭化物を含む遺構が確認されたことなどから、14世紀頃、火災によって建物が焼失し、瓦を廃棄し建物を別の場所に建替えたと推察される。瓦溜まりより北側で多数の土坑が検出され､中には柱痕や根石と考えられる石が出土したものもあった。瓦溜まり廃絶後に掘削された、土師器皿と瓦器椀を重ねて埋納したピットが２基検出されている。本遺構は瓦器椀の型式から14世紀の年代観を当てはめることができる。

以上のように、瓦溜まりから出土した瓦を葺いていた建物があった時期（13世紀)、建物が廃絶し別の建物が建てられ井戸が機能していた時期（14世紀）に大別できると考えられる。14世紀に機能していた建物が廃絶した後は、現在まで水田として利用されている。

鳩原地区は、中世において「観心寺七郷」のうちの１つであり、川上神社や弥勒寺の中世の実態をはじめ、観心寺の歴史を考える上で重要な成果が得られたといえよう。

調査区から弥勒堂をのぞむ（写真左上の瓦葺建物が弥勒堂）（北から）

図　　版

鳩原遺跡　遠景（南上方から）

鳩原遺跡　近景（西上方から）

図版1　1区　調査区全景

a　調査区
南半部
（北から）

b　調査区
北半部
（東から）

図版2　1区　土層断面

a　東西アゼ1
土層断面
（南から）

b　東西アゼ2
土層断面
（南から）

c　西壁
土層
（南東から）

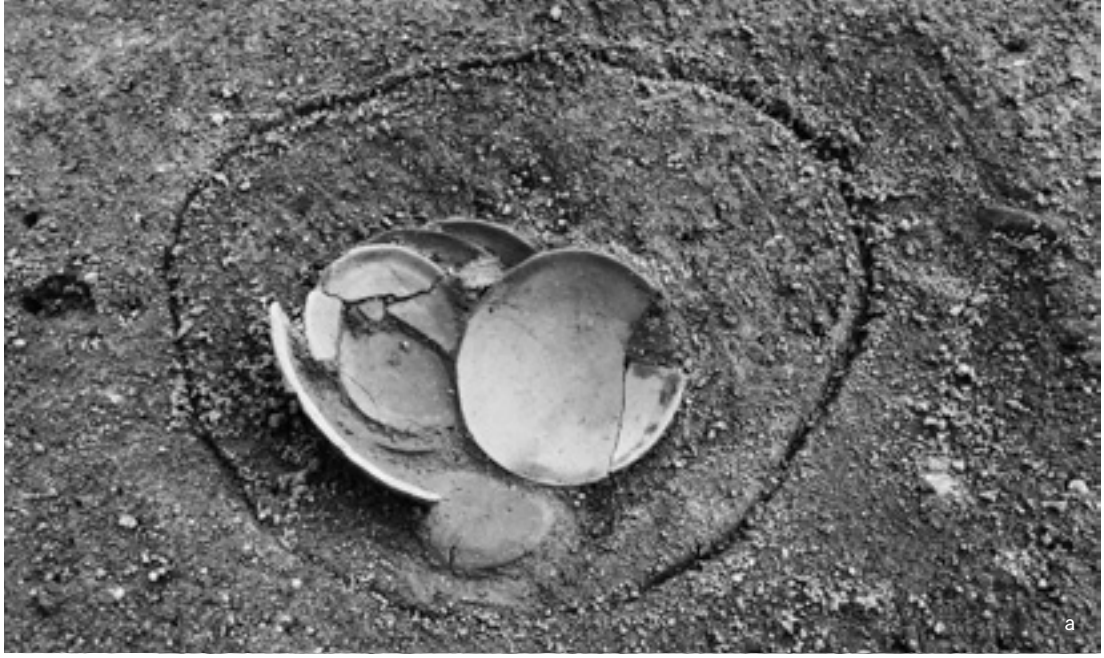
図版3　1区　検出遺構(1)

a　1003井戸
土層断面
（西から）

b　1001土坑
検出状況
（南西から）

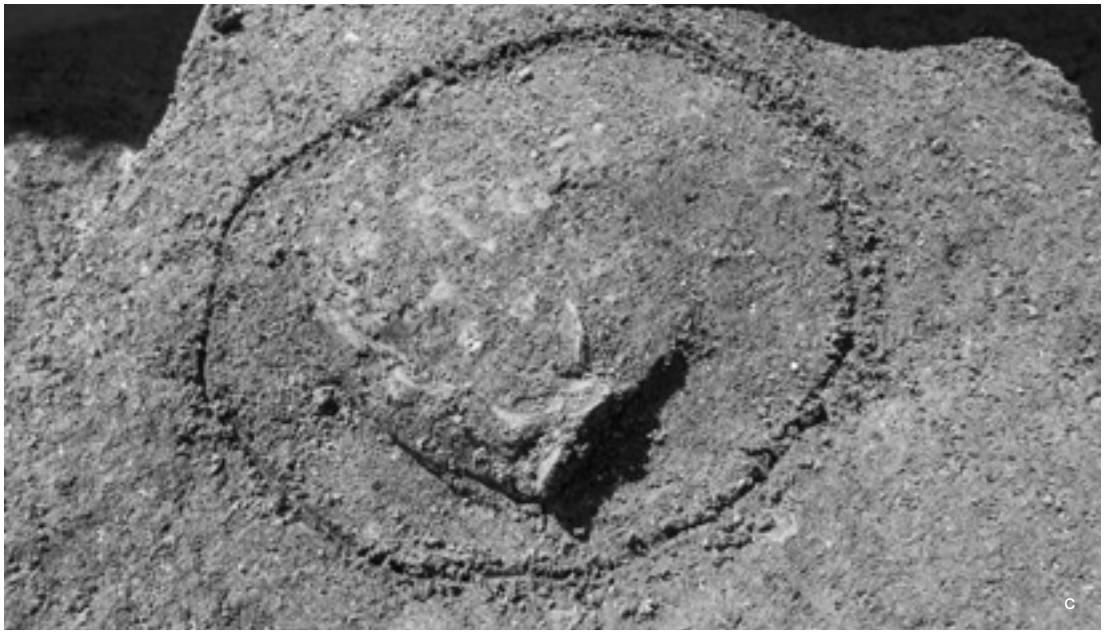
c　1001土坑
土層断面
（西から）

図版4　1区　検出遺構(2)

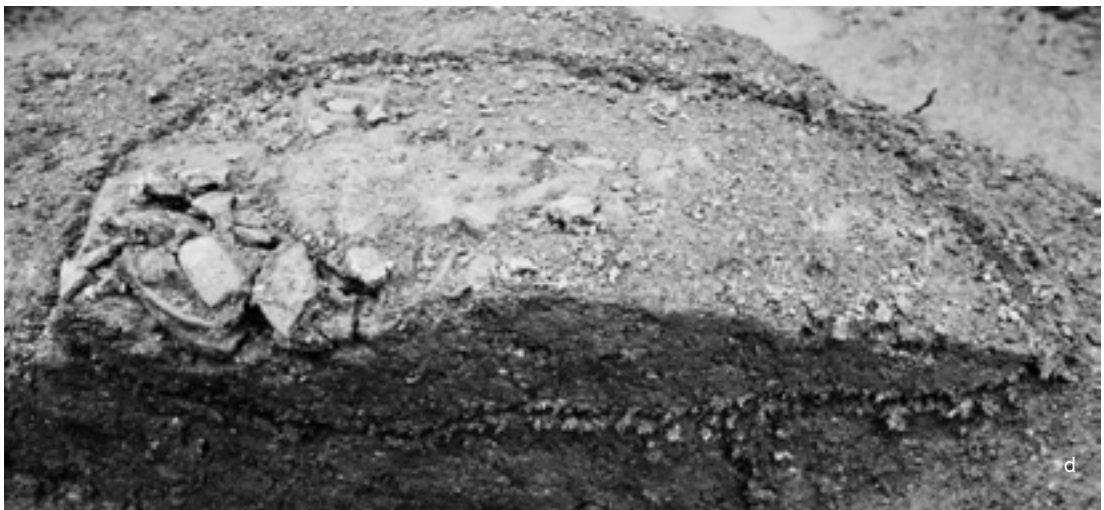


a　1008ピット
検出状況
（東から）

b　1008ピット
土層断面
（東から）



c　1004ピット
検出状況
（東から）

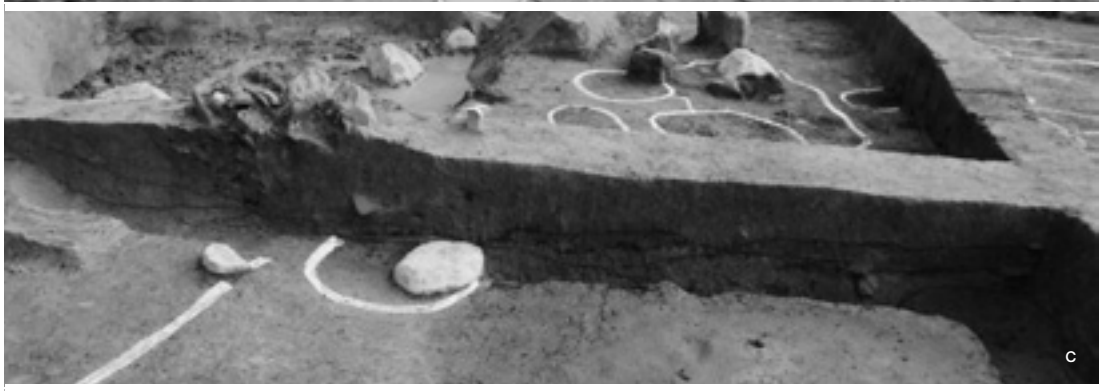


d　1004ピット
土層断面
（東から）

図版5　1区　検出遺構(3)

a　瓦溜まり
検出状況
（西から）

b　瓦溜まり
掘削状況
（北東から）

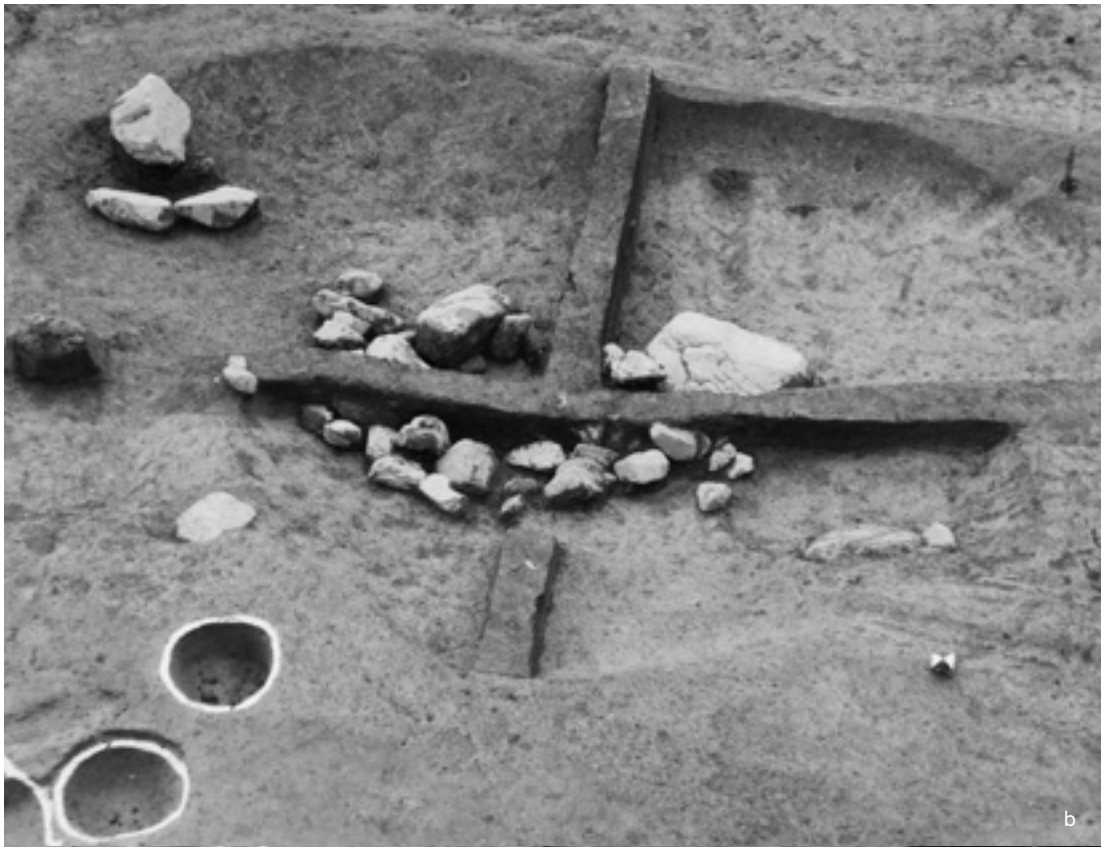


c　瓦溜まり
東西アゼ
東半部
土層断面
（北から）

d　瓦溜まり
東西アゼ
西半部
土層断面
（北から）

図版6　1区　検出遺構(4)

a　1010石列
土層断面
（南から）

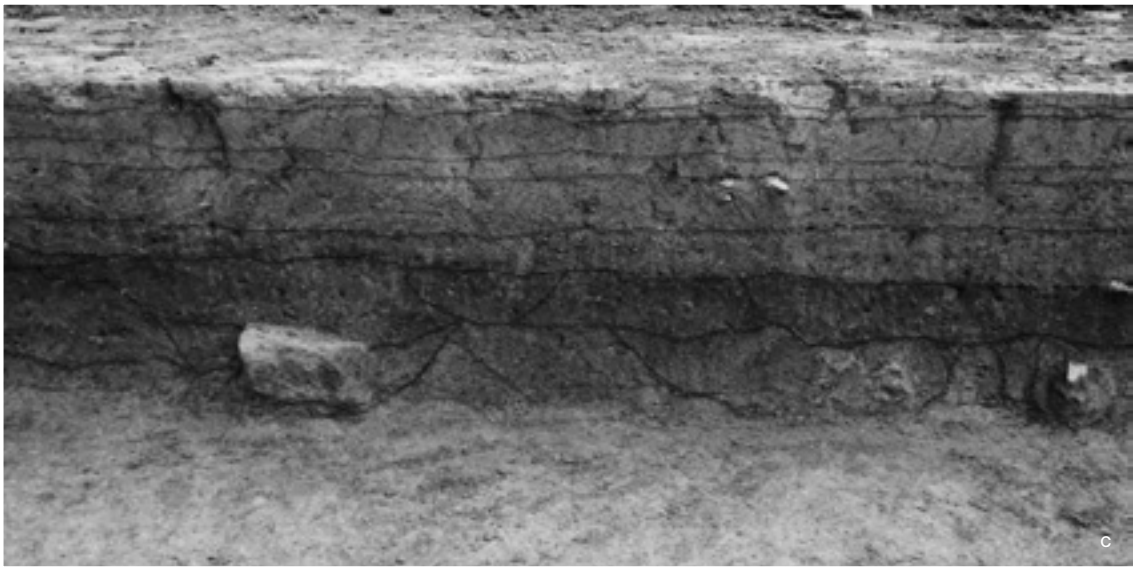


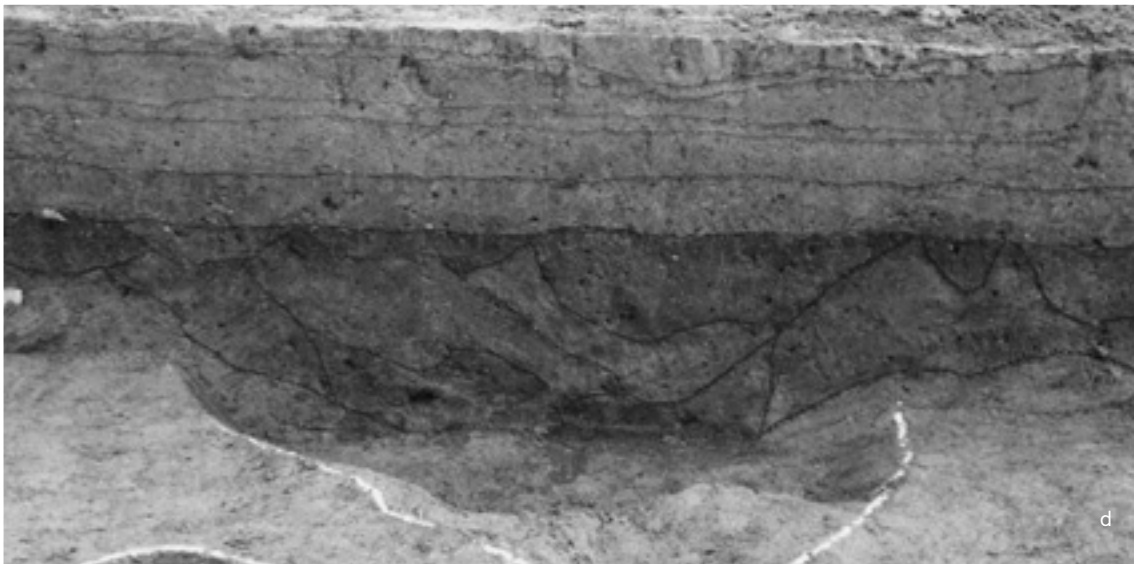
b　集石遺構
南北アゼ
土層断面
（東から）

c　集石遺構
東西アゼ
土層断面
（北から）

d　集石遺構
南北アゼ
土層断面
（西から）

図版7　2区　土層断面(1)

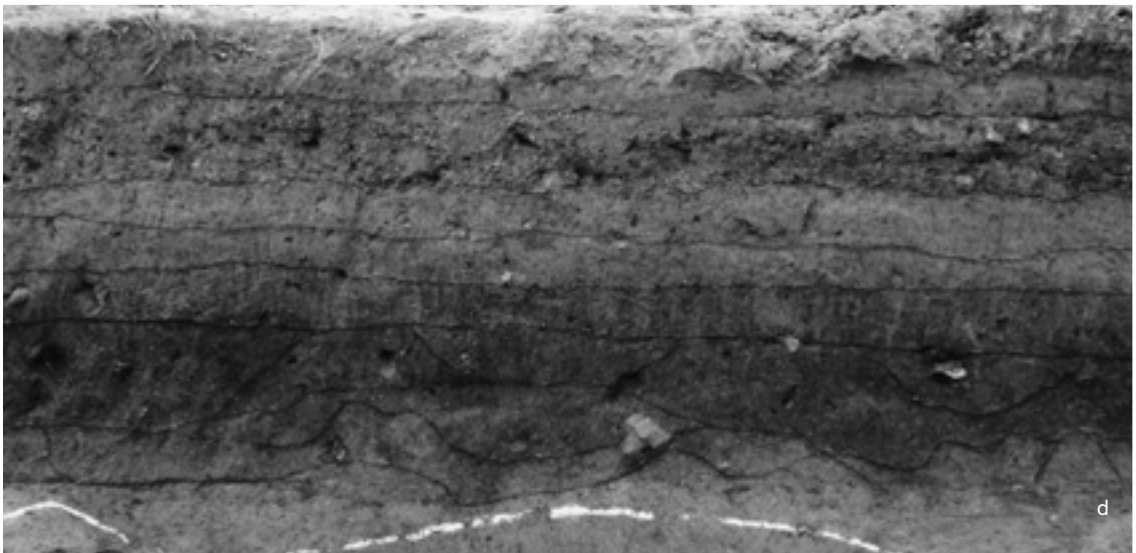




a～d
南壁（東部～
中央部）
土層断面
（北から）

図版8　2区　土層断面(2)

a・b
南壁（中央部～西部）
土層断面
（北から）



c・d
西壁（南部～中央部）
土層断面
（東から）

図版9　2区　土層断面(3)

a　西壁（北部）
土層断面
（東から）

b～d
北壁（西部～
東部）
土層断面
（南から）

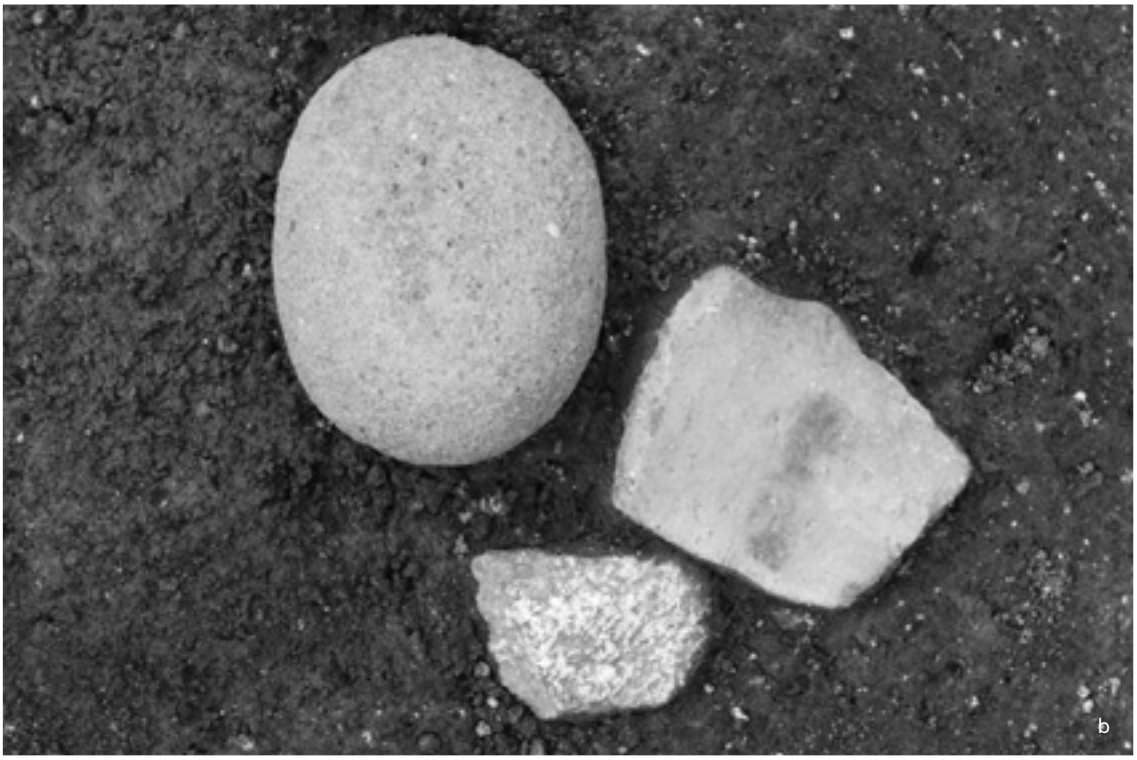
図版10　2区　検出遺構(1)

a　遺構
検出状況
（南西から）

b　検出遺構
全景
（東から）

c　検出遺構
全景
（南から）

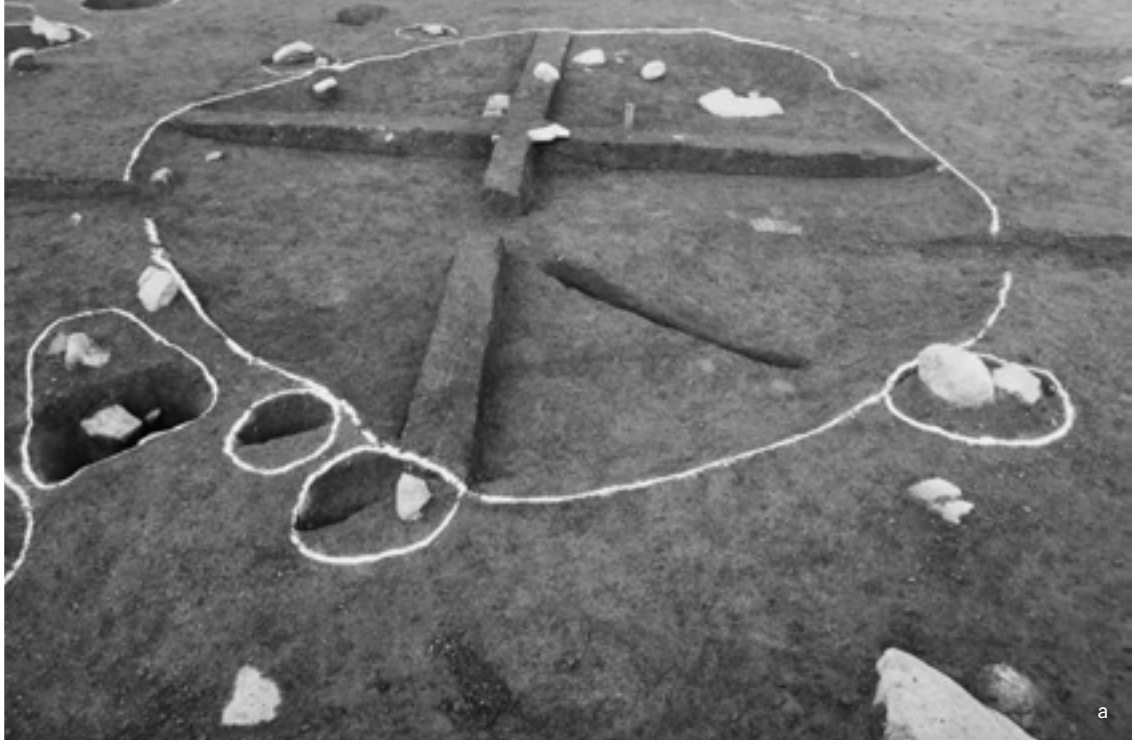
a　2001竪穴住居
上面
縄文土器
出土状況
（西から）



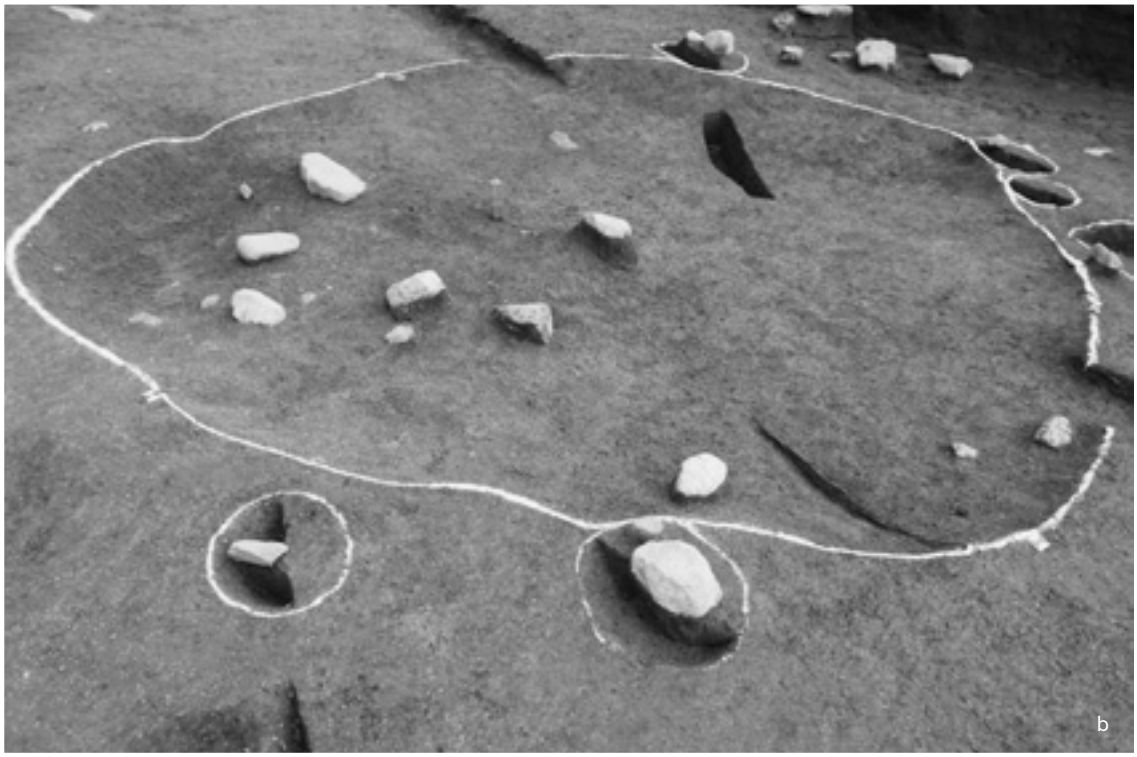
b　2001竪穴住居
上面　敲石
出土状況
（東から）

c　2001竪穴住居
上面　台石等
出土状況
（南東から）

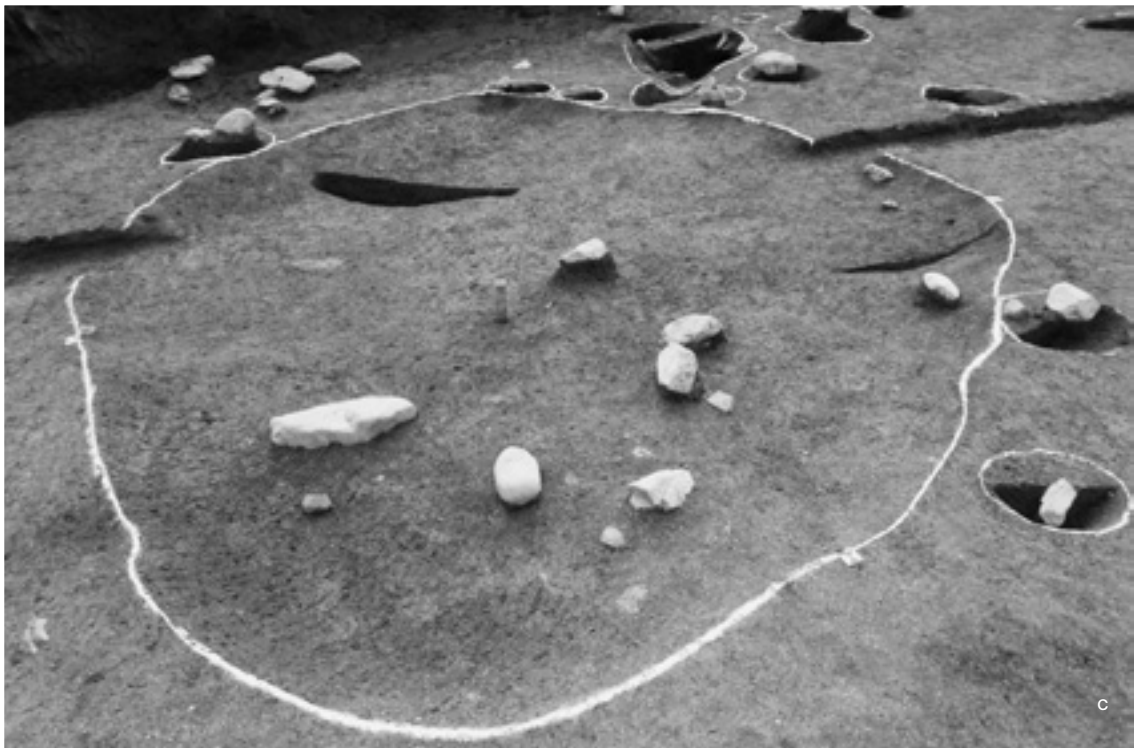
図版12　2区　検出遺構(3)



a　2001竪穴住居
埋土
（南西から）

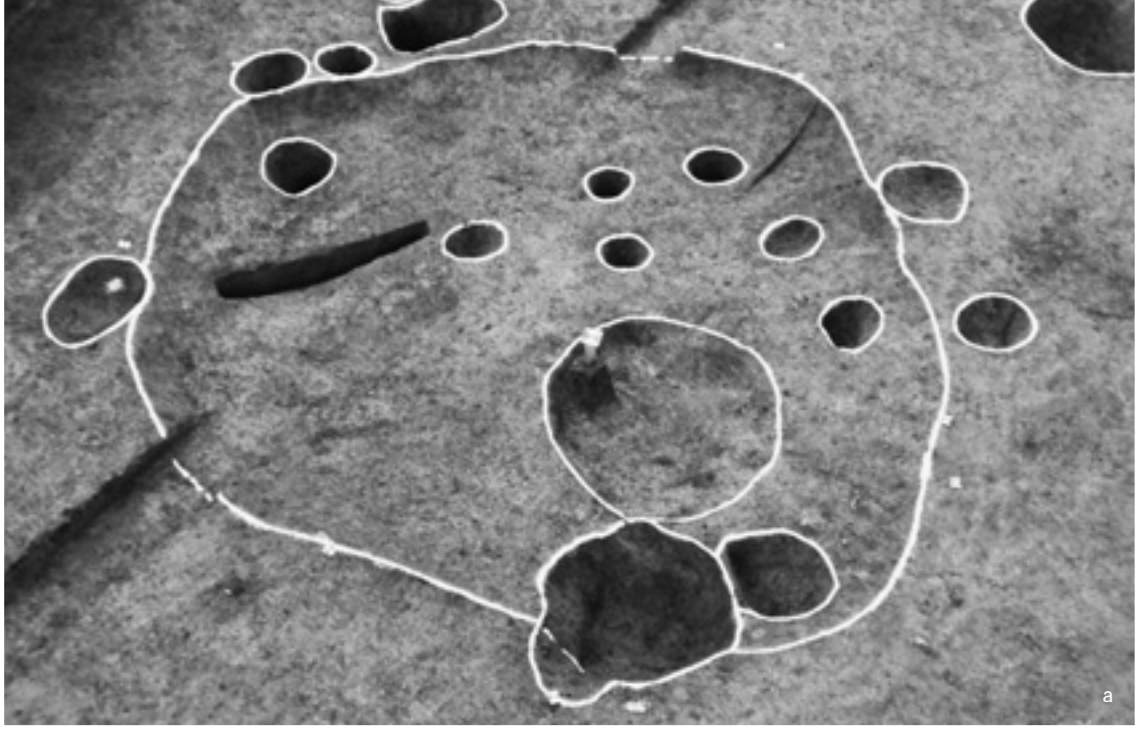


b　2001竪穴住居
検出状況
（北西から）

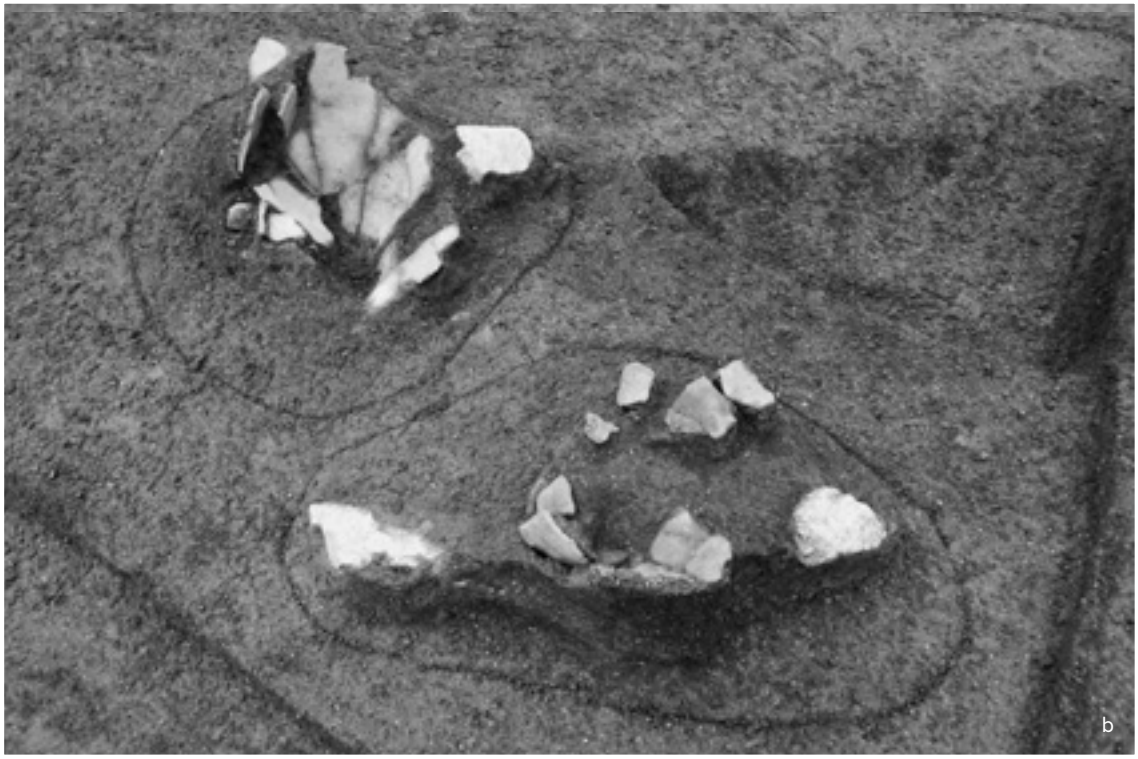


c　2001竪穴住居
検出状況
（北東から）

図版13　2区　検出遺構(4)



a　2001竪穴住居
2067土坑
（北東から）

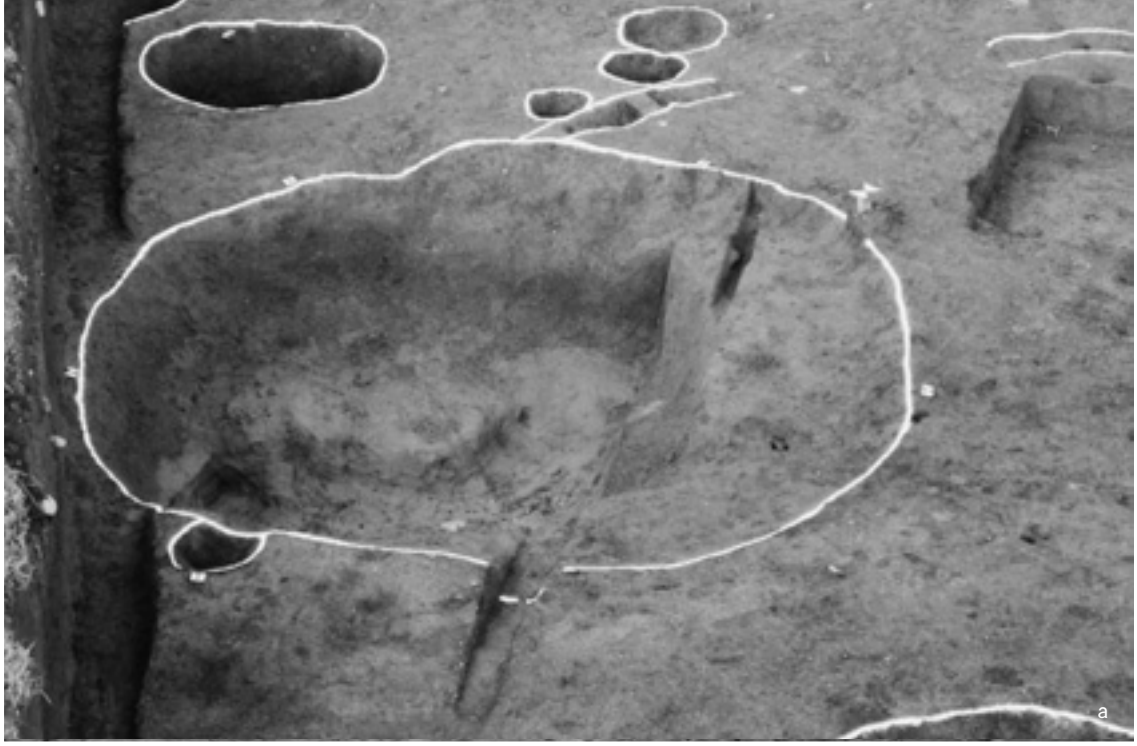


b　2071土坑
2072土坑
検出状況
（北西から）

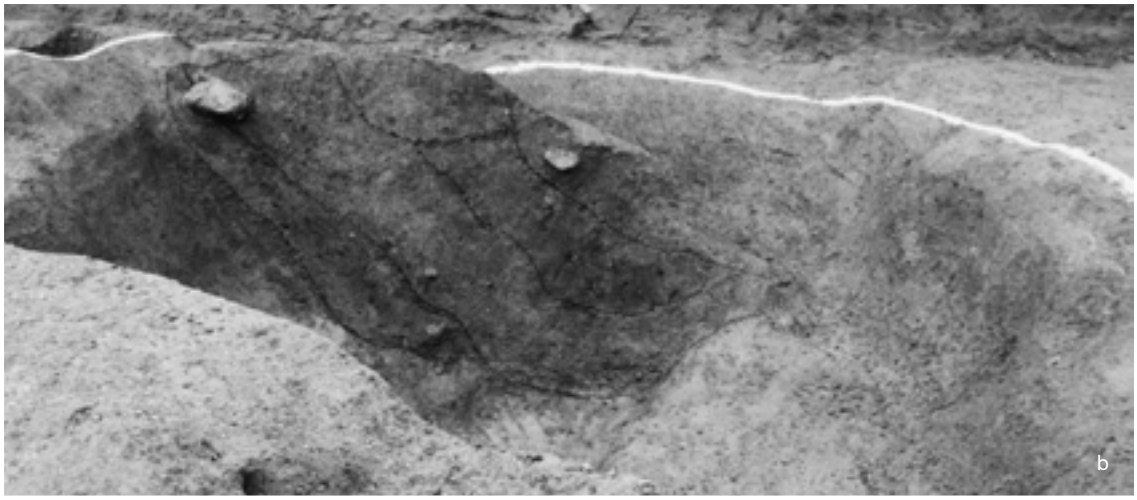
c　2058土坑（炉）
埋土
（南東から）

d　2058土坑（炉）
2067土坑
埋土
（北から）

図版14　2区　検出遺構(5)



a　2002土坑
（西から）



b　2002土坑
埋土
（南東から）

c　2002土坑
埋土
（北から）

d　2002土坑
縄文土器
出土状況
（南から）

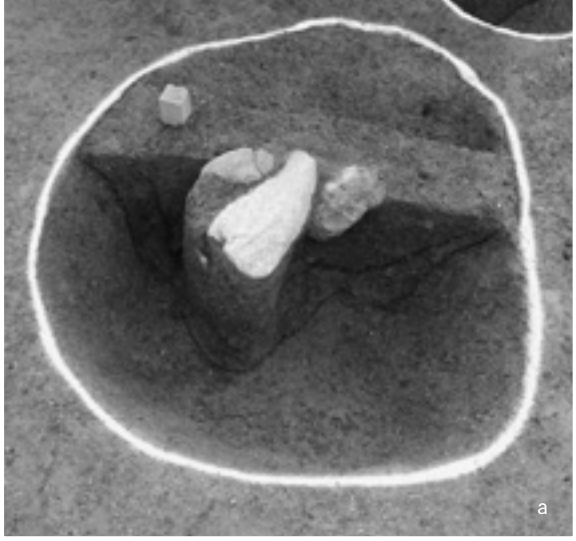
図版15　2区　検出遺構(6)

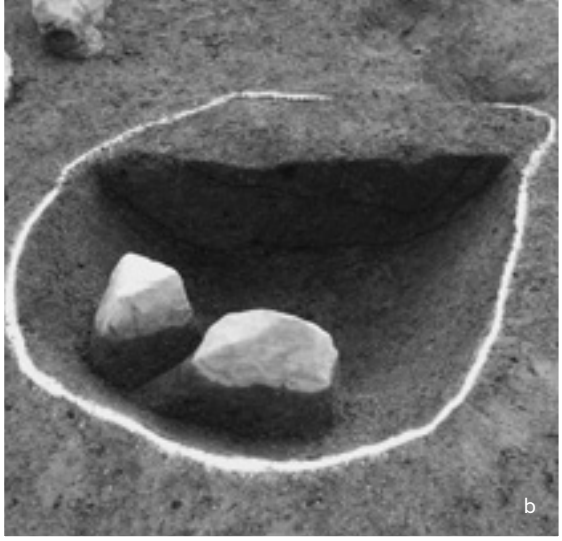
a　2068竪穴住居
周溝
（北西から）

b　2013土坑
（北東から）

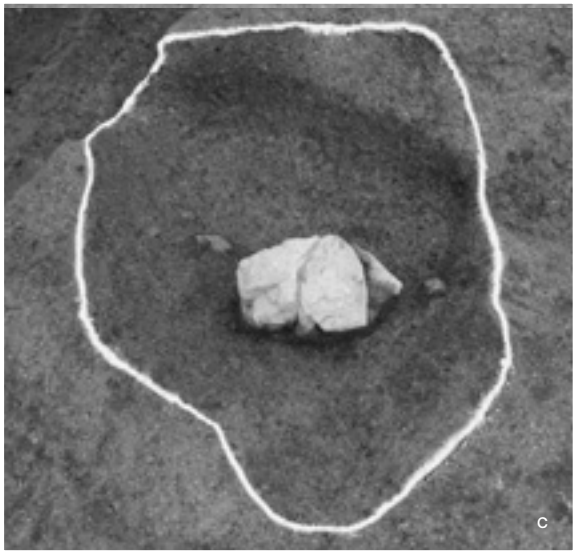
c　2040土坑
（南から）

図版16　2区　検出遺構(7)

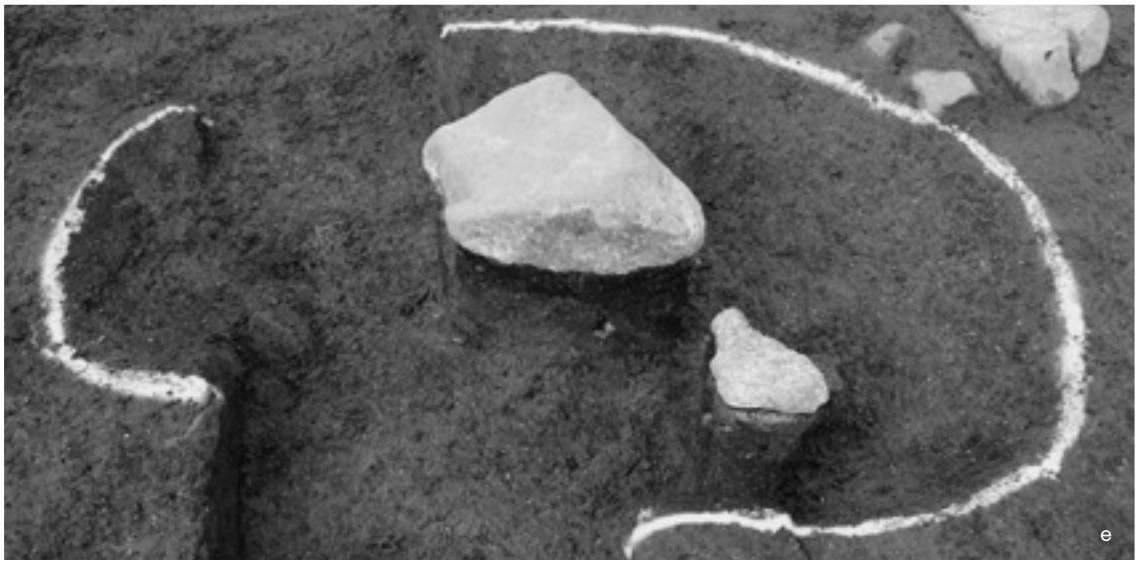




a　2007土坑（北東から）
b　2011土坑 埋土（北東から）



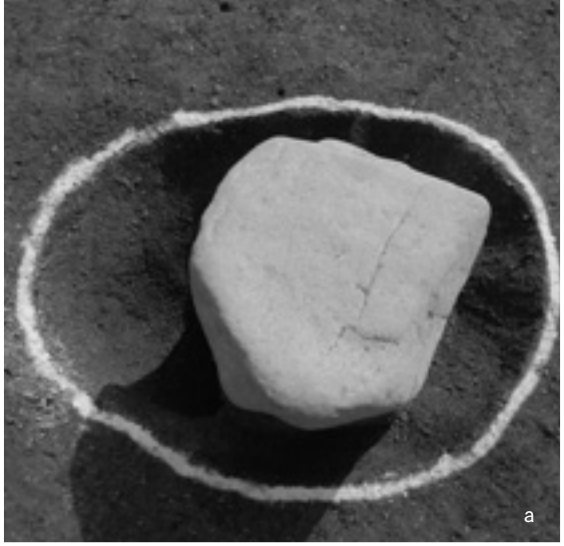
c　2014土坑（南西から）
d　2030土坑 埋土（北東から）



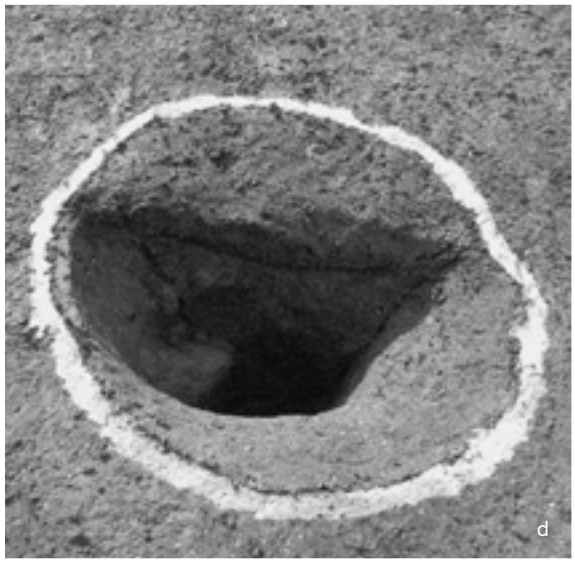
e　2027土坑（南東から）

f　2045土坑（南から）

図版17　2区　検出遺構(8)



a　2023土坑
（北西から）
b　2017土坑
埋土
（北東から）



c　2018土坑
埋土
（東から）
d　2022土坑
埋土
（東から）

e　2050土坑
埋土
（北から）

f　2046土坑
（南から）

図版18　3区　土層断面

a～d
東壁（南部～中央部）
土層断面
（西から）

図版19　3区　遺物出土状況

a　石刀出土地点（北西から）

b・c　石刀出土状況（西から）

図版20　4・5区　全景・土層断面

a　4区　全景
（南から）

b　4区　西壁
土層断面
（東から）

c　5区　全景
（北から）

d　5区
谷状地形
土層断面
（東から）

e　5区　西壁
土層断面
（東から）

図版21　鳩原西端遺跡　全景(1)

a　調査地
全景
（北東から）

b　④トレンチ
全景
（南西から）

c　③トレンチ
全景
（南東から）
d　②トレンチ
全景
（南東から）
e　①トレンチ
北西部
（南東から）

図版22　鳩原西端遺跡　全景(2)

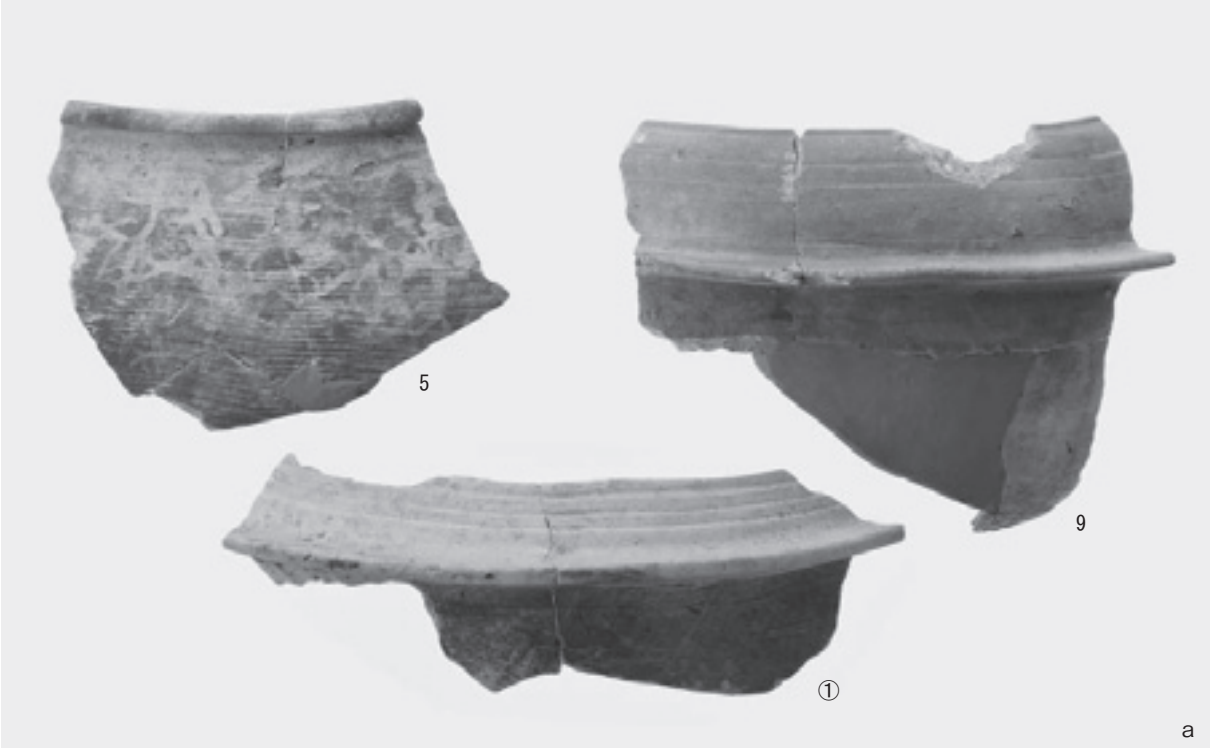
a　⑤トレンチ
全景
(南から)
b　⑤トレンチ
東壁
土層断面
(南西から)

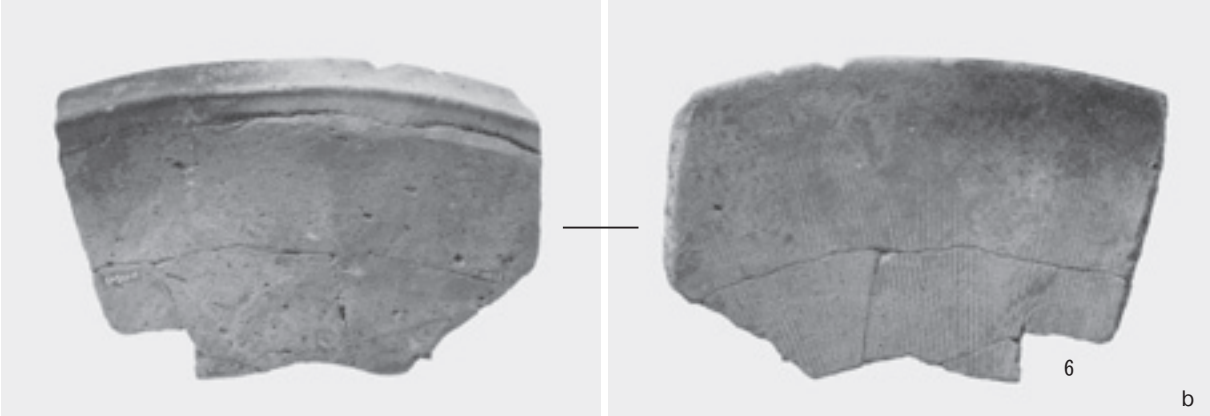
c　⑥トレンチ
全景
(西から)

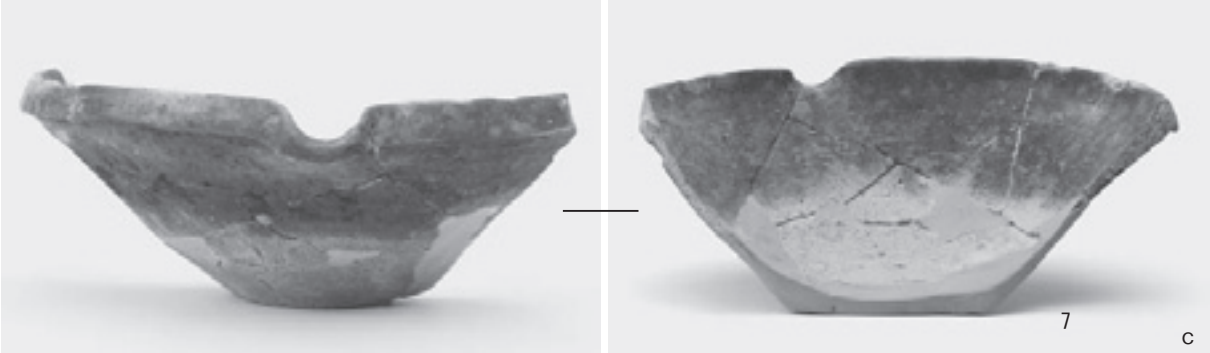
d　⑥トレンチ
上段　全景
(西から)
e　⑥トレンチ
下段　全景
(北西から)

f　⑦トレンチ
南部
(北から)

図版23　1区　出土遺物(1)

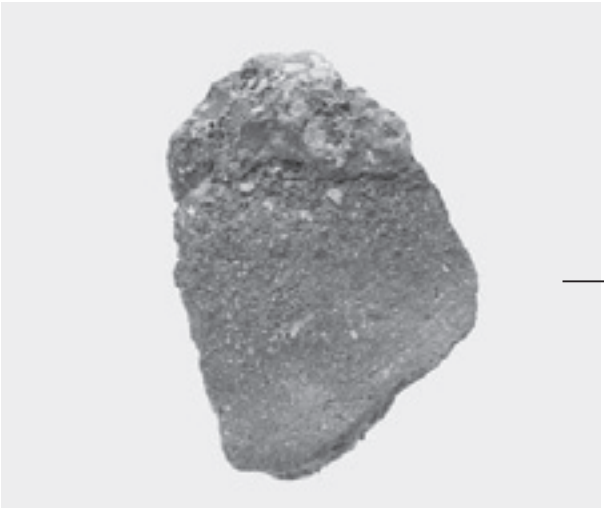




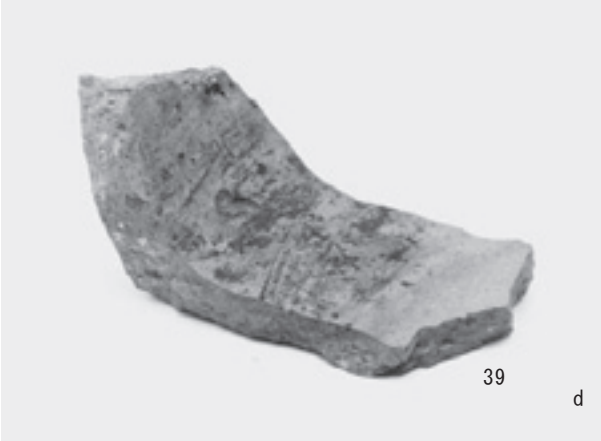


a～d
1003井戸
出土

図版24　1区　出土遺物(2)

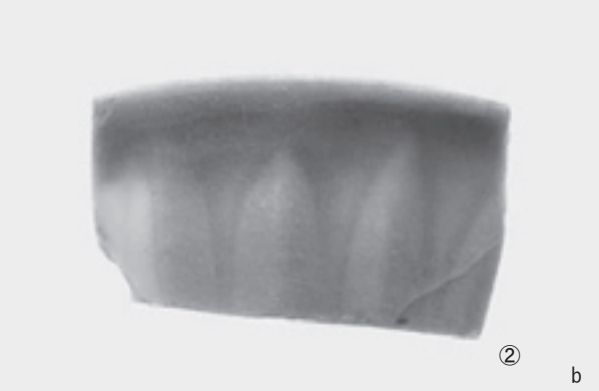


a・b
1001土坑
出土



c～e
1070土坑
出土

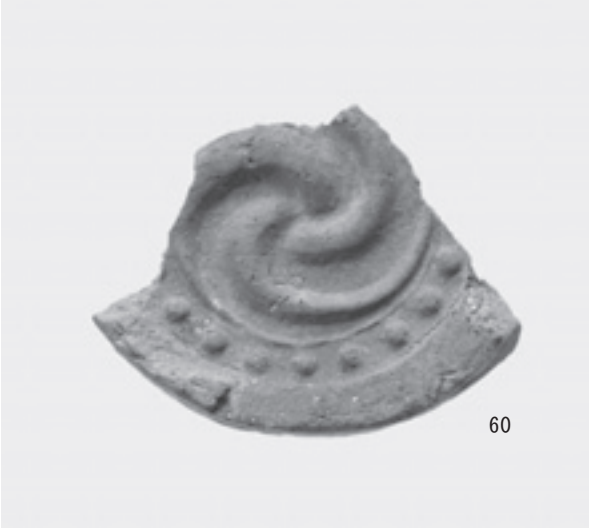
a
1008ピット
出土

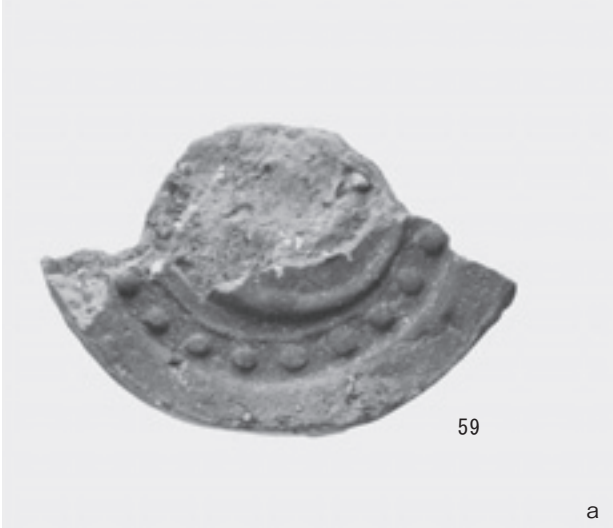


b
1078土坑
出土
c
1206土坑
出土

d
瓦溜まり
被覆土出土

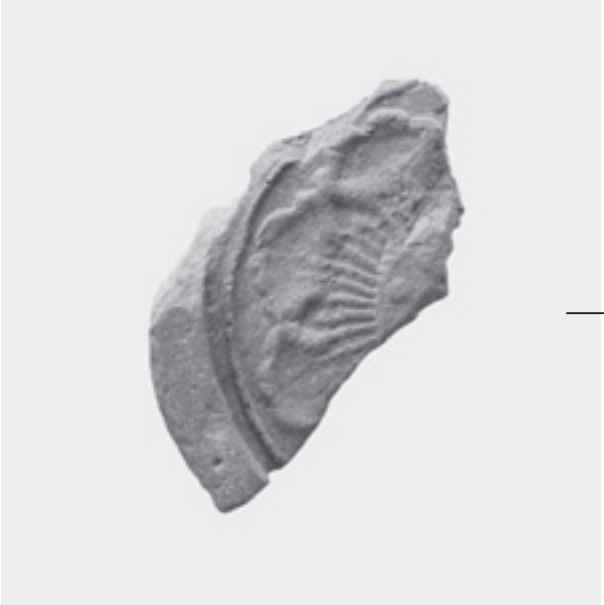
図版26　1区　出土遺物(4)





a
1003井戸
出土

b
1001土坑
出土



c～e
平面精査
出土

図版27　1区　出土遺物(5)

a・b
1003井戸
出土

a

b

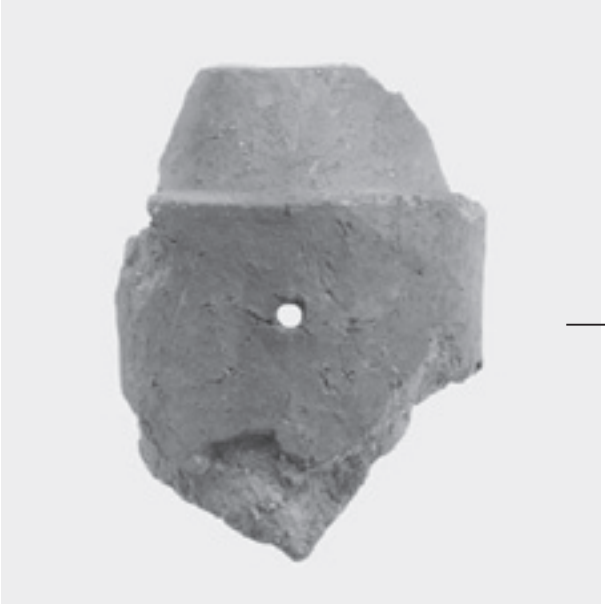
c

d

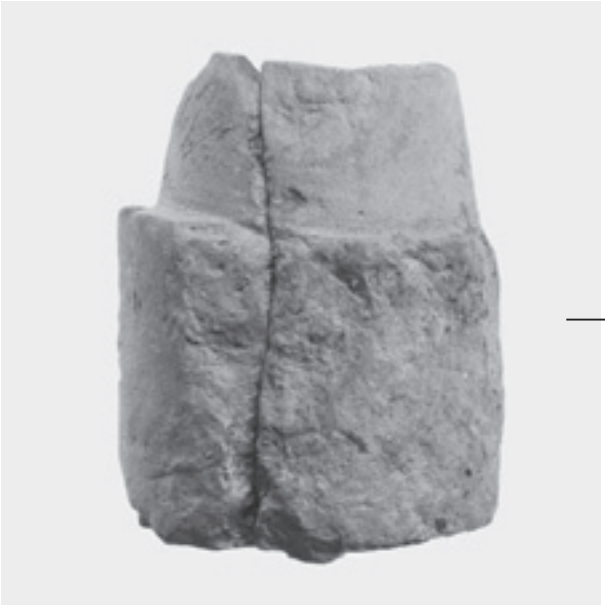
c～e
瓦溜まり
出土

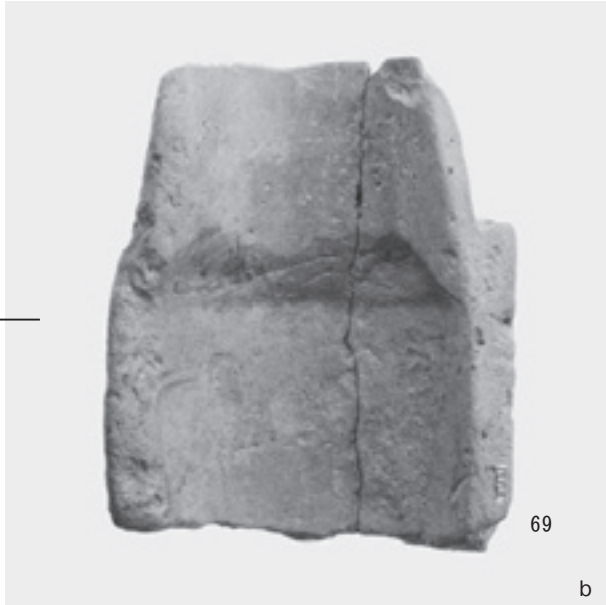
e

図版28　1区　出土遺物(6)



a
1003井戸
出土





b・c
瓦溜まり
出土

図版29　1区　出土遺物(7)

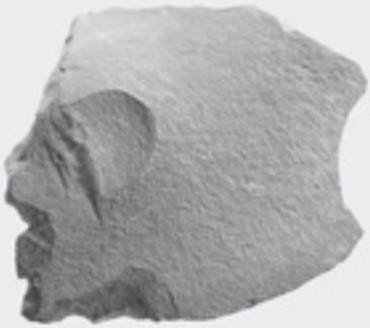
a

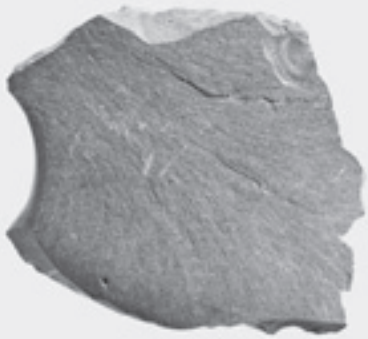
b

a・b
瓦溜まり
出土

c

c（右）
平面精査
出土
c（左）
1070土坑
出土





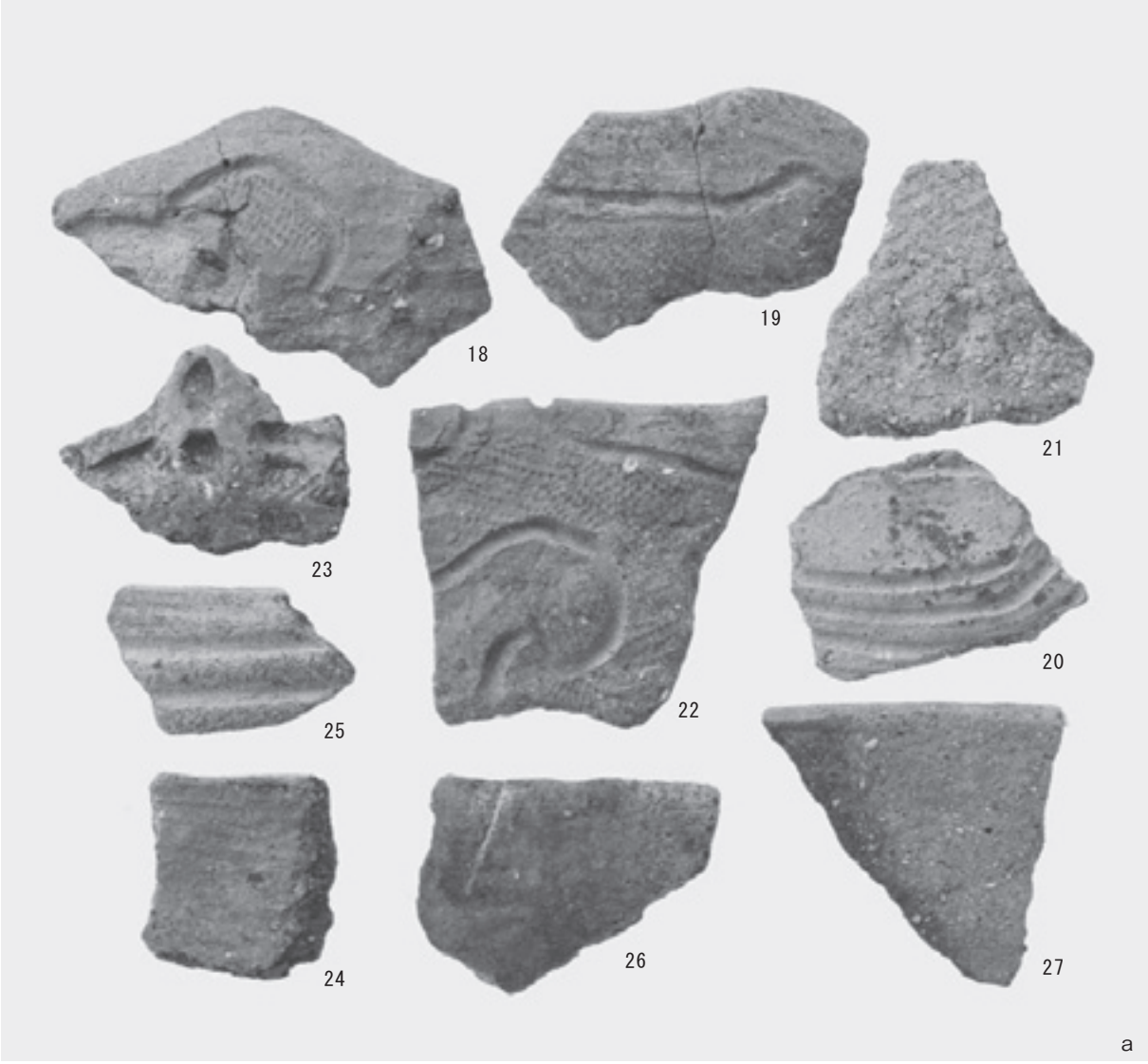
d

d
平面精査
出土

図版30　2区　出土遺物(1)　縄文土器

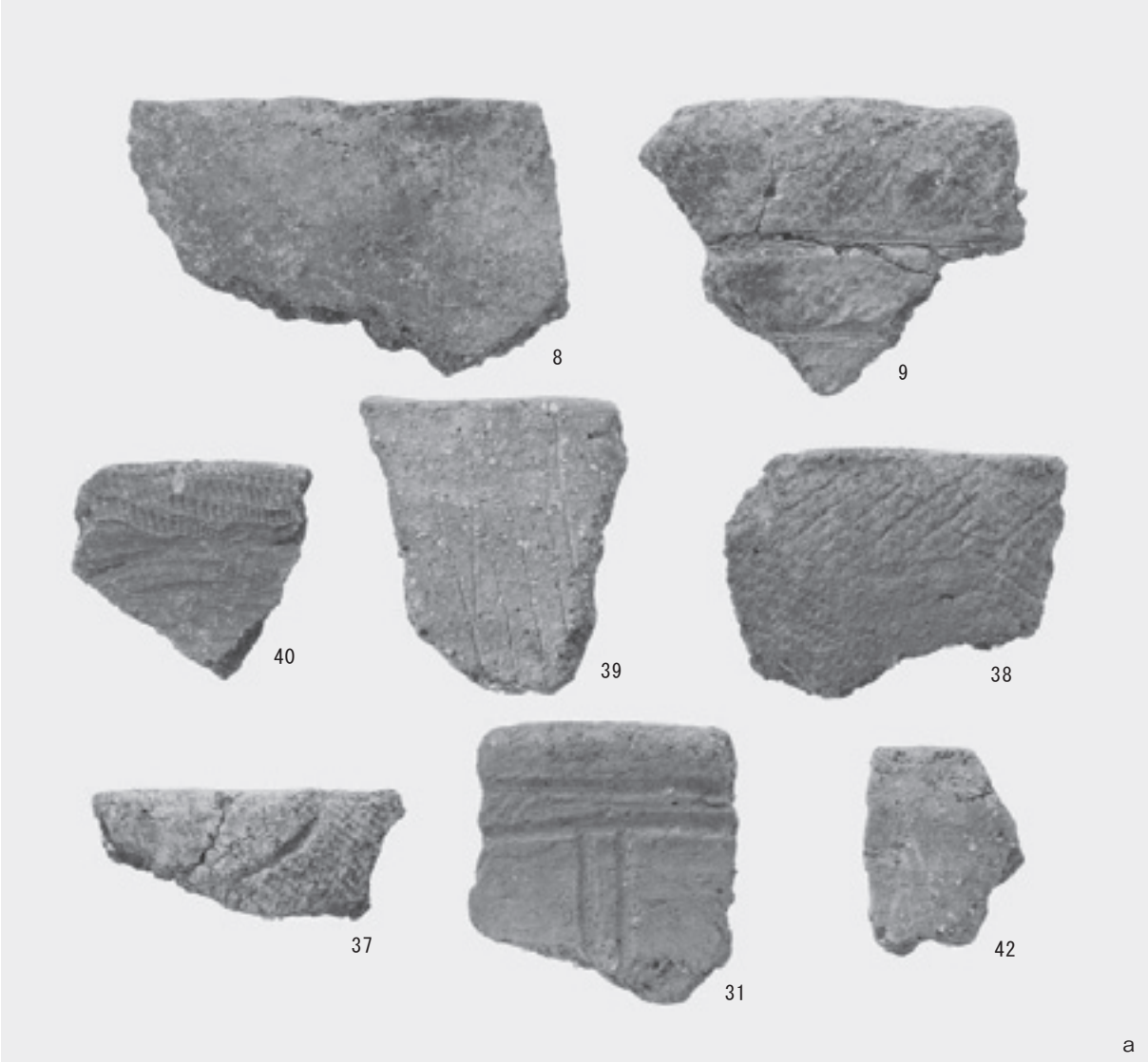
a・b
2001竪穴住居
出土

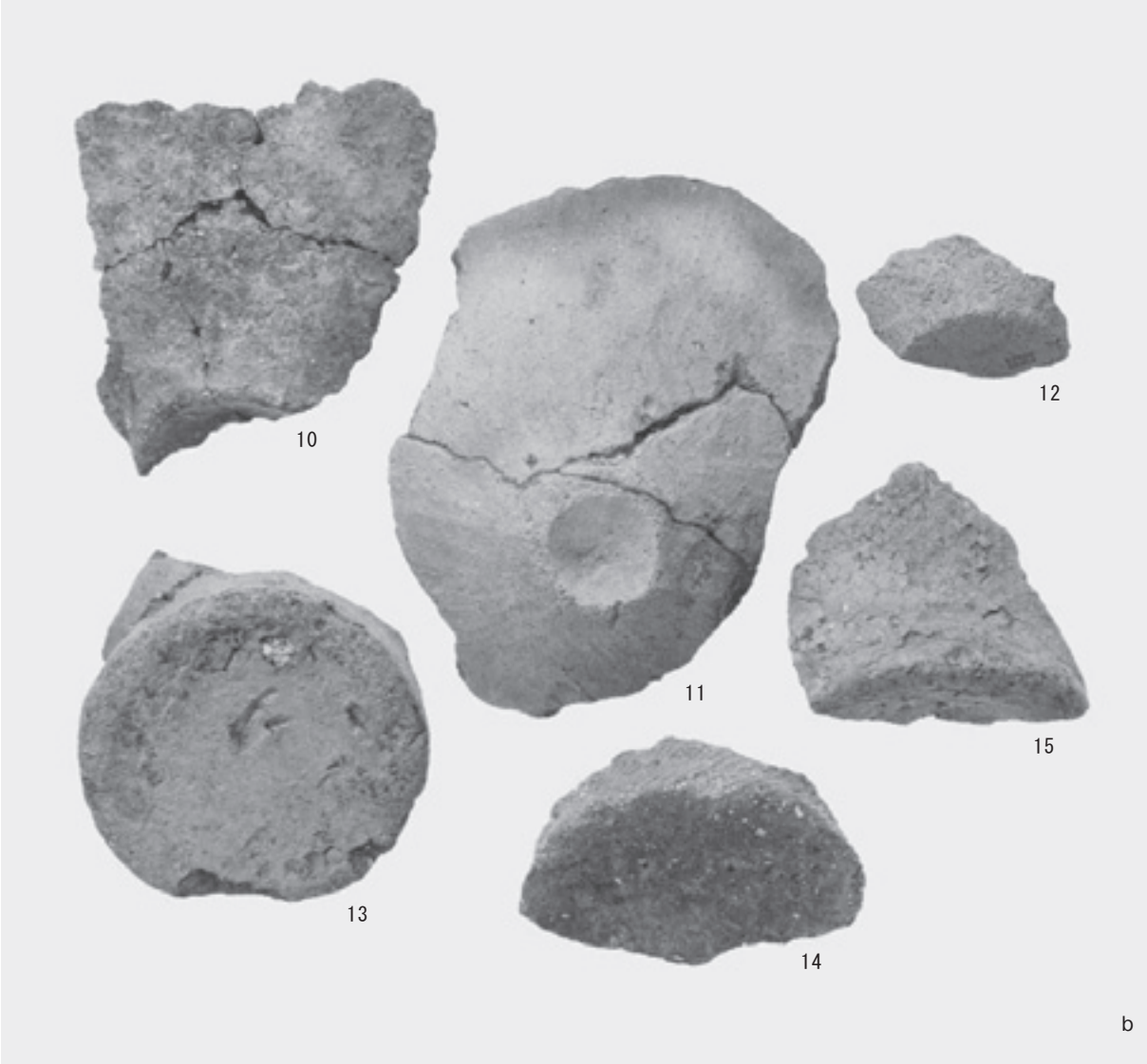
図版31　2区　出土遺物(2)　縄文土器



a・b
2001竪穴住居
出土

図版32　2区　出土遺物(3)　縄文土器

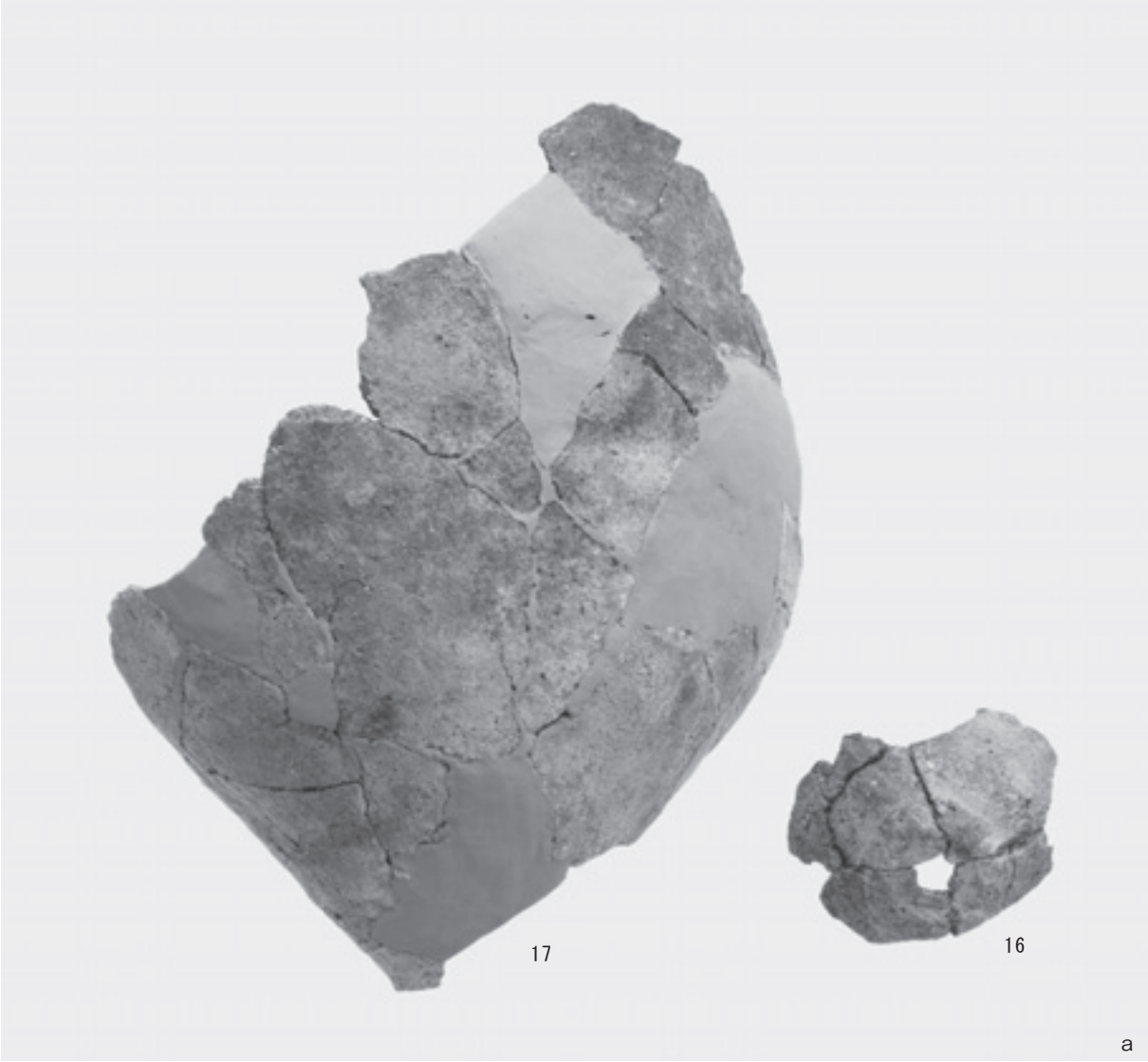




a・b
2001竪穴住居
出土

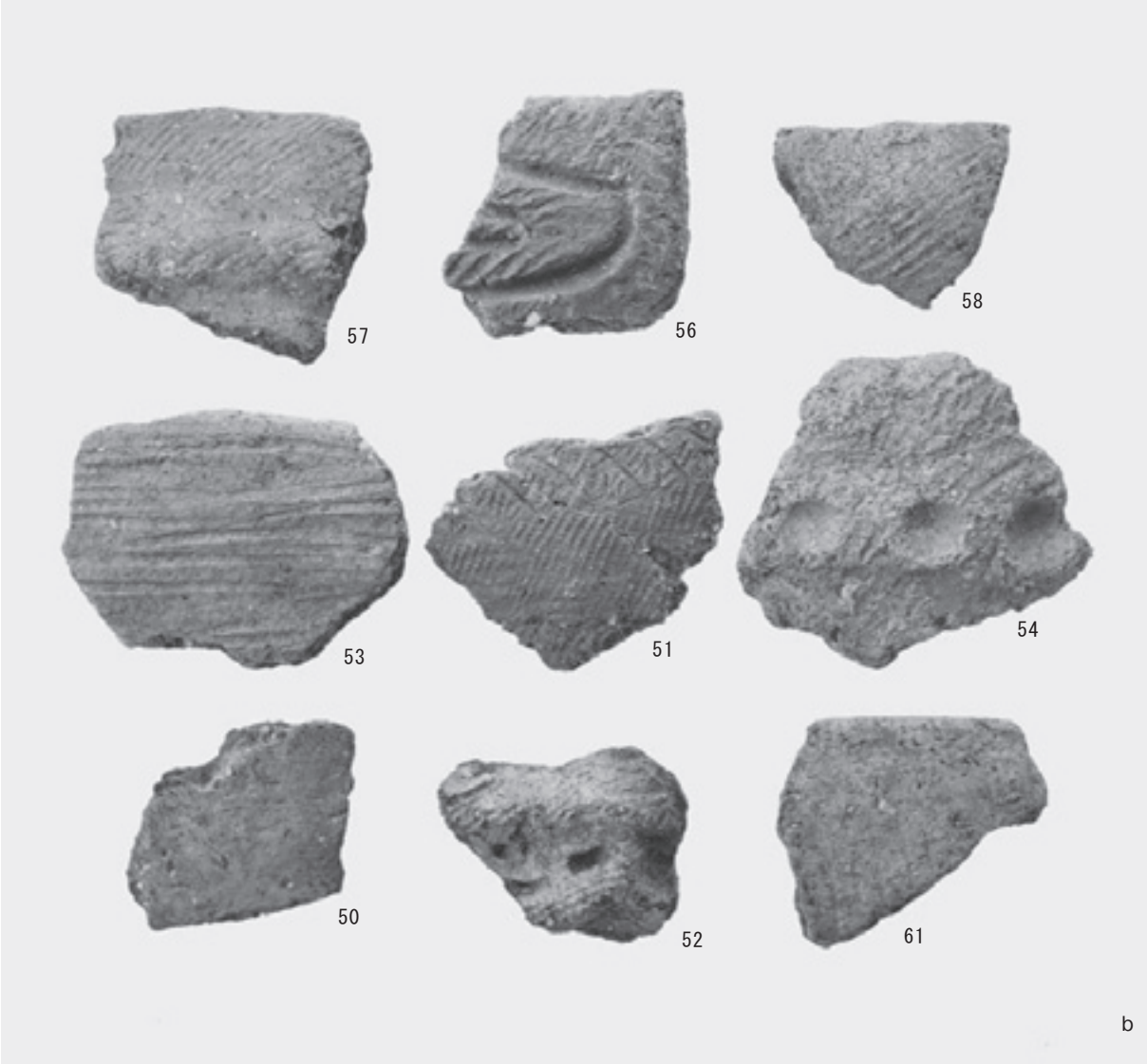
図版33　2区　出土遺物(4)　縄文土器

a
2071土坑
2072土坑
出土



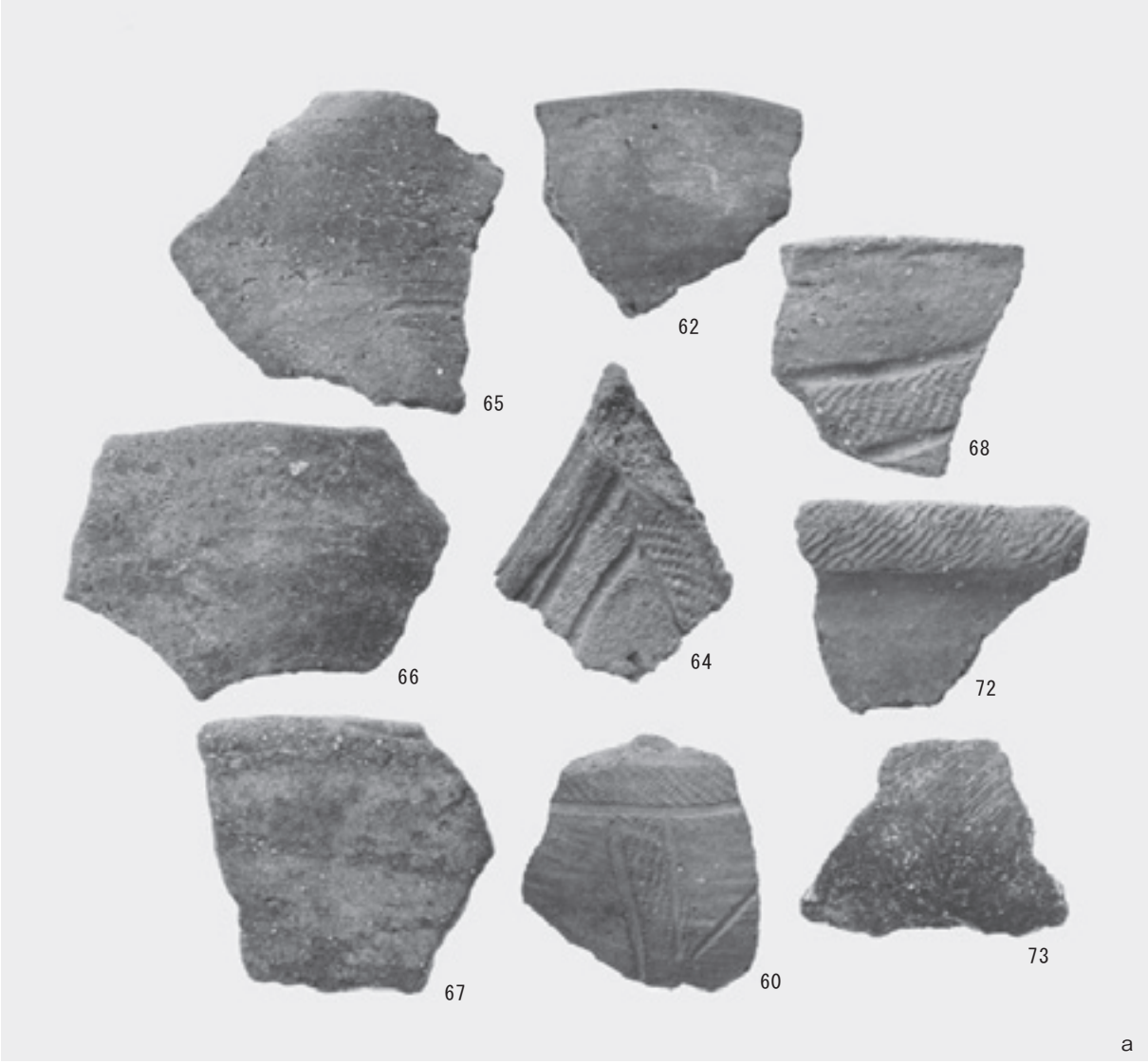
b
2068竪穴住居
出土

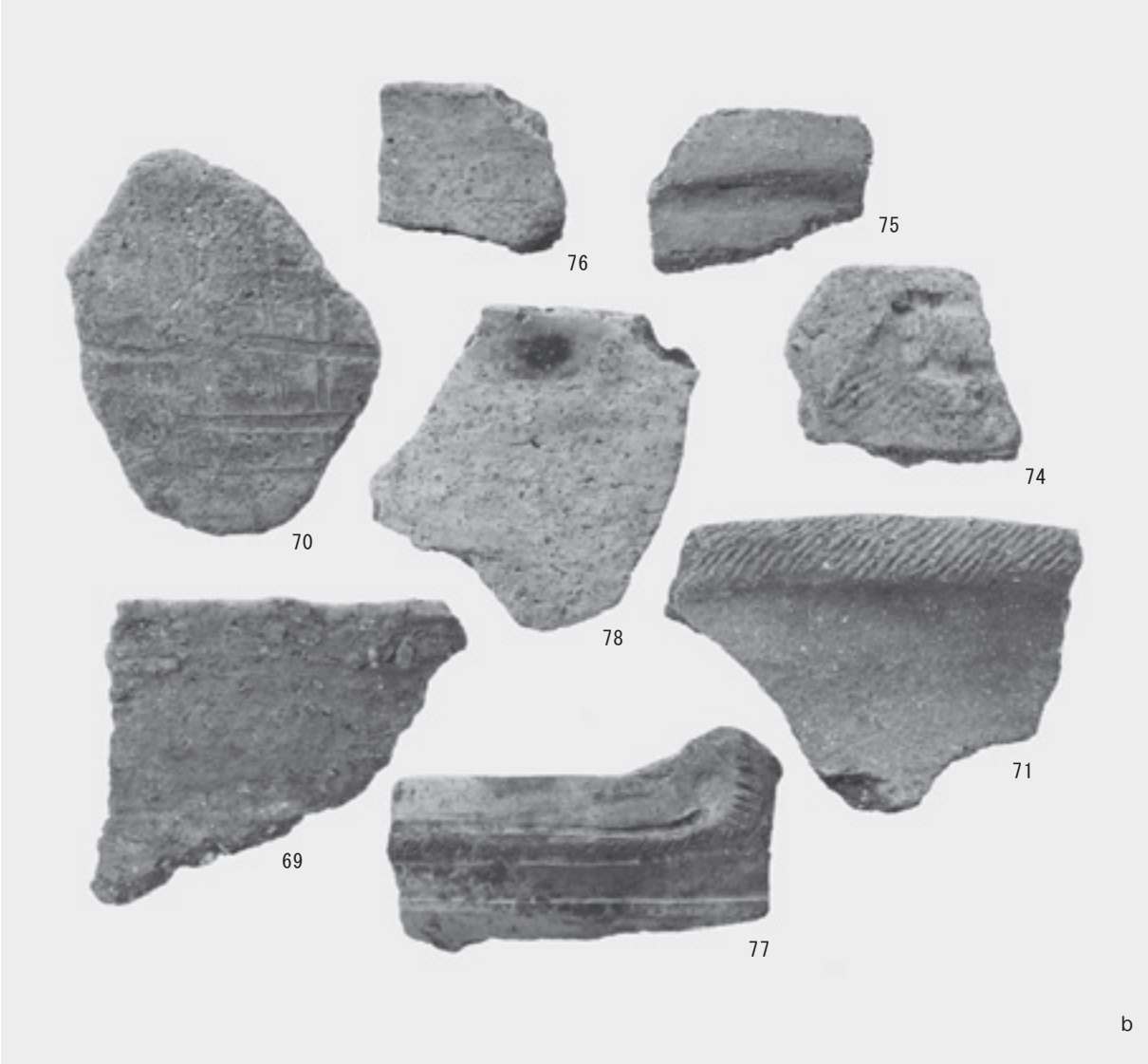
図版34　2区　出土遺物(5)　縄文土器



a・b
2068竪穴住居
出土

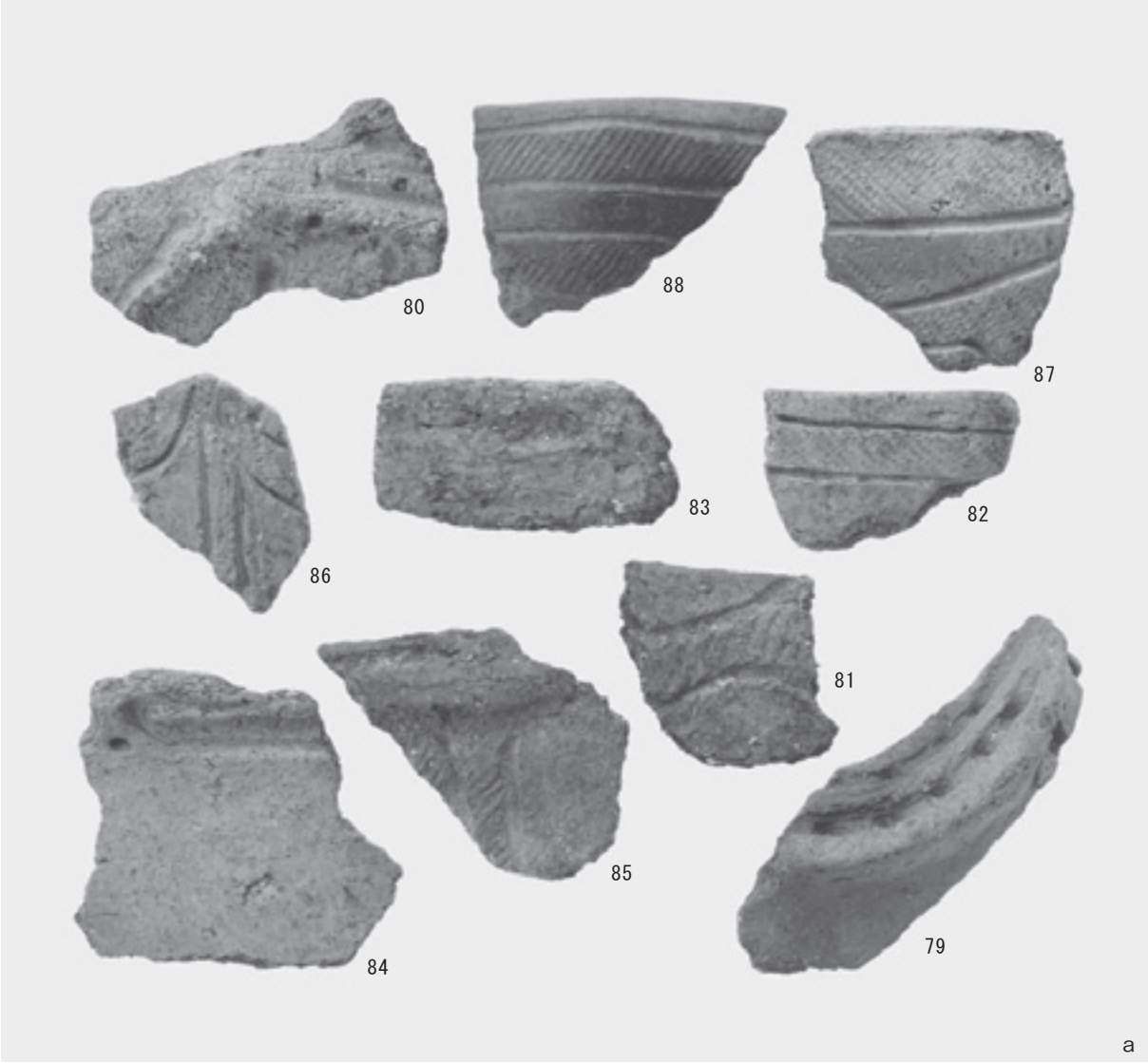
図版35　2区　出土遺物(6)　縄文土器

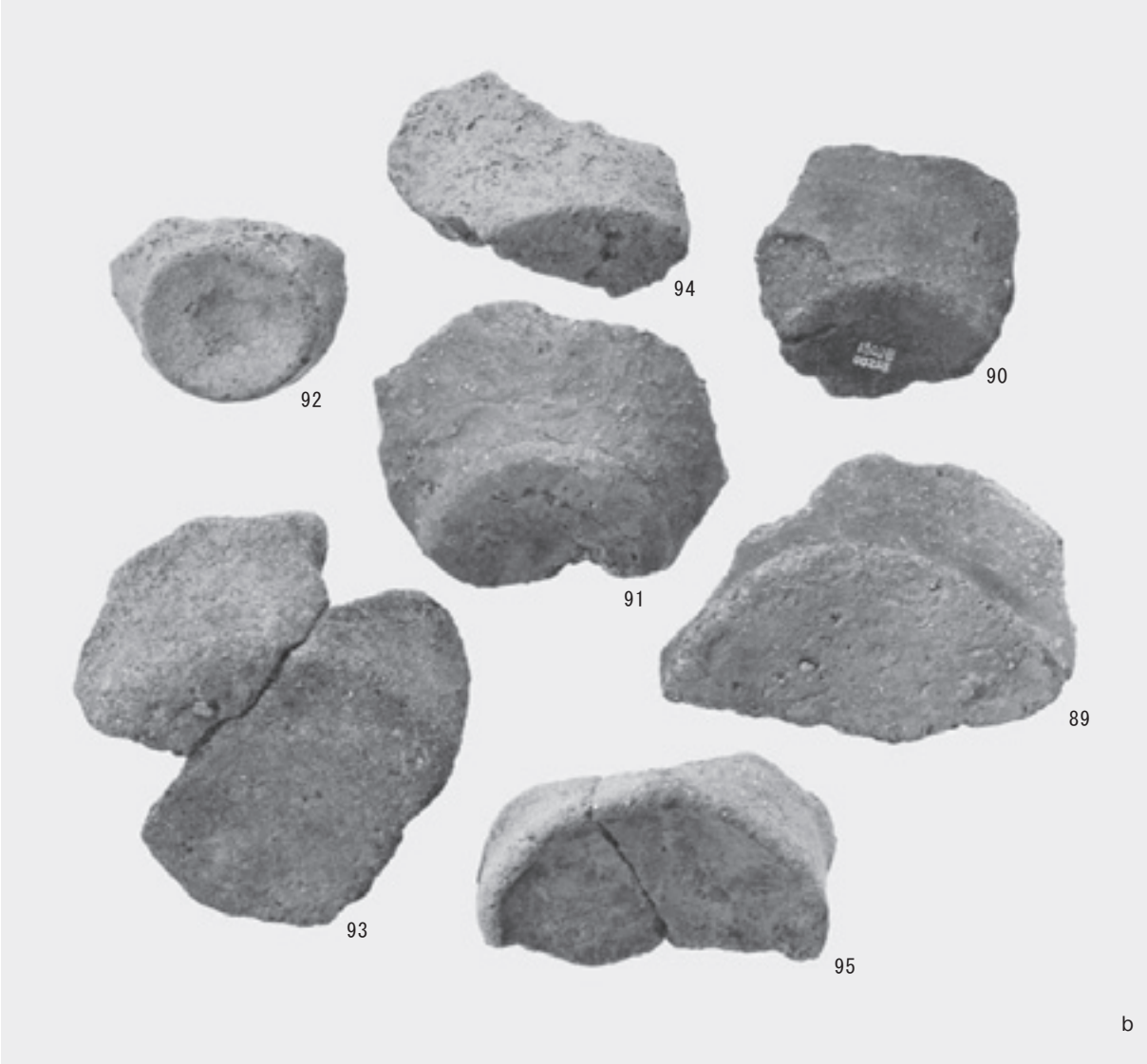




a・b
2068竪穴住居
出土

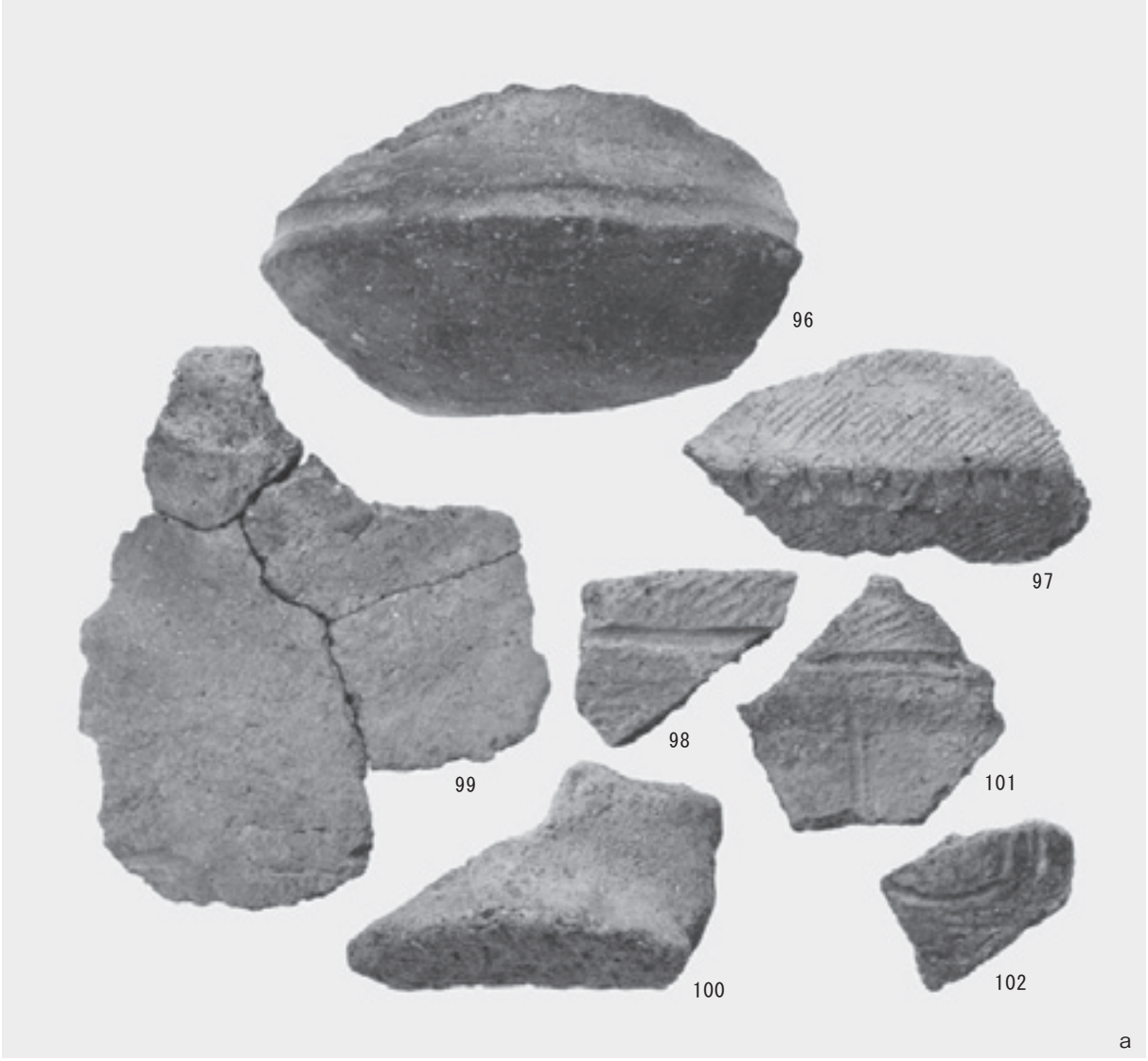
図版36　2区　出土遺物(7)　縄文土器





a・b
2068竪穴住居
出土

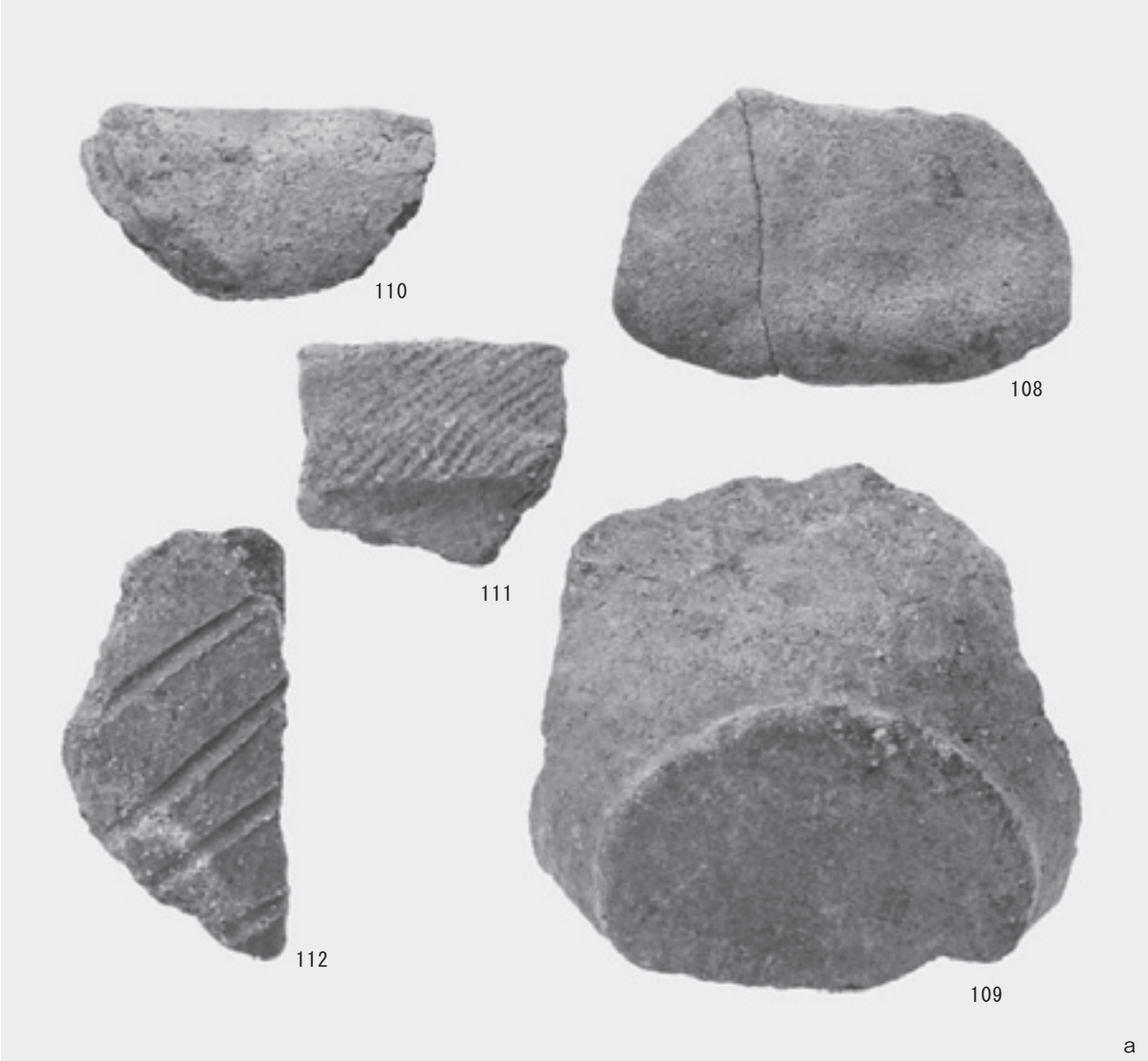
図版37　2区　出土遺物(8)　縄文土器



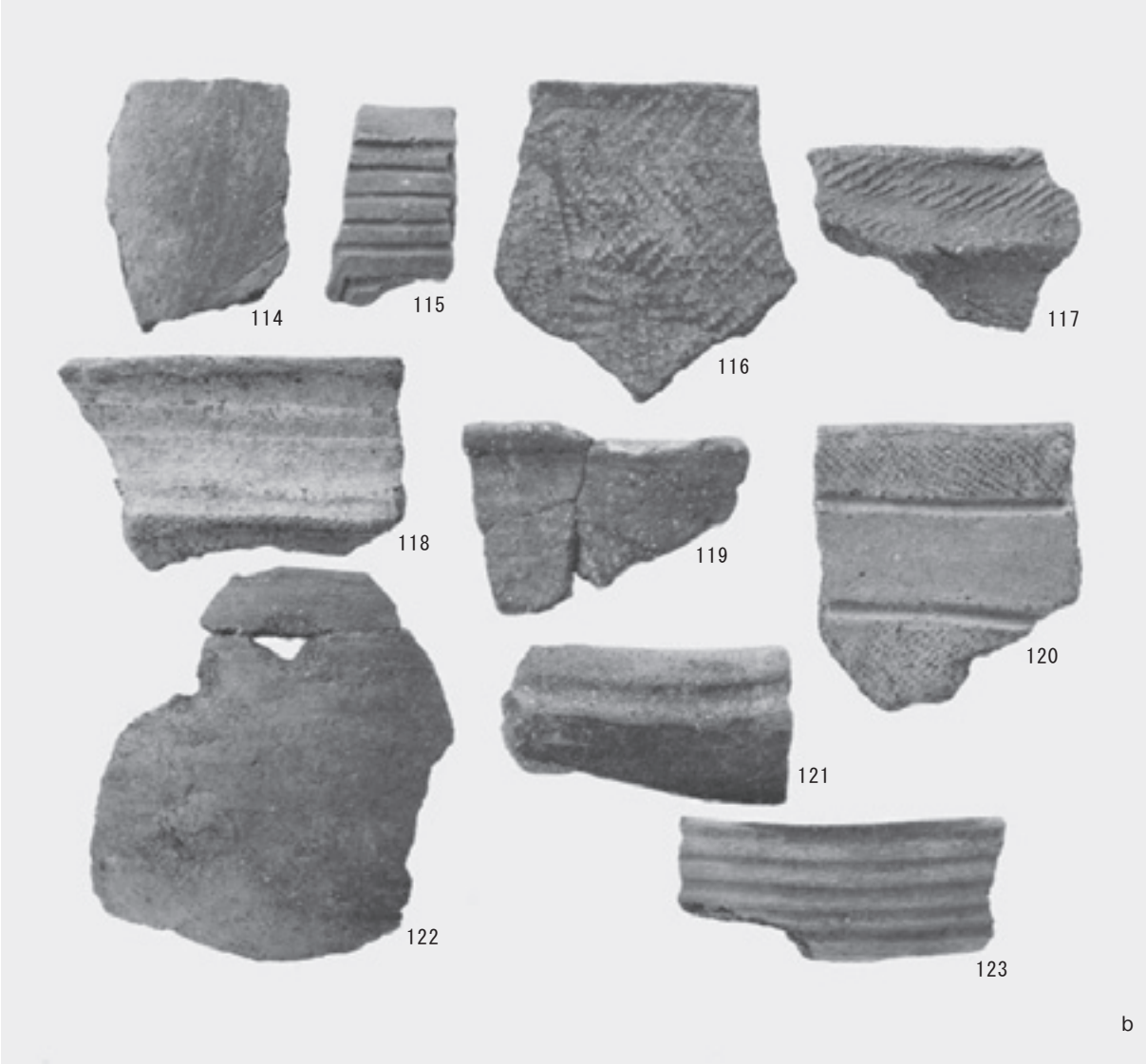
a
2002土坑
2006土坑
2011土坑
2013土坑
出土

b
2014土坑
2027土坑
2030土坑
2043土坑
2067土坑
出土

図版38　2区　出土遺物(9)　縄文土器

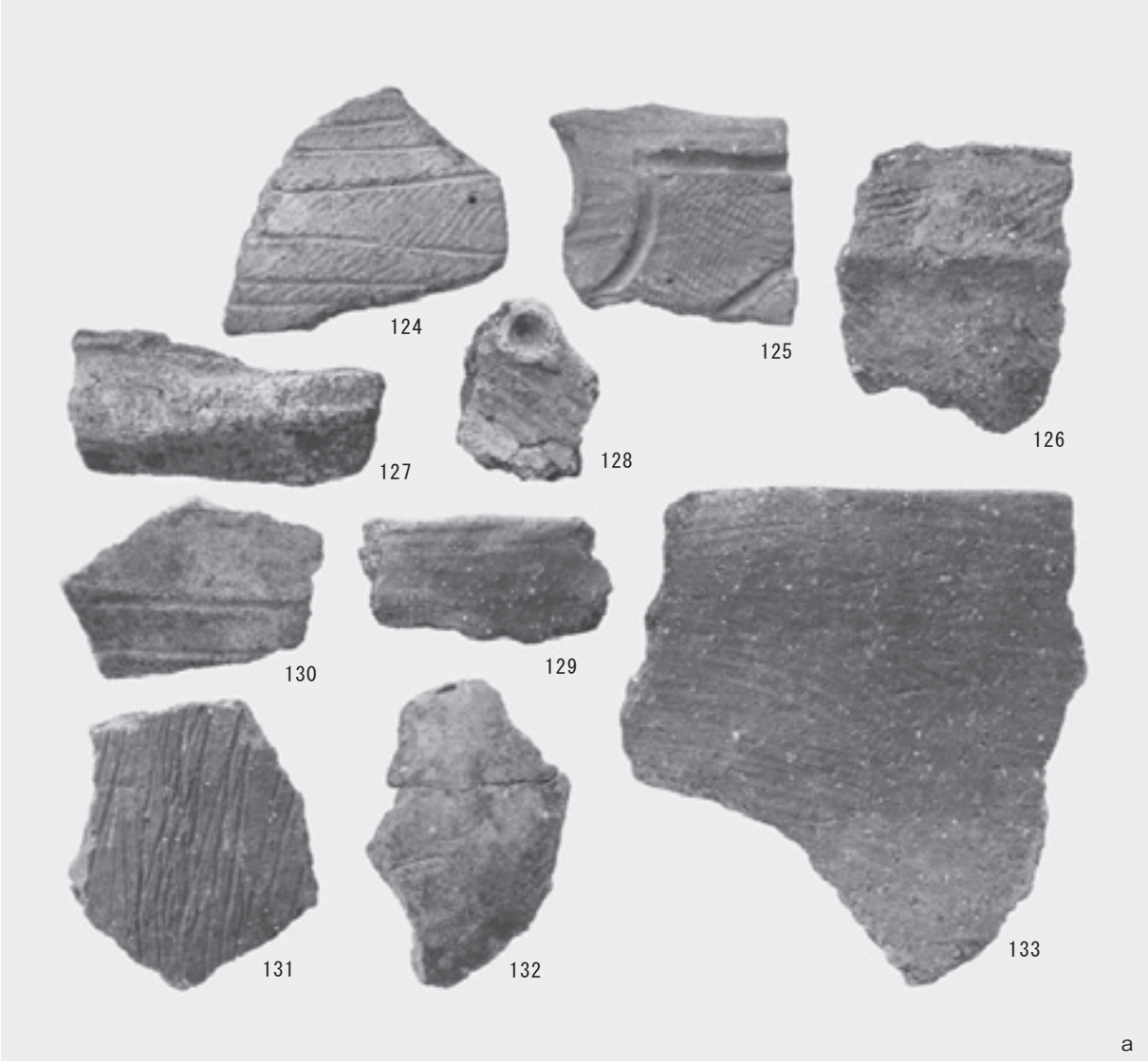


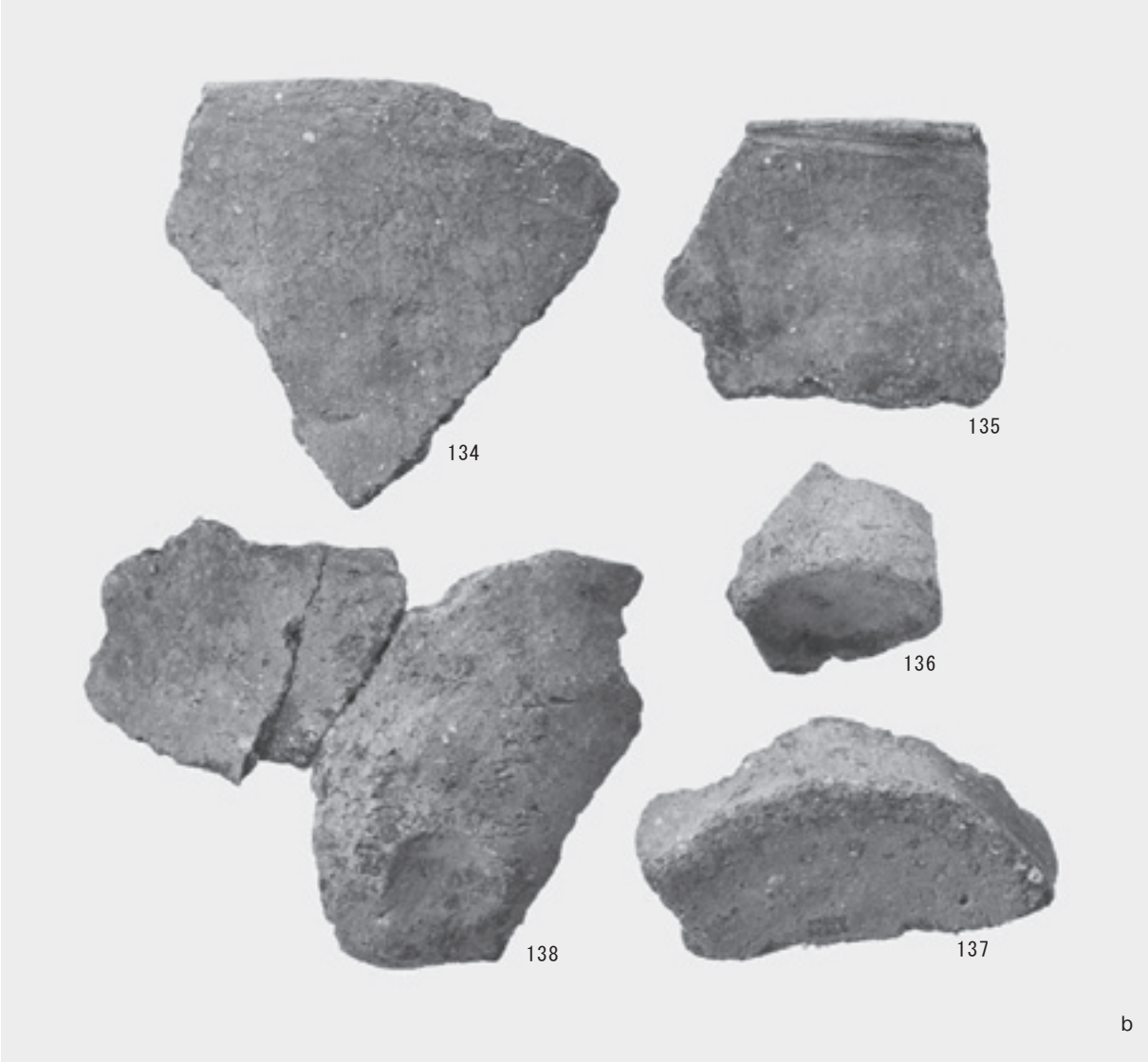
a
2046土坑
出土



b
包含層
出土

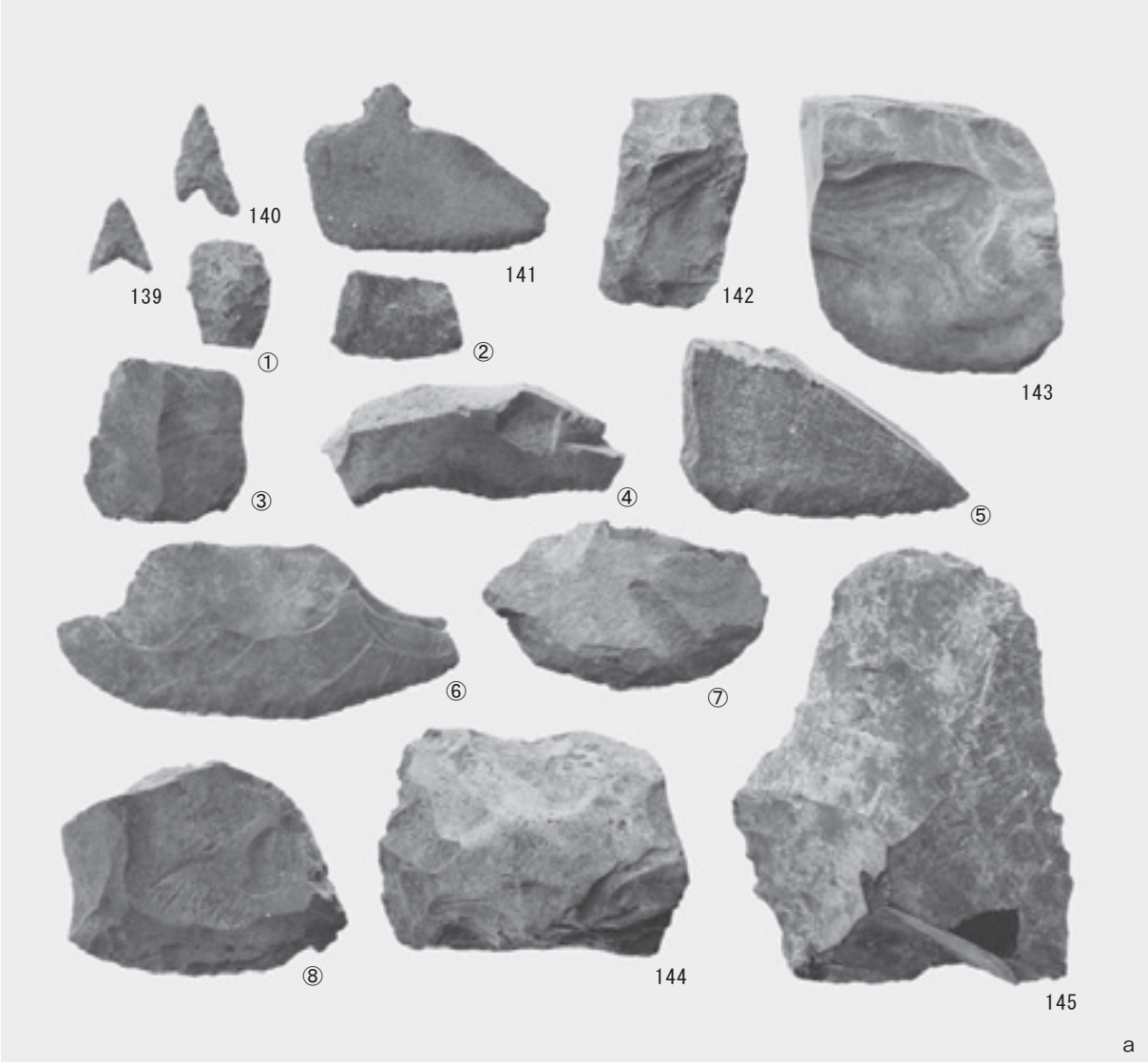
図版39　2区　出土遺物(10)　縄文土器



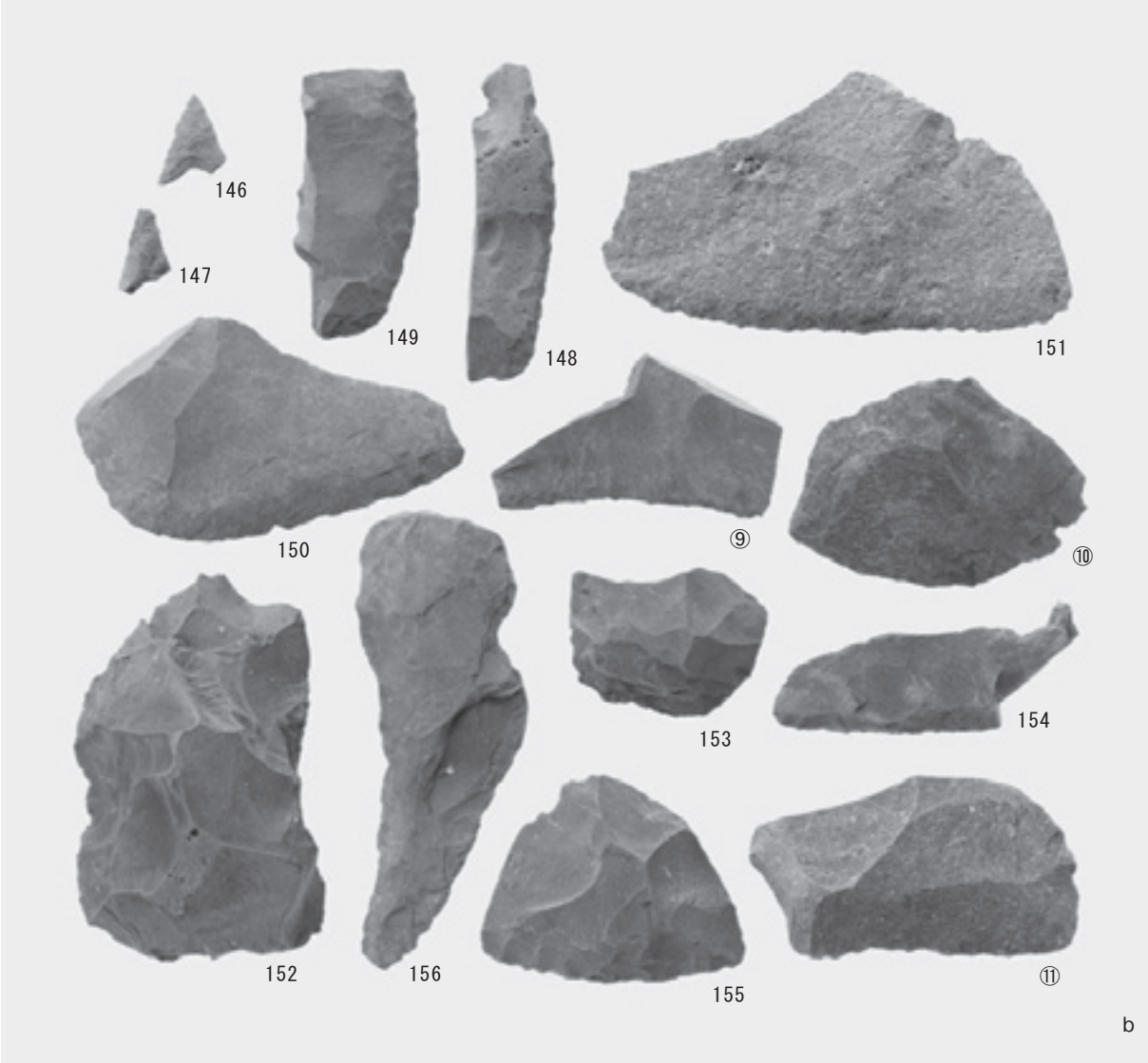


a・b
包含層
出土

図版40　2区　出土遺物(11)　打製石器



a
2001竪穴住居
出土



b
2068竪穴住居
2002土坑
2009土坑
2046土坑
包含層
出土

図版41　2区　出土遺物(12)　磨製石器

a
2001竪穴住居
出土

a

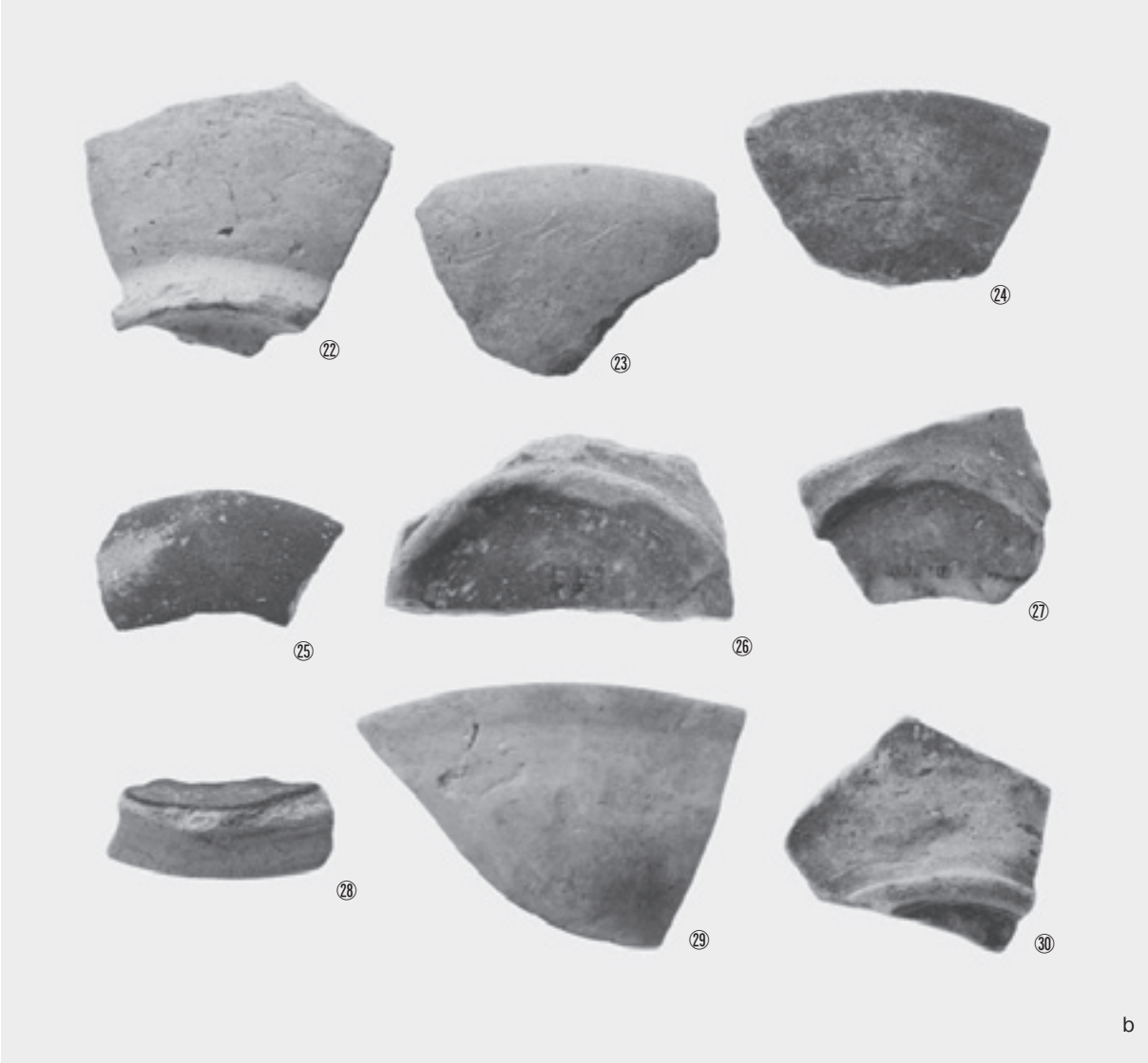
b
2068竪穴住居
2017土坑
包含層
出土

b

図版42　2・3区　出土遺物(13)　石刀・黒色土器・土師器・瓦器

a

a
3区
地山面
出土



b

b
2・3区
包含層
出土

報 告 書 抄 録

ふりがな	はとのはらいせきほかはっくつちょうさがいよう
書　名	鳩原遺跡他発掘調査概要
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	林　日佐子　小林義孝　大江綾子
編集機関	大阪府教育委員会 河内長野市教育委員会
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　TEL　06-6941-0351(代表) 〒586-8501　大阪府河内長野市原町一丁目１番１号　TEL　0721-53-1111(代表)
発行年月日	2015年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
はとのはらいせき 鳩原遺跡	おおさかふ　かわちながのし 大阪府河内長野市 はとはら 鳩原	27126	157	34° 25′ 40″	135° 36′ 29″	2013.9.7 ～ 2013.12.9	1616㎡	記録保存調査
はとはらにしはた 鳩原西端 いせき 遺跡	おおさかふ　かわちながのし 大阪府河内長野市 はとはら 鳩原	27126	9418	34° 25′ 28″	135° 36′ 38″	2013.10.28 ～ 2013.11.6	80㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳩原遺跡	集落跡 その他	縄文時代中期末～後期前葉	竪穴住居・土坑	縄文土器・打製石器・磨製石器・石刀	竪穴住居 土壙墓
		鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物・井戸・土坑	青磁・白磁・土師器・瓦器・瓦	

要　約	丘陵先端部の調査区から、縄文時代中期末～後期前葉の竪穴住居2棟、土壙墓の可能性がある土坑等を検出した。早期～後期の縄文土器の他、打製・磨製石器や石刀が出土した。 尾根上高所の調査区から、中世の建物跡の他、完形の土師器・瓦器などを埋納した土坑や井戸、鎌倉時代の瓦を廃棄した落ち込み等を検出した。

鳩原遺跡他発掘調査概要

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571　大阪市中央区大手前二丁目
TEL 06 - 6941 - 0351（代表）
河内長野市教育委員会
〒586-8501　河内長野市原町一丁目１番１号
TEL 0721 - 53 - 1111（代表）
発行日　平成27年2月27日
印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南二丁目6番8号